

に馳られ、言辭甚だ切なりし、恰も時疫行はれ、父は二人の子を失ひぬ、父はルーテルも亦死せしことを聴きしが、左にあらす安寧なるを聞き之が爲に寺院に入るを許されぬ、衷心此を欲せざりしにもせよ、餘儀なく寺院にルーテルの入るを止めざりき、

ルーテルは心欣々然として遂に僧侶の服装となりぬ、彼れは監督者の管理を受け、事業にも精神上にも支配されぬ、下賤なる勞苦も厭はずして、命の儘に働きぬ、日中大切なる事業は祈禱及び其他信仰上に關することなりし、神學は寺院中二人の學ある、教父を撰みて之れに當らしむ、教職の副長スタウビツ (Staupitz) は聖書を深く研究せよと命じぬ、是れルーテルに取りては尤も大切なる事柄と謂ふ可し、何となれば彼れの聖書即ちジエロムのラテン譯 (The Vulgate) を讀むを得たればなり、試補も終り今は實に神聖の職に就くに至りぬ、取るべき事は澤山、彼れの前に在り即ち僧侶の事業は處女マリアの禮拜神を信じ、修道院等を司さざるなり、ルーテルは良心の重荷より罪惡脱離せんが爲めに懺悔室に常に入りぬ、而して彼れの脱離せられんと欲せし罪とは世俗の慾や利益にあらすして寧ろ彼れの同胞に對して抱く

憤怒憎惡猜忌等にあり、彼等の罪は當時の教父には些少なりしも、ルーテルに取りては實に懼然の感を抱けり、されば彼れは祈禱斷食徹夜の方法によりて罪を逃れんと企てぬ、此れが爲に後數年間身體上煩悶せしことありき、此時代に在りては彼れ尤も勤勉にして常にウイリアム、ブツカムの書を愛讀せり (William of Ockham) 然りと雖も此等の學を做す間にも彼の心を去來するは如何にせば永遠救拯に罪人は列するを得可き哉と云ふにあり、聖アウガスティンは一千年前に曰く、此人間には能はざる處唯だ神の恩恵を蒙るの途あるのみと而して更に大なる使徒ポロは四千年前に於て同じき事を教へ置きぬ、ルーテルは此理想に到達せんがために二年間平かなる能はざりき、彼れは實に當時律法の弟子なりしことを云へり、即ち善事業間斷なき勞働廢耗したる毛布の褌衣、自捷斷食の弟子なりしなり、然りと雖も此等のことは毫も精神に安慰を與へざるのみならず却て肉體及び精神上大なる煩悶を來たし、遂には死せんばかりになりぬ、此時ルーテルの師は更に進んで罪の許しを獲んがために聖ベルナルド (Bernard) の書を読むを勧めたり、然れどもルーテルに真正なる勢力を與たへたるは實に修道院にあるスタウビツ (John



Von Staupitz)なり其人となり精神的にして聖句に明かにまた此れを日常に應用なし他人をも斯くなさしめんと欲せり此人はルーテルに教へて曰く惟だキリストによりて罪の許を獲べしとスタウピツとルーテル二人は終年交を結びぬ常にルーテルは此師のことに及ぶごとに丁寧温和なる言語を以てにあらずんば師の事を言はざりき

一千五百七年五月二日ルーテル長老の位に上る此嚴格なる儀式の場に父も招待せられぬ父は其招待に應じぬハンスルーダーは此時もなほ其子マルチンが僧侶の生涯を送るに至りしは悪鬼の靈によりて成されしとの深き信仰を抱きてありたり彼れは僧侶等に語けるは己れは飲食を僧侶等と爲たるも寧ろ家にあり更に盛筵を成すを喜ぶとルーテルは日々僧として神前に奉事するを以て己れの目的とせりされば第一聖盃のときにルーテルは辛ふじて祭壇に留まりし程神に對する敬畏の念盛んなりき然しながら彼は固く聖徒等に熱心に奉事し日々の禮典をも行へり其方法たるや聖徒等の人名を記したる曆書中より己れの懇請する二十一人を撰び毎朝三人を撰び以て一週の内凡てを撰ぶの豫定なりルーテルは

今や教父の職を冠せられぬ然も彼は依然として施物を受けんがために同僚等と共に戸外に乞へり後ち此の如きことを廢し専ら彼れの嗜味才能に適したる事を命せられたりと云ふ即ちウイデンベルグ(Wittenburg)大學教授として派遣せられし事なり此の最新なる大學は千五百二年撰舉公フレデリックの爲めに設立せられたるなり此大學教頭スタウピツ千五百八年の冬期初旬彼に命じて新大學の哲學科講座を擔當せしむ然れどもルーテルに取りては最早哲學に嗜味を置かざりければ自ら勤勉して後神學科を受持つに至れりルーテルは修道院の利益を謀んが爲に羅馬に派遣せしめんが爲にスタウピツに推薦せらる途六週日を費やし歩行にて組をなして行きぬ其扮粧極めて質朴斯くして世界の市府法皇の住ふところに着しぬ此行彼れには最初なりし其結果は如何にてありしかは別問題として彼スタウピツの願望に適したるや明かなり吾人は彼れの今ルーテルの心事を説かんに彼れは地に平伏し永遠の市府を見て曰く嗚呼祝すべき哉聖なる羅馬よと後年彼れは記載して曰く狂せんばかりの聖徒の如く巡禮して市府を視察し教會堂古墳を訪ひ尋ね其他に熱心に信仰を抱きし彼れは煉獄の苦より或る方法にて



父母を救はんとて父母の死を欲ぞめり然れどもルーテルは羅馬にきたりてより見聞するところおほいに心を動かすものありき即ち彼の高位に在る僧侶の不道徳や又神聖なる名を以て事業を以て爲すべきものを輕薄の念を以て做すが如き又教會にては欺偽の信仰を説明するが如き又僧侶によりて執行せらる、聖餐式も徒らに滑稽に過ぎざるを見てルーテルは慄然として畏れたり此の訪問の間彼れは有名なる神聖の階段(St. Stephens)を膝にて歩ゆみ祈のりしつ、登りたり此れ神聖市府に來る巡禮者の做す處に倣ひしなり彼れ此の階段を登る度毎に使徒の聖語耳朶に徹しぬ即ち義人は信仰によりて救はる可しとなり其後ルーテルは公言して曰く余は十萬フロリンと代へても羅馬に來りしを喜ぶ若し然らずんば法皇に反抗しても幾分か衷心満足せざりし處ありしやも圖り難しと彼は此訪問の間にレオ十世の計畫に係る宏大なる聖彼得會堂の建築を目撃せり而して此の建築を完ふするが爲に赦罪券の公賣行れぬ是れ教皇とルーテル論争の種を蒔けるものなり

ウイタンベルグに歸るや彼は教頭の椅子を占めぬ彼れは教授の任を辭し單に教

職上の事務に耽らんとせしが以前より彼れの説教を聴聞せしとある撰擧公フレデリックは博士の位置を得るの費用を支出せんとせり人生知己に感ず流石にルーテルも之を辭する能はず千五百十二年十月十九日神學博士に上るルーテルは此時より詩篇の説明を創めぬ是れ實に吾人に殘せし彼れの最初の著作なりしなり彼れ白狀して曰く余は深く詩篇に通達せず曷んぞ完全なる註釋書と云ふを得んやと而して吾人は彼れが舊約書を讀むときには彼れが屢々聖保羅聖パウガスチンの書を参照せるを見るなり詩篇より次ぎに聖保羅の書翰殊に羅馬加拉太二書に移れり是れともに神の恩惠慈愛を説きしもの新信仰に入るの根基なり彼れ大學の職と共に今はまた實際的に説教者となりぬ彼は或る時には全一週説教をなすとあり或は一日三回なすことも少なからざりき一千五百十七年大齋日の間大學講話をも合せて一日に二回説教せり此れ非常なる感化を人々に與へたり彼れの説教の態度は實に少時より戦争の態度なりき此を以て彼れは能く法皇教政に對するを得たりき信仰によりて義とせらる、の争論は注目すべき者なりルーテルに取りては唯一の武器は信仰なり唯一の信仰なり此れ眞に神と交はるを得



べきの道なりと、凡そ人は皆な外形の働作によりて罪を深くし又神より恩恵を受くると能はず、神の赦罪の恩恵慈愛は救拯の福音を信するにあり、即ち其聖子により贖罪に依れるの福音を信するにあるのみ、

千五百十六年ルーテル中世紀の獨乙神秘派の學に熟知するを得たり是れ吾人が既に記載せる改革の先行者たる敬虔にして人を感化する力を有するトラー(Triller)の書を讀みしより初まる實にトラーの説教集は深くルーテルを感化しぬ、彼は一友に書翰を送りて曰く余は福音に就きて尤も信仰に富むの他書あるを見ずと、神秘派よりの他の小冊子はルーテルにより著はさる、其をルーテルは彼の國民の爲めに獨乙神學の名目を以て千五百十八年に刊行しぬ、千五百十六年及十七年に彼は十誡及主の新禱に關する説教課程を彼れの都府に在る會友の中に廣布す、此の課程には基督信者の宗教に關して所説せり、千五百十七年彼また詩篇中悔改に關する七章を撰び註釋を施して刊行せり、是れ刊行したるもの、中最初のものなりし、而して獨乙語にて刊行したるなり、彼は恚る神學に關する建設的著作に従事せる間に彼れはなほ破壊的性情を幾分か現はせり、彼れの時間と勞力の多く

を消費したるスコラスチズムは眞理を解明するよりも寧ろ彼れに取りては暗黒ならしむるものなれば、今變じて攻撃の態度を拂ふるに至りぬ、中古の神學を建設したるアリストートルの哲學は劈頭第一に駁撃せざるべからざる域に逼りぬ、然も學者等顯然明かにアリストートルを瞭解せんともせざりき、而てルーテルは基督教神學に及せしアリストートルの實際力を認識せざりし如く、人々の思想や智識發達上に及ぼせる此の偉大なる哲學者の價値を明かに認識せざりしもの如し、ルーテルは煩鎖派の神學をアウガスチンの神學と對照せり、彼れは斬新なる進歩が新説を以てウキテンパーク或はエルフワルト若くは他の智識ある獨乙國より起りしを喜べるもの、如し

吾人はルーテルのエルフワルトに學生たりし時、人性學者(Minists)と往來せしを見る、彼れの福音的神學に關する進歩ある教説は同じく人性論者の見解としても遙かに勝る處ありき、されば當時著名の伯來學者たるジョン・リュークリン(John Reuchlin)猶太人の學者的の書物を灰燼に歸せしに反して、新教派に對しての一の異端者として玷辱せられし時、ルーテルは揚言して曰く、余の心は驚然として言を



發する能はずと然しながら人性論者の優者にして智識上の方面より改革の動機を運轉鑄型せんに最とも力あるは實にエラスマスなりとす(Erasmus)精神の精練學力の淵大倦怠なき勉強は多く匹儔を見ずさればデシデアス、エラスマスは千四百六十七年ロッターダム(Rotterdam)に生れ千五百三十六年に死す彼れは當時材能ある學者なるのみならず神學に於て實に稀有の學者なりき彼れは煩鎖哲學攻撃方面よりルーテルに賛成し而して基督教の智識は原語の新約全書より出づるを主張したり彼は中古の一層通俗記者に比して上古の著者の遙かに勝れたるを稱道せり而て彼れの聖經の註解(Paraphrases on the Scripture)によりて聖書的批評の歴史に新紀元を刻しぬ然りと雖どもエラスマスは熱誠の人物ならざりしがために宗教の奧妙熱性を缺けり此れありしならんには彼れの性格の調子及び聖經註釋上の方法に付きて一大勢力ありしなるべし彼は熱意文學に心を委ねぬ彼れは僧侶の無學にして狹隘なる精神を憚るなく非難せり而してまた教會の信仰儀式につきて大なる改革の必要なることを布告せること一回に止まらざりき然れども教皇權に對する防禦は實に彼れの著作によりて功ありたるにも係はらず事の

危きを見ては彼はルーテル、メラクソン、スウイングリ一の如き勇敢なる改革者と離れ中庸の位置を占たり此れ寧ろ積極的反對に近きなり此時千五百十六年に彼は説明的義解を附したる譯解註釋の新約全書の有名なる出版をなせりルーテルはエラスマスの秀れたる材能實力を認識しぬルーテルはスパラチンに送りし書中吾々のエラスマス(Our Erasmus)と記せり然りと雖どもエラスマスは獨立の地位を占め萬事改革者等と事を共にせざりきルーテルはエラスマスの著書中人性の罪惡に關し信仰によりて義とせらるゝとに關し保羅の有せし根本的教理を缺きを悲しめり又エラスマスが教會の過失攻撃せる嘲罵的態度を悲しめり、ルーテルは思へらく此等の惡弊はキリスト教徒に取りては不幸の大根源なりとせり既にして苛酷なると惡意あることがルーテルの言語著作によりて初められたりされど未だ西方教會の儀式教法につき反對すべきことは彼の心に起らざりし彼は迷信的説話や聖徒禮拜に關しては重きを措かずなりぬ而も尙ほ神と吾人とを中裁なすものとして殊別なる聖徒に祈りぬ又處女マリアを講壇上より呼びたり彼れは思へり教王の神聖なる職位及教王政治及教會の動かすべからざることは



實に當然にして最も神聖ならざる可らずと彼れは何人にてても僧侶に罪惡を白  
 狀なし其れによりて赦罪を獲るが如き又た凡べての告解法によりてなされる可  
 らずと信んじたりき彼れは教會教理以外の此等の惡弊を論争することにてあり  
 き。  
 而して蓄貯したる暴風は此處に破裂するの時は近づけり其の動機は即ち赦罪券  
 の恥づべき販賣なり此を以てレオ十世當時建築中なりし聖彼得教會堂の費用に  
 あてんと欲せり故に其の浮薄淫逸なる輩をして普く此る精神上の貿易を行はし  
 めたり故に當時瀆聖なる俚言にキリストの名を以てことを爲せば如何に利益を  
 獲るの甚だしきやと假令レオは聖彼得堂を建立の爲に赦罪券を發行せしかども  
 此を以て全體の額を之れに投するが如きは爲さざりき多くは朝廷の贅費に當て  
 んぬ又或る額はトルコ人との軍用に費やされぬ此等の赦罪券の性質を解して熱意  
 彼等に攻撃せるルーテルを見んとせば一言法皇權の下に屬する人々の神學上の  
 價値を窺はざるべからずと云はん羅馬教會は平素赦罪なる者は外形上の告解に  
 よりて獲らるべきものにして其は自己の懺悔と僧侶よりの赦罪を獲ざる可らず

と即ち此の自己の懺悔に就ては赦罪を與へられ其れに依りて永遠罰惡より脱離  
 するを得と云ふにあり勿論心中に或る告解勿るべからず其は聖餐によりて幸福  
 にせられたり而も假令此は永遠の刑罰より絶つを得べきも凡そ罪人たるものは  
 教會にて訓示されたる告解の法によりて重大なる現世の苦を脱せざる可らず其  
 罪たるや若しも此世にて賠償するを得ずば煉獄にての猛火により暗はれざる可  
 らず依て此の火より救はれんと欲せば教會にて定めたる赦罪券を受けざる可ら  
 ずと教會たる者はキリスト及聖徒等が善事業により美しき神の前になせし教績  
 の一大寶庫を持つ而して此等恩惠の寶庫は赦罪券によりて今は與へらる賢明な  
 る人々と雖も他年間他界の烟火中にあるものを今は如何なる人と雖も金錢を  
 拂ひて其苦を滅せらるるとはさても笑ふべき否な悲しむ可きにあらずや俚諺に曰  
 く金錢が寶庫に入れらるゝと共に靈は煉獄より逸出すと。  
 大僧正アルバート(Albert, Archbishop of Mayence & Magdeburg)は教皇より命せられて  
 ウキテンバーグ地方に赦罪權を販賣せしむアルバートはレオに正服料三萬金を  
 拂はざるべからず依てアツグスバーグにある獨乙銀行より借出さる可らず此



る有様なるを以てアルバートは借金より逃れんが爲に赦罪券販賣より生ずる金圓の半額を獲んとを請求なしぬ、アルバートは依て約して横恣貪欲のドミニカン派の僧ジョン、テツル(John Tezzel)を派して金圓を聚集せしめたり、テツルの到る處には僧官僧侶文官教員學者婦人小兒等逢迎して歌を謠ひ寺鐘を鳴らし國旗を掲げ松明を把りて祝せり、彼等はともに樂音嘲哢の裡に教會に坐す祭壇の前には巨大なる赤十字形ありて絹布の旗掛れり是れ嘗て法皇の軍勢を窘束せしめし旗なりと云ふ、其十字架の前に金錢受納箱据へらる、此箱今もなほ此地に行かば見るを得べし、日々説教讚美歌其他耳目を引くに足るべき儀式執行され人々に救拯を得せんが爲めに招待して勸めたり、一人として此る赦罪券に就きて非難し妨ぐるものなかりければテツルは心大に安じたり、彼テツルは進むでウキテンバーグに近きサクソニー撰擧公の領内に來るされど彼れは之を拒みたり何となれば彼は獨乙人民より巨額を嚇取せられんとせしかば之を拒みたるなり、依てテツルは別にヂエターボック(Guettenbuck)に貿易を始めぬ時に一千五百十七年なりき、ルーテルは先年より恁る赦罪券の嫌惡すべきを稱道しぬ、此れ明かに教理組織を破綻する者

なりとせり、彼れは此れを題目として其の教會に説教なし、彼れの眞實の友たるフレデリックに訴ふる處ありき、されば此る危険なる説教につき同僚等少なからず驚愕したり、何となればルーテルは教會はウイテンバーグ大學に附屬すべきものなりと云ひたればなり、ルーテルは赦罪券に反して自己の地歩を堅く構へぬ、彼は此事に關して監督牧師の或人に書を送りぬ、或る人は同情を寄せ或人は嘲笑なし一人として彼れに眞實左袒せんとするものなかりき、ルーテルは今や遂に公然の論争を構へ革命上の一の大潜勢力を惹起しぬ、一千五百十七年十月三十一日諸聖徒祭(All Saints)の夕彼はウイテンバーグに在る教會の門戸に九十五ヶ條のラテン文にて記せるを告示せり、一言にして言へば赦罪券に對する反論なり、爰に於て眞理を煥發することに於てルーテルは大に論せり、主キリスト名に於て人々を論争せり、此る驚嘆すべきとはまた多く見るを得ず、ルーテルは眞實に新約聖書の教説を奉じ、吾人の主キリストは悔改によりて信徒の全生涯を新たになすべきことを堅く信せり、此の如き悔改とは罪の悲み罪の惡みを意味し、此に由て善き行爲來り肉慾の念より脱するを得、而して赦罪は僧侶の權限内に委ねられず、僧侶は唯だ赦さ



れたりと宣告するを得るのみ、教皇たりとも神赦し玉ふと言ふの外は罪を免除する能はず、依て此等の赦罪券の告罪に付て教會の教理たりとするも單に生ける人の爲めに設られたるなり、教會律に從へば他界に行たる人々のことに關しては何事も示さざりき、ルーテルは若適當に解釋せしならんには赦罪券其自身を攻撃せざるをも彼れの反對せるは倒亂惡弊に充ち居たればなり、而もルーテルは常に如何なる場合と雖も赦罪券に金錢を徒費するよりも困窮なる人々に金錢を施す是れ信徒の做すべき處なりとせり、故に信徒にして若し飢渴に逼る兄弟を見捨てなば神より赦しを受けざるのみならず寧ろ却りて神の怒りを招くに至る、彼れは嘲刺的言語を以て赦罪券行賣を目しぬ、ルーテル曰く、教皇は其の行爲の忌むべきを悟らざるべからず、若しも聖なる神それを知り賜ふとすれば宜しく群羊なる人々の膏血を絞らんよりも却て聖彼得得會堂を灰燼に葬るの勝れるに若かずと、ルーテルが此の箇條を告示せる當日大僧正アルバートに書を送る書辭鄭重にして赤誠の意を含む要は大僧正の代理歴の目にて赦罪券を販賣なすは監督をなす閣下の願慮を要する處にあらずやとのとなり、翌日諸聖徒祭に於て彼れルーテルは會

衆に説教して唯だキリストの恩恵に預べし、赦罪券を買ふが如きは廢せざるべからずとの意を再三懇談なしぬ、

ルーテルの告示箇條は直ちに至る處に達せり、ルーテル曰く、此條文は四十日以内に全獨乙國に蔓延せり、而して直ちに獨乙語に譯されたり、地盤は堅固に成れり、然れども聲のみにて進むんで事を致すものは有らざりき、吾人は彼れの箇條を讀むで知るを獲たるは彼れの箇條は固より外形上告解儀式悔改の事、僧侶赦罪權にあらざるを知る、此等はルーテルより他の人々も攻撃したればなり、彼は寧ろ國民に反するよりも當時の神學者に反對せり、依て平信徒等の了解し能はざるラテン文にて學者的の表出にて此等の箇條を并列したり、赦罪券に關する教理は重に中世紀時代羅馬著名の記者トマス、アキナスの(St. Thomas Aquinas)の殘される神學を参照せし者なり、テツルは二ヶ條の反對を以てルーテルに論争を初めぬ、フランクフォルト(Frankfort)大學はテツルに名譽ある神學博士の學位を授けぬ、テツルは赦罪に關するアキナスの説を奉せしと雖も、教皇權をして論争の中心點ならしめんとせり、彼は曰く、基督信者たる者は凡て信仰及救拯に關する事は教皇の定め



たるとの絶體的に誤謬なきことを忘るべからず、且つ教皇政治より出でたる信仰に關する凡ての問題は假令此等の問題の聖書中に記載せられざるにせよ基督教の眞理たるなりと是はテツルがルーテルに與たる打撃なり、假令此時明かにはルーテルの名を言はざりしにもせよ、實は此心なりしなり、ルーテルは今やテツルより勝れたる敵手を得たり、此人羅馬聖會の長にして教皇の信任厚き人物なり、其名をピーリアス(Pierius)と云ふ、此人はテツルの如く教皇權を主張せり、即ち此人の説に據れば教皇は羅馬の教會にして羅馬教會は天下基督教信徒の教會なり、故に此教會の權力を妨ぐる者は如何なる人に係はらず、異端者なりと云ふにあり、此時フーグストレーテン(Hoogstraten)ルーテルに抗して小冊子を著す、而もルーテルの恐るべき敵手はイングレスダット(Inglestad)大學教授たるジョン・エク(John Eck)なり、是れ實に博學の人、箇の抗辯者なりしが、目的を達せんが爲に倣したる手段は醜陋なりと謂はざるを得ず、エクは以前はルーテルの朋友たりしが、今やオペリクス(Ouelix)なる一書を著はして彼に抗するに至りぬ、其體裁粗雜、猜忌心に富める又迷信的の記事を以て充たされたり、エクはルーテルを蔑視してホヘミアの有害物

にしてハス派の異端者と目せり、吾人は章を進むに隨てエクがライプツクの大に於て倣せる有名の反論を窺ふを得可し、而も此等の小冊子がルーテルに反抗しつゝ、ありし間にルーテルは決して袖手して居らざりき、彼れは直ちに戰爭の態度を拂へ、監督牧師博士等未だ備を爲さざるに乘じて獨り起り、ルーテル其の後此の時を記して曰く、余は己れの位置を危ぶみたりしが、自らは堅く聖經の岩礁に頼りたりければ、敵手等の抗論は却て益々彼れの簡條文の開陳を堅固ならしめんと、念を盛ならしめしのみ、彼れは固より大學教會にて執りし彼れの職務を減少せざりしも、個人的防禦に於て常に筆を取れり、此時彼れの刊行せるは、赦罪之恩恵との論なり、是れ彼れに取りては論争の一着點なりき、不幸にして凡て此等の著述は彼れの反對者に向て猛烈なるなりき、而も其文辭基督教徒的の温情、隱和を具備せり、千五百十八年に彼はハイデルベルグ(Heidelberg)に催せる彼れの教會會に赴任の途に就けり、蓋し更に新監督代理者の撰舉あればなり、ルーテルの朋友等は彼れにして若し行かんには途中變事のあるやも圖り難しと恐怖せり、而も撰舉公フレデリックはスタウビツに紹介せんと



てルーテルの爲めに厚實なる書翰を認めて渡しぬれば無上の丁重なる款待を受くるを得たり此くして彼れはウイテンバークに歸りぬ其時より解明と稱する有益なる書(Solution)の出版に着手せり此れ即ち九十五ヶ條文を精密に説明なしたる書なりルーテル今や福音上の意見につき益々熟達するを得しかども未だ教會を破壊せんとは思はざりき彼れは既に教皇の頑迷を非難せしも教會の領袖としての教皇に對しては能ふたけ一致と服従を以て事へんと欲せり實に彼は教皇に己れの解明書を示せり而してレオが己れの味方たらんことを希望せり幾何も經ざるに敵はルーテルを玷辱して異端者と云へりルーテル茲に於て教皇の膝下に伏し絶叫して曰く我れに生を與ふか然らざれば死を與へよ汝の意のまゝにせよと而してなほ依然として精銳なる調にて余は自らの説を變改するの要を見ずとの摘要を述べたり

レオは赦罪に關して獨乙内に激動の生じたるを聞き彼の如きの常として輕々に嘲笑するのみにして看過せり其言に曰く兄弟マルチンは好箇の男子なり此る破綻畢竟猜忌心に富める僧侶輩の口論に過ぎざるなりと復た曰く此等の箇條文を

記せし人は醉狂人なり酔醒めなば再び其本性に歸らんと然りと雖ども今はレオの手に餘れりただちに異端者と目する輩を吟味せんがために法庭を羅馬に設くルーテルも亦一千五百十八年八月七日より向ふ六十日以内に出席すべきの命を受くウイテンバーク大學にては切りに此の令達を不満に思ひすなくとも獨乙内にて吟味せられんことを望みたり六十日も過ぎたる或る八月二十日レオはフレデリックに托して惡魔の子マルチン、ルーテル送致せんことを命じぬ此時ルーテルはウイテンバーク新入教師フリップ、メランクソンと結托せりメランクソン年齒僅に二十一其キリシヤ學に於て第一の人物なりしメランクソンはバラチネート(Palatinate)の小都府ブレテン(Breiten)に生る時一千四百九十七年二月十六日なりき終生二人交はりを結びぬ而して二人の感化はサクソン神學派全體に其影響を及ぼしたりき

一千五百十八年夏期に一の會議アウグスバークに開かれ教皇代理者カヂエタン Cajetan 出席す此の會たるや政治上の目的の爲に設けられたるも實はルーテルを召喚して吟味せん爲なり此目的を達せんが爲にカヂエタンはマキシアン帝及フ



レテリックに不信任ならしめたる勇敢なる僧即ちルーテルを送らんとを求めぬ、フレデリックはカヂエタンに言て曰く若しルーテルにして會議場に出庭せしならば安全なる所置公平なる裁判を仰がすんばある可らずと言へり實に此會議はルーテルの一身危急存亡の秋なりき、ルーテル後年記して曰く余の意見を妨げられたれば今は死せざるを得ず、余は屢々頼る處なきを悲めり余は余の兩親の面に泥を塗らんかと、かくてルーテルはアウグスバーク附近に歩行しつ、賤しき粉粧をなして赴きぬ、時疫其地にありければ止むを得ず馬車に乘れり、十月七日に着す、彼れメランクソンに送りて曰く此地に來りてより新物なし唯だあるはヘロドタスが興りたるが如くに余に就ける評議紛々あるのみと十月十二日彼れはカヂエタンの前に現はる、聖なる父の名によりての代表者カヂエタンの前にルーテルは平服なしけり、カヂエタンは欣んで之を受け而してルーテルの誤見を矯正せんことを勧めぬ而して教會の平和を壊亂せしものは未來にて受くべき事の如何なるやを示せり、此の要求に對して論議長時に涉りルーテルの逡巡たる風采遲鈍難澁の言語は其席に列したる學者博士輩の指笑する處となりぬ、カヂエタンの要求は

動かすべからず、仍てルーテルは熟考の時を授けられんとを願へり、此して彼の友スタウピツ其他の友に議れり、彼の確答は十月十四日にせざるべからず、彼は毫も良心疼しき處なし、人たるものは人間よりも寧ろ神に従はざる可らず而して彼は聖書は彼れの補助たる眞實の確信を抱けり、カヂエタンは往々聖書の句を適用せず、只管廢說せんがためにルーテルを召喚しぬ、彼れ及び其朋友等も若し改言せざるときには除名すべきと威嚇せり、ルーテルは遂に放逐せられたり、其日彼れは朋友等に送りて曰く余は命を奉せざりき、何となればキリスト信徒たることを非難せば是れ異端者に他ならざればなりと、寧ろ彼れは火刑追放呪詛の刑に處せらるを覺悟せり、十月十七日再びルーテルはカヂエタンの調和せんことを勧め、カヂエタン此を取らず、依て止むなくルーテルは夜行無難にアウグスバークに出立しぬ、難澁なる旅行の後ウイテンバーグに着せり、十月三日なりき是れ回顧すれば彼が有益なる簡條を揚げしより早や一年期とはなりぬ、事志と違ふは人性の常なるにもせよ、空しく奸物等の爲めに妨げられ業成らずして歸る豈に多少の感慨なしとせんや、



ルートルは今やレオと調和すべくとは考へざりき彼れは教皇より大會に訴へぬ  
 換言すれば不完全の智ある教皇より完全の智識ある大會に列せし人々に訴へた  
 り彼れの除名放逐の宣告は日々逼まれり其はすでにレオによりて準備せられて  
 ありと雖ども其れを爲す前なほ一度醉狂僧を吟味せざるべからず一千五百十八  
 年十月二十四日チャールス、ボン、ミルチツ(Charles Von Meitz)使として教皇の命を帶  
 び殊別なる功に酬ゆるに金蓋勳賞を持たしめ撰舉公フレデリツの許に派す  
 なほ書面を認め其言辭にルートルを教皇の手に渡すべきを以てせり、ミルチツは  
 他に有力なる獨乙人に宛てたる書面七十通を帶せり、ミルチツは到る處ルートル  
 に同情を寄する人々の多くして羅馬を嫌惡するもの、多きを知りたり、ミルチツ  
 は此を以てスバラチンの家にてルートルに會し追従空涙を以てルートルを改心  
 せしめんと企てぬ然しながらルートルは偽の涙を看破しぬ、それより久しからず  
 マクスミリヤンは一千五百十九年一月十二日死す、彼は新帝の撰舉公フレデリツ  
 クを撰びしまで獨乙の攝政なりき、教皇は無上の敬意を表し宗教上のみならず政  
 治上にも信任を置けり、六月二十八日教皇の反對者たるスペインのチャールス五

世獨乙帝の高位に上る年齢僅に十九にてありき、此御代にてライプジグ(Laipeig)の  
 論争ありたり、されば結果見るべきなし、論争は博士ジョンエツクを敵手としてル  
 ートル組並にチャールスタットとの間に構へられぬ、エツクは嘗て九十五ヶ條文を  
 攻撃せる反對者なり、而もルートルは攻撃の眞の目的にて今あるを知りければ彼  
 れは教會の惡弊よりも寧ろ同じ論争點に向てエツクと會せんことを求めぬ、目證者は  
 六月二十四日ライプジクにウイテンバーグ人の入市次第を記載せり、曰く彼等は  
 グリマ門(Grimm Gate)に入ぬ、二百人の學生はルートルの馬車の側に列を作歩めり  
 各々武器を携へたり、最初には博士カールスタット次て博士マルチン、ルートル及  
 びヒリブ、メラクソンなりし各々箱馬車に乗り居たり、丁度彼等の聖保羅教會の  
 庭園に達せしとき博士カトルスタットの馬車破碎して彼れは泥土にまみれぬ、然  
 しながら博士マルチン及メラクソンは驅りて進めり、六月二十七日大論争起り  
 ぬ、自由意志の問題及其れに關する神の恩恵に付てエツク及カールスタット之が主  
 動者たり、其は功を見ずして七月三日に終りたり、四日ルートルはエツクと論争を始  
 めぬ、吾人は此處に偉大なる革命者に關して當時參觀者の一人モズラナス(Mosellin-



nis)の記せし處を看ん、曰はくルーテルは中位の身長、體格小にして、骨格の現はる、迄に心を勞し、學問を學び居たり、彼の音調は明亮にして、好音なりき、彼の聖書上の學問智識は尤も勝れ居たり、彼は殆んど何物にても熟知せざるなし、彼聖書譯に於て能く判斷し得る迄に、希拉語、希臘語に通せり、談話に於て彼は無數の材料を有し、言語重々しかりき、彼の生涯風采は開化してたる社會的にありき、彼は自らストイツク派的體度の構へず、而して彼れは種々の人に接し、又如何に時間を用ゆべきやも、熟知し居たり、社會にて彼れ快活頓智に長せり、彼は常に壯盛にして愉快に満ち、また安心して、悞しき容貌を有す、然れども容易に敵の侮を受けず、却て畏れしめたり、多くの人はルーテルの論争を始むるときには、溫和を缺くと云ふ、而してまた神聖なる事柄を議するにも、一個神學者たるの態度なしと非難す人々あり、エクの事に關しても、同記者によりて記さる、長高き正方形の形態なり、其聲は公衆に叫ぶ人たるに適せり、然も美聲にあらず、寧ろ粗音なりき、彼は屠殺者、或は軍人に適したる口眼容貌を具備せり、而も記憶のよき事辯の巧なるとは、ルーテルに勝れり、彼れ實に辯説につきては、又暗誦法、態度法につきては、伊太利人を倣へり、メランク

ソンも亦曰へり、實にエクは多様にして勝れたる智識上の天才を有すと、假令學力の堅固にし、眞實に深きことは、ルーテルに及ぶものなしと雖、ども兎に角、エクも天才の子なりしなりと云ふ可し、  
エクは教皇主權問題の論争をなすにあたりて、大切なる點をえらみぬ、聖書不經の書、教父等總會等此等が論争すべき事柄なりし、此論争は七月十日迄續きたり、開庭中最も感動を興へたるは、ルーテルの恐るゝとなく、教理を辯護なし、嘗て大會にて罰せられ、火刑に處せられたるハス(Huss)の地位を辯護せしことなり、實に此の論争たるや、大なる感動刺激を聽衆に惹起せしめたり、さればルーテルはライプジク於て、大に人々の猜疑を買へり、葩花の一束を手持おるを眺め、嗅ぎ、或は留目しぬ、又小さき銀製の指輪を嵌め、中には惡鬼の住する者と信せられたり、勿論此論争積極的には結果なかりき、此くてルーテルは憂鬱に満ちて、ウイテンバーグに歸る、彼れライプジクにて費したる時日は、徒費せしよりも、悪しかりしとせり、彼れは亦反對者の論議の不正説の淺薄なるを非難しぬ、然しながら、論争の最後の結果は、獨乙國公衆のまへに現はれぬ、ルーテルは實に遠大なる活動を惹起せり、其の後數月を経



て記したるもの、中に曰へるあり、即ち其處には彼れに關して人々たがひに血を  
 見るの覺悟を有せり、部府村落住家到るところに此る用意をなしてけり、ルーテル  
 大學に歸りてよりなほも教場を擔當なし、教會を司どり而して筆をも振へり、彼れ  
 の聲譽は大學に群集を呼び集めぬ、固より彼れと同僚及メランクソンは亦格別に  
 彼れを重せしなれども、此くの如く多くの人も亦彼れを重じたるや、明かなり、實に  
 メランクソンと彼れ二人の交情は外の見る目も羨ましき程なりき、されば二人は  
 恰も保羅と約翰の關係に似たる處ありき、而して兩者比較點は昔のターチエリア  
 ン(Eurliam)とオリゲン(Origen)の關係に於るが如し、吾人はルーテルは幼少より不  
 幸の中に生長せしを知る、されどメランクソンは幼少は幸福にして大人に至る迄  
 穩和平温の中に生長しぬ、而して幼少より師を撰びて學に勤めり、而して彼れの祖  
 母の兄弟なる有名なる語學者ロイヒリンに鞠育せられたり、彼の天才は早熟なり  
 し、古文辭は勿論、其他數學、天文學、法學にも通達せり、また聖書を熱愛して精神の渴  
 を癒せり、十七歳にしてマスターオファーツの學位を受け、二十一歳にしてウキテ  
 ンバーグ大學教師となりぬ、彼は剽輕にして愉快氣なる骨格を有し、無愛想、美艶な

らざる風采を備へぬ、而も立派なる額を有し、智力ある眼孔を備へぬ、其態度も亦進  
 化したる思想深き人たる知るを得べし、彼はエラスマスの如く革命運動の爲めに  
 力を致しぬ、而もエラスマスは革命の將星と事を共にせざりしと雖、どもメランク  
 ソン、彼等と共になせり、而て早晚ルーテルと共に働かんとせり、メランクソンは人  
 性論者の中より同僚朋友等を得き、假令神學上の見界につきては異なるありし時  
 と雖も、なほ此等の中に同僚朋友を持てり、  
 此の時代の間、ルーテルの敵は空手にてはあらざりき、既にコローン及びルーヴワ  
 イン(Cologne and Louvain)の大學にては、彼及び彼の著書を非難せり、而して千五百二  
 十年一月にメツセン(Messin)の監督はルーテルをハス派の人々と同盟せるものと  
 して國民を警告せり、教會放逐の布告文は既に此時、教皇の手に署記せられたり、而  
 も或る事情の爲め、未だ公然と宣布せざりき、然れども第二回目には、ルーテルは多  
 くの希望をレオに置かず、小冊子の出版によりて、極處を決せんとせり、其の書名を  
 獨乙の基督教貴族に與ふの書と云ふ、彼れは僧侶を厭ひ、今は賢明なる平信徒を恃  
 めり、此小冊子にて、ルーテルは羅馬教會の不都合なる三點を抜摘せり、即ち(一)精神



的の勢力は現世の附屬物となりしと(二)聖書の教皇にのみ説明の權あると(三)教皇の外何人も大會を召集するに能はざるとなり、實にルーテルは後年のヨシユアの如く諄々として此等の三點に反せり、朋友等は双手を舉げて戰軍の喇叭を鳴らせり、而して今はルーテル其友に曰く事已に定まる余は固より羅馬の譴責若くは恩惠を意とせざるなり、余は羅馬と調和せず亦一の同僚をも有せざるべしと、一千五百二十年八月エクが教皇布告文を携提して獨乙の地に來らんとするを聞きしかども彼れはなほ言語著作を廢せざりき、ルーテル既に一小冊子の稿を脱しぬ教會のバビロン捕虜と云ふ此の冊子は顯理八世のごき人すら此れに對しては論難せざるを得ざりき、程緊要なる文章なりき、而して顯理は教皇より信仰上の防禦者(Defender of the Faith)なる名號を授けられたる人なり、ルーテルの此の書中に記載する點は教會の聖餐式を攻撃せることなり、此の吾人の主キリストより教示されたる聖餐式はルーテルの見によれば信徒禮拜上極めて神聖なる式にして救拯を獲るの溝渠なり罪の赦免恩惠勢力は皆な此より出づと、而もルーテルは此等の信義を誤り多くは顛倒したる教説及慣例のあるを見にき其他の儀式は決して嘗て

キリストより訓示されざるものなるに係らず靈魂上大切なるものと公認され居たりきと、即ち彼れは此の論説に於て祭壇の聖餐の執行の誤れるを論せしなり、彼れは平信徒に盃の渡されざることを非難せり、又化體肉の中古教理を聖書の單純なる文字と反せること、又聖餐陪食者の爲めにキリストの肉と血とを精神的に受納せしめずして唯だ僧侶の執行せらるゝ、血の祭物の教説の反せることを主張せり、彼れは此の平信徒より盃を奪ふとは假令教皇或は大會たりとも教會にて此く認めるの要なし、實に此くならずは不敬虔なる逆徒と云はざるを得ずと言へり、  
 エク九月二十一日に獨乙に入りメセンの地に布告文を公然と掲布す而して十月上旬ウイテンバーク大學に其寫本を送りたり、布告の冒頭下の言語を記す曰く、起きよ我主よ汝の途を興起せよと、教皇は更に言辭を進めて曰く、猛緒は主の畑を荒らし野獸は聖徒を屠らんとて徜徉しつゝ、ありと、ルーテルの箇條文四十一は非難されぬ、而て凡て彼れの著作は火中に葬られたり、ルーテル彼自身に關して曰く、教皇は彼れを悔改に導かんとするに當て毫も父らしき方法を以てせざりきと、即ち若しも放蕩息子に如く彼れが悔改めて歸り來らば彼れは其罪を赦さるべき筈なり



而るを若しもルーテルにして六十日以内に改言せざりしならば彼は彼れ同僚と共に頑険なる異端者と目されざる可らず而して法律の處分を受けざる可らずル  
 テール位地今は惟だハスやジエロム(Jerome & Prone)の如くなれり而も彼れは改  
 言の代はりに極めて傲慢なる答を教皇に返へせり自身は此事件の犠牲たる覺悟  
 なりと教皇に言ひき又教皇權政治はソドムやゴモラやバビロンよりも悪るし而  
 して地獄の口とも名づくべしと依てルテールはレオの眼を盗みつゝある寄生者  
 等を退居せられて一小區域の宗教上の位に上若は私園を管理せられんとをレオ  
 に忠告せり此著名の手翰中彼はレオの兄弟の如くに親切に勧めたりルーテル信  
 徒の自由(On the Liberty of Christian Mar)と名づくる新刊の冊子をレオに送りたり即ち  
 記されたる事柄は信徒の自由を論じて假令教皇大會法典たりとも之を束縛する  
 能ざるを記載しありたり此に由て教皇はルーテルの悔言は六十日にて爲さ  
 ることを知り得たり直にルーテルは布告其自身に付ては一種の敬意を表はせり彼  
 は新布告文及エクの奸猾に對して一冊子を發せり其よりまたラテン獨乙二文に  
 て基督の敵の布告文と題して一冊子刊行しぬ後ち十一月十一日大會に訴訟を提

出す、チャールス五世は勢ひルーテルの書作を火中に棄つるの教皇命令を發せざ  
 るべからざる域に際したり依て其著作の多くはルーヴエイン、コローン、メインス  
 の地にて焼かれぬ、フレデリックは其の領内にて焼くことを好まざりき何となれ  
 ばルーテルはなほ公平なる吟味を受けざるべからざればなり、宣告はエラスマス  
 の議を用ふることとなりぬ、エラスマス曰くルーテル二個の缺點を有す一は教皇の  
 冠に反せしこと他は僧侶の腹を撃ちしことなりと、

ルーテルは法教上の書を焼き以て復讐せんと決せり即ち一千五百二十年十二月  
 十日の翌日彼れは教皇律令書を焼かんとの意にて普ねく掲示を樹てウイテンバ  
 ークの學生等を招待しぬ群集は出場せり博士學士等も多く列場せり中にカール  
 スタット及メランクソンも見へぬ、火は加へられぬ此の時ルーテルは教皇布告文  
 を火中にせり學生は歡呼の中に祝歌を唱ひ最後の葬禮の悲歌を唱歌せり、ルーテ  
 ルは間もなく己れの事業を現はさんが爲めに一冊子を出版せり此の時スタウピ  
 ヅの反對ありたれども彼れに心事を吐露して此を做せり獨乙國は此れより論争  
 に關する多くの冊子刊行せらるゝに至りぬ嘗て革命に關係せるクラナク(Cranach)



は滑稽書を以て羅馬組を嘲笑しぬルーテル後ちに此れを聖書の題詞に加へぬ、エスマー(Esmar)も亦冊子を發行せる者の一人にしてルーテルと共に通俗の冊子を發行せり、レオ十世はルーテルの改言すべきを待てり而して一千五百二十三年一月三日彼及び彼の同僚に對して放逐を命じ而して其地に住すべからずと命じ彼れを隠蔽せしものを罰すと

次でルーテルはチャールレスを問はんとせり、チャールス五世は嘗てレオの爲に撰擧を妨たげられフランスの王と結托せることを記憶しければもとよりレオに對して恩惠なき所の人物なり而もチャールスは流石にレオを賣るの勇氣なかりければ教皇布告の旨意を成就せんと決したり、フレデリックは先づチャールスに懇願して曰く先づルーテルを罰せんと欲せば公平なる言語を交へざる可らずと而して會議のウォームスに開かると定まるや彼れはルーテルに出庭すべきを以てす又約して決して危険身に及ぶこと勿るべしと言へり、ルーテルの旅行する處には必らず衆目を惹くものあり今ウォームスに現はれたるルーテルは教會除名者よりも寧ろ勝利を得たる軍士の觀ありき彼の達したるは一千五百二十一年三

月十六日なりき彼は會議に對して二個の間に答へざる可らず(一)彼の前にある書物は果して彼の者なるや(二)若し然らば之を彼は改言するか然らざれば自己の説を固執するかにあると、ルーテルは今列席の人々の威嚴あるを見て第一問に答へ他日第二問に答へんことを願へり、翌日再び出庭せり其時には彼れは新地位の爲めに剛膽にして學者的の防禦をなせり、彼は積極的に改言を拒めり而して固執せる爲めに運命に關する威嚇を與へられしときに有名なる言語即ち我此處に立てり他に途なし神我を助け玉へアーメンと午後三時に於て絶叫せり、會議は動搖不順序の裡に終りぬ而してルーテルは既に牢獄に繋がれたりとの流言は起りぬ、されど彼れは左にあらす親友等の保護の中に在りたり、四月十九日チャールス、ルーテルをウキテンバークに歸らしむ然れどもフレデリックは思へらく彼にして歸り來らば必らずハスの運命に陥らんと仍て歸途變事ルーテルの身にあらむかを憂へルーテルをしてワルトバーク(Wartburg)の城内に入しむ此處にて彼は國事犯(Knight prisoner)として遇せられたりフレデリックの兄弟ジョンもルーテルの境遇を知らざりしほど數週間丁重に而も秘密に彼を待せり彼の捕へらるゝや世間に



ては最早ルーテルは殺戮せられたるを信せり、  
 ワルトバーグ城砦にて彼れは武士と認められければ今は僧衣を脱して武士の衣服を纏ひぬ、劔を帶し鬚を生せり、彼れは此の地にて勳爵士ジョーンと呼ばれぬ、遂に彼は城内通行の自由並に朋友等と消息するを許されたり、チャールス今は佛蘭西と戦争を構へんとせり、縦令ルーテルが牢獄の中にあるを知れるも他の權利を持つて自由自在に犯して彼れを捕縛すること出来ず、實に此の入牢たるや革命に關して尤も都合よきものなりき、何となれば彼れは先きには口角泡を飛ばして辯論せしかども今は退隱して此の牢中に黙念勤學をなすに至りたればなり、此の入牢のとき彼れは懺悔(Confession)マリア祝歌聖典上の惡弊(The Abuses of Masses)僧侶祈願に關する事(Ministic vows)を記述しぬ、復た教會聖書旁註(Church Postils)を記述せり、聖書旁註とは即ち日曜に用ゆべき四福音或は書翰の註釋を意味す、ワルトバーグに於ける此る大切なる著述はやがて獨乙の邦文に聖書を譯するの段階にてありき、仍て彼れは今や重にギリシヤ、ヘブライの二書を學びて翻譯の用意をなせり、身は囚獄にあるも心は實に休止せざりき、彼れは此牢獄を稱してバトモスと

言へり而して靜かに此處に在るを厭へり、價貴き食物は彼れに運ばれたり而も質素自ら甘んずる僧侶的生涯を送りたる彼れには寧ろ之を好まざりき、況んや彼れは惡魔の嚮導なること又幼影の擒となれり、例せば彼れは間斷なく果實の二階より落ち来るを聞けり、其度毎に怪しげなる黒色の犬が寢床の傍らに出現せり、傳言によれば彼れは精神錯亂して現出せる惡魔に向つて墨壺を投付たり、其跡ワルトバーグの城砦に歴然として今なほ存すと云ふ、固より此等は傳説たるのみにして歴史上の確證となすに足らざるなり、  
 ルーテル此の牢獄にありて心の欲すところを做す能はざれども革命の時期は着々として其歩を進めぬ、此時はメラクソンと共にジョン・バケンヘーゲン(John Bugenhagen of Pomerania)又アグリコラ(John Agricola of Eisleben)等少數なれども錚々たる人物等、各々聲を擧げ筆を振ひ新事業の爲に盡しつゝ、ありき焉、然是れ牢中に在りてルーテルの指揮するが如き觀あり、ルーテル入牢し之より久しからず、フェルカーチエンのバーソロミウ・バーアハーチ(Baltholomew Bernhart)は院主僧なるにも係はらず、妻を迎へる爲に祈誓を破りたりければ、此事に關してメラクソンに與へ



たる書辭に言へり、余は此の勇敢なる人の結婚を祝すと神は必らず嘉納し賜はんとウキテンバーグ事件は益々極點に上りぬルーテルは舊友カールスタット及ズキンリングの健全なる同盟者を得たり此のズキンリングは能辯につき熱心の點に於てともに第二のルーテルと稱せられたり此等の革命者は皆な僧侶の祈誓を敗棄し主キリストの定められたる晩餐を執行せざるべからずと主張し居たり大なる事柄は聖餐排斥に關し起り來れり地はウキテンバーグなりフンデリックは此問題を決せんとして訴ふるところありき彼れは言へり此る事は行ふ能はずと賢く擯斥の態度を示せり復た起りたり事件は寺院を閉鎖することなりルーテルも此れにつき即ち祈願をマスの禮て筆を振へりルーテルは根本的に僧侶の祈誓を攻撃したり何となれば福音の自由を無効になせばなり又た獨身祈誓は到底實行すべからざるものなりと論歩を進めたり十二月一日ルーテル偶然武士の粧をなし親友の許を訪ひ三日逗留なし種々の議論をなして秘密にワルトバーグに歸りたり此時緊要なる著作即ち獨乙語に譯されたる聖書事業を始むルーテルは市街にある童女家郷に在る母市場の人々に此句を聞かせたり彼れは數月にして新約

全書を了りたり後ちメラクソンによりて修正せられたり、然しながらルーテルはウキテンバーグ同僚にまで改革的の教説實施をなし是れが爲めに革命最初の動機とせり教會にて用ふる衣服を脱し聖餐の前に懺悔することを廢せりカールスタット及ズイリングは公然と人間の神學及び聖書説を非難せり平民の中に聖書の句節を平易に説明せんとして家より家を訪へり同時にジカ(Nwickan)の熱信なる市民等は革命社團體を結びぬ彼等は皆な豫言的の幻夢幻影會話を信せるものにして大膽に凡ての僧侶は殺戮せられざる可らず凡ての悪人は破壊されざる可らず而して神の新王國建設されざる可らずと憚る處なく主張したり此等改革者の中にストールパークの(Skulber)トマス、マンザー(Thomas Munzer)なる人あり共產主義の論者なりと云ふ其時大抵革命者等の主人株は解散され同僚は壓抑せられて切迫せんとする事變も此處に破毀せられんとするに至れり吾人は此のマンザーに就ては後章に於て論ずる處あるべしさてルーテルは此る光景を著るしき恐怖を見て注目せり無學なるマーザーは赦されたるも最も尊敬すべきカールスタットは赦免さるゝを得ざりきルーテルは直ちにウイテンバーグ



に行くべきの時迫れり依て許可なくして一千五百二十二年三月一日彼れの牢岩を出奔なし六日に再びウイテンバーグに現はれたり次ぎの日曜日には彼れは昔に用ゐたる壇上に起てり切に迷教的會議を駁し眞面目と平和に歸るの必要を述べたり改革の業此處に基礎を据ヘルテルは大學に歸りて教鞭を執りまた禮拜堂の職を執り居たり彼れ近くの都會等に訪問なし説教なして多く人々を集め此等の群集人等に革命思想を吸吹せしめたり彼れの文學上の著作は重に聖書の翻譯より始めたり一千五百二十二年九月二十一日聖馬大日に新約全書刊行され熱心に國民に讀まれたり其れより直ちにルテルは舊約全書の翻譯に着手せりされど希伯來語の智識足らざりければ思ふ様に迅速には做すこと能はざりし初五卷は(Pentateuch)一千五百二十三年十二月一日に他のものよりソロモン雅歌に至る迄は一千五百二十四年に印刷せり然れども豫言書は數年間出版されざりき此時ルテルはまた監督政治に關して一冊子を刊行せんとしてありたり不幸にして彼れは羅馬教會の混濁と神聖なるカソリック教會の最初の制律との區別を爲す能はざりき是れ異なりたる運動の英吉利國に勃起せる所以なり此を以て改革運動

と云ふを得べくんば獨乙國のは根本的的革命運動と云ふべきなりルテル時代の教皇政治の布告は只に非歴史のみならず併せて非聖書的なりきルテルは此時代の迷信派(Fanaticism)教王派(Papalism)何れにも加擔せざりき彼れは平民に解し得らる、文辭を以て教又諸侯に命令する羅馬教會の處置を攻撃せり此れ福音の自由聖書の新譯書の出版を妨げられたればなり、ルテル今は羅馬有司等より妨げらるゝとなくウイテンバーグに於ての著書に従事したり此れ彼れに取ては最も力と恃むフレデリック庇護ありしに由るなり此れが爲めにルテル派説教者其數を加へぬ敵對者すらも其の精氣強きと從容逼らざると公平にして私念なきと認めぬ仍て獨逸はルテルに關する冊子刊行を以て満たされぬ而してルテル派に乞ふて各處より説教の注文引きもさざる有様なり此時革命者等はルテルの古郷にある公爵アルバートの補助によりて心強くなれりポーランドにては此新運動に賛成しつゝありたり然れども羅馬有司輩も決して眠れるものにてはあらざりき一千五百二十三年七月一日ヘンリポース及びジョンエヌン(Henry Voes and John Esch)は異端徒の罪を以て宮庭にて



火刑に處せらる此等の人々は實に獨逸にて殉死者の最初の者なりき此に類する  
 事柄多く執行せられたり、  
 此時までルーテルは散亂したる少なき信者を組織的にせんとは左程思はざりし、  
 彼れは純粹の聖語を説教せざる可らず、また福音に示されたる單純なる聖語に記  
 されたる聖餐式を執行せざるべからずと主張したり、彼れは亦基督信徒禮拜に最  
 も必用なるは一つは國民に平易の文字を用ゐて讚美歌を唱はしむるにあるを知  
 れり、仍て此の目的を以て詩歌の或るものを譯解しぬ、彼固より其技にあらざるを  
 知り、而も久しからずして其技に熟達するに至りぬ、されば第一獨逸讚美歌の一  
 卷一千五百二十四年ウイテンバーグに刊行さる收むる處八章あり、中四章はルー  
 テルの創作に係れるものなり、後又二十四箇を加へて出版せり、是れも彼れの手に  
 よりて作られたるものなり、翌年有名なる堅固なる城砦は我主を刊行しぬ、たちま  
 ち國內に喝采され、革命の警語となれり、此れによりて農民等は説教文章よりも寧  
 ろ福音上の智識を得るに便なりしなり、彼れはまたこの時に於ても青年の教育に  
 意を用ゐつ、ありたり、何となれば彼れは革命を做すにこの年少氣銳の士の必要

なるを知ればなり、彼れは教會國內にてよく教育されたる人々をもとめぬし、かし  
 て各處に基督教の學舎の設立準備されざるべからざることを念頭にうかべ居れ  
 り、  
 然りと雖もルーテルは人性論者が彼れ及び彼れの新思想より遠ざかるを見た  
 り、此等の人々は最初に於ては革命の運動を以ての同情よりも寧ろ其時代の惡弊  
 を絶叫しつ、革命に加はりたりき、然るを彼等は今や少數の主動者が迷信的にし  
 て革命的の傾向を有するを見、また此等主動者によりて既に社會的並に宗教的の  
 擾亂を來たせるを考ふるに至りたり、仍て此等の人性論者は既に宗教上の一般の  
 死滅せるを證明せん、とす組織を組立つる計畫を廢すに至れり、第一にスタウピツ  
 と手を分てり、また精神的の父たる親愛なる友たるルーテルも意見を異にする  
 に至りたり、スタウピツは古への教會の平和安全を來たさんが爲めに險を犯かし  
 て革命の爲めに盡すの精神はあらざりき、而も假令彼は革命に關して形體上の運  
 動はなかりしと雖も、彼れはルーテルの教説たる信仰によりて義とせらる、こ  
 とを信じ、また死に至る迄ルーテルの歸服せる友人たりし、スタウピツは一千五百



二十四年十二月二十八日中風症にて卒す而して更にルーテルはエラスマスと調和すべからざる程疎遠となれり其はヘンリ八世を攻撃せる一冊子發行以來益々極度に上れりヘンリはエラスマスをしてルーテルに反する爲め別に一冊子を發行して羅馬教會の辯護たらしむエラスマス欣んで命に應じければルーテルは是れより彼れを反對者と目したりエラスマスの出版したる書籍の名は自由の意志(On Free Will)なりし其書中人は自らの感謝と終りの幸福を受くることを表はせりルーテルは此書を読むで議論の薄弱なるに驚けり仍て歳を閱せざる中に彼れ議論を構へたり自由意志の奴隷てう題目之れなり(The Bondage of the Will)即ち人性の自由必然に關する聖書上よりの説論なり實に此奥妙の問題につき二人間の論争は續き而して過激に涉りぬ此る爲めに終生疎遠となるに至れりエラスマスは人性論者の聖餐を執るを満足なしルーテル及び其の運動を離れたり此くして再び西方教會遺傳的組織を信奉するに至りたり

ルーテル今は非常に旺盛なる打撃を蒙るに至りぬ何となれば擾亂は彼れの朋友の家眷より起りたればなり世に所謂獨逸國農兵戦争(Peasant War)是れなり吾人は

見るカールスタット是を起したるを然れども更生日即ち一千五百二十三年迄は静止して居たりカールスは其れより靈魂に關して神と神祕的一致の教理を教ゆるに至れりまた舊約の教に従ひて再び妻を迎ふるを許すの説をなせり聖餐の此は我が肉なりなる聖語を解して絶體的に主の肉體なりとせり而してパンと葡萄酒を指すに非ずそれはさて置き國內は益々この戦争激甚となれり間もなくマンザーは中央獨逸に歸れり彼は益々ルーテルを惡みたり物慾的にして信仰なき生活の神なき説教の殊に暴戾なるルーテルは此際破撃せざるべからずとせりマンザーの建設せんとする新王國には上流社會を引き入れる計畫にして若し之れに反くものあるときは諸侯大名に係はらず首を切り或は絞刑に處するの制となしたりマンザーは秘密會集を組織せんとし然れどもカールスタット及彼れの仲間之れに加はらざりき此時若しも撰擧公フレデリックにして直ちに自ら事を處理せしならむには此會議手を起さずして局を見るに至りたるなるべし然しながらフレデリックは躊躇したりければ此處に亦ルーテルを失望せしめたり然れども彼れはマンザー及びカールスタットの論理的説論に對して堅く革命的意



見を非として反抗せり、マンザーの迷狂的教説は南方獨逸農民の中に有力なる同盟を造りぬ、此等農民等は教權の壓制や社會上收斂の爲に蜂起したるなり、實に一千五百二十四年の夏期にてありき、一千五百二十五年の初期此の勢力東にてはアウストリア北方にてはサリンヂア(Salzburg)迄蔓延せり農民等は彼等の哀求及懇請に關する十二ヶ條を建白せり其論する處極めて鄭重にして理に適へり、彼等は各自管轄地の權力を要求せり、十分一の租税は廢弛せられぬ而して漁獵の如きは神が人に與へられたる權力なりとせり、此等の要求は皆な聖語に適したるとなり而して若し此要求の不正なるありとせばルーテルをして此等を矯正せしめんと、ルーテルは直ちに起てり而して一書を著はしぬ、即ち平和の忠告なるものは是れなり、この論説たるや其反對者に對しこの如くに農民等に教へたるものなり、即ち貴族輩は其の猛惡強烈なることを駁せられまた農民等一揆的にして煽動的の行爲をこの書中にて非難せられたり、豫想の如く農民も貴族も各自の説を善きと思へり、ルーテルはこの際また一冊子を著はさる可らざるに際しぬ、而してこの書中にて農民を狂犬と呼び

マンザーを惡魔の大將と稱呼せり、仍てマンザーは自ら主の撰手と呼び戰爭を始めぬ、ときは一千五百二十五年四月なりき、彼れの率ゐたる四百の同勢はたちまちにして三萬を以て數ふるに至れり、此等の人々は皆な宗教的迷狂心に驅られ、壓制非道を罵詈し而しておのれが爲めに寺院教會城砦に至るまで悉く灰燼となさずんば慊らざるの意氣にてありき、働けはたらけどはマンザーの命令の言語にてありき、また次て曰く不信の哀哭の爲めには用捨は無用なり慈悲を垂るべからずなんちの劔を冷ならしむる勿れ神は汝等と共に居賜ふ戰爭中勉め働く可し、此れ彼の命令語にてありき、恚るときしもルーテルは現はれ險を犯しても平定せんと欲せり、而も驚怖すべき戰亂は止む可くもあらざりしが、此時偶然にもフレデリック一千五百二十五年五月五日永眠しければ直ちに爭亂の平定を睹るに至りたり、彼はウイテンバーグに葬らる此時ルーテルはこの庇護者にして朋友たる彼れに高尚にして沈鬱なる頌詩を奉れり、而してルーテルはマンザー等に一冊子を呈送せり、殺掠的農民の一體を攻撃するの書とす、彼れは此處において神の命に隨ひ惡魔的の奸賊に對して劔を闘はすべき急促なる熱心を以て、基督信徒有志者を召



集なしマンザーに對して均しく無禮の言語を送りたり彼はまた迷狂的の主動者等が此る法外なる同盟中に良民を煽動なすを見て曰く親しむべき神よ我等の証感されたる人々を助け而して彼等を救ひ彼等を憐み玉へ然しながら他に於ては御心のまゝに刺傷絞殺破毀なし玉へと言へり、

サクソンの諸侯等はルーテルの言を採用せり仍て農民等が軍勢揃へざる前に諸侯の軍勢を召集なし五月十五日八千人を率ゐたるマンザーを攻めフランケンホーセンの戦争にて之れを敗北せしめたりマンザーは神心挫折し牢獄に呻吟すること、なりぬ彼れは罪人としての宣告を受く將軍既に除かれ殘餘の軍如何で全きを得んや徒黨は散布なし戰鬪も此處に終りを告げぬ忽ちにして恐怖すべき報讐は再興せり何となれば彼等は假令サクソン諸侯等が顯明なる仁恕を以て農民を遇せしとはいへ早晚罰せらるべしとて誤解して此處に己の報讐を初めたり直ちに農民軍の回轉してルーテルの身に及べり此時グリムマに近きニムズク(Nimmern)寺院の尼僧なりしカザリン・ボン・ボラ(Katharine Bon Bora)と婚せることなり、こは人々の稱賛せる處にはあらざりき何となればこれ即ち祈誓を破棄するにあた

ればなりルーテルはエルフアート寺院に入門せるとき聖徒等處女マリヤのまへにて此誓願を契約したり而も後日に至りて彼の説は漸々變じ來れり彼れは宗教革命者等が家庭の扶助者の必要なるを見て曰く無妻主義は不必要なりと又ヌバラタンに送りける書中にも此のことを記せり然しながら彼れの友リンクに一千五百二十五年春期に送りける書翰には其婚することの必要を説けり又獨身にてあるは宜しからずとせりカザリン・ボン・ボラは一千四百九十九年一月十四日に生れ十六歳にして尼院に入る、その福音的運動ニムズクに起りけるとき彼女は難をウイテンバークに避けり此處にルーテルとともに往來せり彼女芳紀二十六卓越せる家庭に人となり、壯健強固質朴にして真正の獨逸婦人なり左程優れたる外形の美は無かりしと雖も智徳に於て兼ね備はれり彼女は傲慢不遜の性質ありたれどもルーテルは忍耐と温良とを以て彼女を矯正せりされば彼女は肉體上精神上の煩勞より彼ルーテルを慰むるを得るの資格を具するに至れり婚儀は少數朋友等の面前にて一千五百二十五年六月十三日ウイテンバークにて行はれぬ、バゲンヘーゲンなる市の牧師之が式を三位一體の名によりて執行せり然れども此の



婚儀に就ては彼れの敵のみならず其良友等の中にも多く反對せる者ありき、ウイテンバークの同僚等は殊に之を攻めたりメランクソンの如き反對者の一人なりき、然れどもルーテルは此等の人の攻撃駁論を意とせず結婚前數週間一書をルへルに送りて(Rule)曰く余は悪魔の反對を恐れずケートと婚を結ばんとすと又其後直ちにスバラタンに送りて曰く余は自らを有罪非難の中に置けり天使は晒ひ悪魔は泣くなるべしと吾人は此る僧侶の祈誓を破毀したるルーテルを誹めずんばあらずと雖も彼れは婚後幾何もなくして幸福者の一人となれり其は十七年を経て彼れの最後の言語を爲す處で彼れは其妻を稱して敬虔にし信仰に富み常に愛すべく品格ある美麗なる心専らなる妻たりきと云へり、

一千五百二十六年ルーテル力を教會制度の爲に熱心に用ゆ彼れは今獨逸人の聖餐ウイテンバーク禮拜の順序を定めたり而して多くの人も此の反對せるを見てければ彼れば飽までも彼れの新式法典を用ゐんと力を盡せり彼れはまた撰擧公ジョンの賛成によりて國內禮拜の不正を矯正せんが爲めに訪問組をおこせり然しながら一千五百二十六年三月において實にウオームス會議以來絶てなかり

し争闘起りてルーテル派を妨げたり、そはチャールス五世フランスのフランシスを制服なして平和を結びたり、其時の約條に兩者戦を揃へてルーテル派を征討せんと定めたるとなり、獨乙の諸侯は兩者に加擔なしてけり是れトルゴ一條約と稱ふるものなり然れども幸にしてトルコ人の遠征によりて別に戦を交へるに至らずして止みぬ、

一千五百二十六年七月七日ルーテルは男子生る父母は非常の喜悅と感謝とを以て祝せり其名をハンス、ルーダーと名づく、ルーテルは其友ラケルに書を送りて曰く今や婚姻の生涯につきて果實と恩恵を獲たり教皇輩も之れに價するに足らずと、一千五百二十七年一月ルーテル心臟病に罹りて命數にか、はる程となれり、如何となれば數月間彼れは肉體上及び精神上大に壓抑せられたればなり、血略して命に關する程となれり、また此時大に時疫流行なしウイテンバークも亦人口を減するに至りぬ、小兒ハンスルーテルも殆んど死せんばかりなりき、翌年小女ルーテルに生る其名をエリザベスと云ふ尙ほ三人を加へルーテルの家眷を幸福ならしめたり、時疫其跡を絶つに至りてルーテル派の人々の訪問起りぬ、ルーテルはメラ



ンクソンに負ふ所多し、此時獨乙人の精神上の狀態は大に悲しむべきものありき、何となれば僧侶輩多くは身を鄙野なる不道德に耽らしめ、醉狂不規の婚姻其他害になるべきことを恥とせず行ひたりき、彼等の多くは信條及び主の祈禱文を讀むの實力なかりき、貧窮缺乏は到る處に見るを得き、都府然り田舎に於ても豈に之れに異なるなからんや、一方にては農民等は一つの祈禱だも捧げず他方にては主の祈禱文冗漫なるために學ばんとするもの絶てなかりき、此る精神的缺乏に對してルーテルは一千五百二十九年獨乙教會問答を變更して袖珍書となし言を縮め不用の句を棄て以て俗人に便ならしめたり、吾人の今日用ゐつゝあるものに類似す即ち信經十誡、主の祈禱文を云ふ、彼れ其序論に曰く余の此書を刊行したるは近頃余訪問せしか人民の精神的缺乏の狀態を悲しむの餘り平易單純の言語を用ゐて此處に此の小問答書を刊行する所以なりと以て其の意の有る所を窺ふに足るなり而して平民殊に村落の民は今迄基督教々理につきては絶對的に無學なりし又教王派の僧侶等も其を教へ得るの價値毫もなかりしが、今此二書刊行せらるゝに遇ひルーテル革命事業に大に貢獻する處ありたりき、

次ぎに起るべきはルーテルとサクラメント派の爭論なり、即ちスウイス革命者ズウイングリー及びオコランバデアスどもに彼れの聖餐に關する論争なり、ルーテルは聖餐において吾が主の實際の現存を辯護せりシングラマ (Syngrama) 即ち十四人のスワビア聖職論文と稱ふる書は聖餐に關して夢みつゝ、且つ世を亂しつゝ、ある新迷狂者に與へたる打撃なり、オコランバデアス、ズウイングリー共に論争の態度を執る而して鋭き語を用ゐたる冊子續々刊行せられぬ、ルーテルに取りてはズウイングリーの書は眞理を惡魔的顛倒せしものなりき、而してズウイングリーはルーテルを教皇よりの秘密使者の如く甚だしく思ひ兎に角厭惡したるなり、論争國內に始まり二個の勢力ある學派を遠けしのみならず如何に革命者の元氣の強固なるやを驚嘆せしめたり、此の如き勢なるを以て福音的新教派は二個の反對及び調和し能はざる信仰と會盟とにわかれたり、一千五百二十四年六月革命の敵手ルーテル派に反して宗教上の聯合を鞏固せん目的にてラチヌボン (Ratisbon) に會す、然りといへども革命派に於ては手早くトルゴアの盟約 (League of Torgau) を組織して之が備をなしてけり時に一千五百二十



六年なりき此等の黨徒の二つは同年六月スバイアス會議に集まる此處にて宗教上の相違を裁制したり若しも舊き宗教儀式に固着したるチャールス五世が頑堅に彼等會議の目的を妨げざりしならば必らずや成功したるに相違なかりしなり宗教の論議は一千五百二十九年三月十五日チャールスのスバイアス新會議を召集する迄は何事も起らざりき彼は此議會に二問題を提出せり即ち一は猛烈に西方基督教國を脅迫しつゝあるトルコ人に對する新十字軍他は獨乙宗教上の擾亂を裁制すべき問題なり此會議にては以前の溫和手段に反して今は強烈となれり仍て革命者等はこれ帝國の法律と良心上神聖なる權利を剝奪するものなりと論せり而して飽迄も新教徒たる實を現はさんと欲して新同盟を造らんことに汲々たりきスイツアールラントの地よりズキングンは革命の主義を固執せんとする獨乙革命者等の大傘の下に一致共働せんと企てぬ己の目的により革命軍は一千五百二十九年十月十日代表者をマーバードに派し會議せしむ此會議は効果なかりしと雖も稍々論議的法則の十五箇條を布告するを得たり此に由て將來ルーテル派の箇條を作りぬ十月十五日スワバツク(Schwabach)の會議にて此等の箇條増

加せられて十七條となれり其後またメラクソンによりて更に變改せられ附加せられたり此等にはチャール五世一千五百三十年六月二十五日に此會議に提出せる有名なるオーガスベルグ信條告白を包含せり、  
 アウガスバーク會議は一千五百三十年四月八日チャールス五世によりて召集せらる其を召集するに於て帝は如何にせば尤もよく聖なる信仰と基督信徒の宗教に於る異説と異派とを處置判斷するの良法なるやを考索せり而て此の目的を達せん爲め帝は各自の意見思想念思を吐露せしめんと欲せり撰舉公フレデリック死しければ其弟ジョン腫でサクソニーの撰舉公となるルーテルはフレデリックの如くジョンを恃むべき一の朋友また庇護者とせり然しながらルーテルの受けたる放逐除名の宣告は親ら帝貴顯及び教皇の委員等の前に此の新會議の集議を處理裁斷すること能はざりきルーテルはアウグスバークを距る四日路にして達すべきコーバーグ(Coburg)に送致せられ其處に革命者等に協力なし助言なししてけりルーテル今やアウグスバークに集聚したる僧侶に迄の陳言(Admonition to The Clergy Assembled at the Diet of Augsburg)とう書冊を發行せり此等は有司等に與へられ



たる警語なりしなり革命者等の論議したるは唯だ福音を自由ならしめんことにして毫も参政者等の特権所産を破毀するの意はなかりきコーバーグにてルーテは未だ完成せざる舊約聖書及豫言書の翻譯に汲々たりき同時に彼は青年の爲めにエソプ物語の翻譯を始めぬ彼れは言へり此の中に教ゆるは此の偽詐にして奸悪なる世に處して如何に賢明に平和に生存し得らるべきかを訓示せる尤もよき教訓箴言たるなりと言へり又言へり何人も保持すべき真理而も此れなしにては世に立つ能はざる程迄に大切なる真理は此の小説的物語の中に記るされてあるなりと此處に棲住せる間にルーテルは眩暈の氣味にて頭痛甚だしかりければ讀書を數日間廢するに至りぬ彼れ此れを以てコルバーク人の過激なる歡待ありたるためか若しくは悪鬼の所業なるか二者其の一にあらざる可らずと斷せりデイトリックは彼れの友人なるが悪鬼の所業なりと考へたりデイトリック及びルーテルはともにカッスルヒル(Cassel)の麓に六月猛烈なりし蛇形の顯はる、を見たり而して翌日よりルーテルは病床に就けりゆるに彼れ此く信じたるなり五月二十九日ルーテルの父煩悶せる後嘗てルーテルの説教せる福音の信仰を抱き

てあはれマンスフキルドの烟と化しぬルーテルは己れより浮世の恃む可らざるを知り世を脱離して僧侶の祈誓なせし時も父を愛せり彼は過去の罪を悔ひ死せし父の愛を轉じて創造主に移せりルーテル父の死を讀みしとき詩篇を手に取り一室に退き涙襟を濡せり、

以上記載せる如く革命者等地位に關する告白はメランクソンによりてアウグスパーグ會議に提出せられたり其二個より成立てり即ち前者は信仰の箇條に關するとして如何にルーテル派が基督教國の他の人々と共通の點を有するかを説明せり後者に至りては彼等は聖書的教會的の基礎より或る謬誤惡弊に反對なし言辭極めて謙遜溫和辯解的にてありき然れども中には此れを讀みて革命に反對するものもありき而して言ひき帝は直ちに劍を把りウオームスの布令を執行せざる可らずと然れどもチャールス帝は此等の一人々の温良なる部分の忠告を聴けり而して神學者の會議を開きアウグスパーグにてルーテル派論法を非難なさしめんとせり然れども衆議多派に分れ調和すべくもあらず然れどもカムベギーなる教皇政體委員羅馬教會の爲めに辯護なし猛烈なる辯論を固執せり此くのご



とく眞正の調和の企圖すべからざるを見る會議所は革命者を禁制する布告を發し遂に公會は内密の服罪聖餐典法の慣習聖餐にパンと葡萄酒を用ふる事及びすでに婚したる僧侶に命じて會議所に列する能はずと議決す革命者は此處の命令を一千五百三十一年五月五日迄守る可く與へられたり然らざれば更に苛酷なる束縛を見る可ければなり此くして會議は西方教會組織を擴張しぬ、ルーテルは今やコルバークを去りてウイテンバーグに趣けり此處にて彼れは集會の牧師となりまた文學上の著書を作しつ、ありたり彼れは舊約聖書の殘餘に着手しつ、ありき而してまた既に出版せる聖書を修正しつ、ありたり、

新教徒は今や此事を安全ならしむるには彼等一致の缺く可らざるを知るに至れり此目的を以て彼等はシュマルカルドに信徒を集め一千五百三十一年會員等は六年間相互防禦的同盟を維持したりシュマルカル同盟と云ふ(Schmalkalche League) 彼等は主張して曰く若し帝の爲めに壓制せられなば斷然之れに抵抗を試むべしと常に其の覺悟を抱き居たり、ルーテルは此等の策計及議定に關して活動的態度は執らざりき然れども彼等に反對の態度を執らざりしや明かなり、ルーテ

ルは此時ヘンリー八世の未決の離縁即ち其妻カザリンを離別せることに關係せり其はヘンリー密かに使節をルーテル及びウイテンバーグに派し離縁に關する訴訟につき賛成を求めぬ、一千五百三十一年九月ルーテルは此の離縁せることを反對せり其言に曰く兄弟の妻を妻とするは聖書に示されたる神の法律に協ふ唯だ教會にて定めたる律法に反するのみとのヘンリーの意見に反對せり、

一千五百三十一年七月三十日ルーテルは慈愛に富めりし母を失へり彼女は其子より送致せる慰めの手翰を手に把り病重るも慰めり而して感謝すべき希望を抱きて易簀せり此時よりルーテルは再び肉體上の痛苦を病むに至れり仍てリンク(Links)に書を送りて曰く惡魔彼れを苦しめん爲めに無數の使者を送りぬされば遠からずして彼等の爲めに殺さる可しと革命者々歩を進めたりしも此歲恰もカペルの戰場にてズウインクリ死し又オコランパチアの死に接す然しながら畏嚇するトルコ人はルーテル派に反して壓制的計畫を爲するよりカゾリック派を攻撃なしぬ、一千五百三十二年七月二十三日ナレンバーグの平和(The Peace of Nuremberg) は帝チャールズによりて壓制せらるゝことを新教徒等にまぬかれしめたり此



の條約により兩方の派は彼等相違ある意見を判断せらる、迄キリスト教的許容を行ふを得たり此條約が新教派を採用することは最初より羅馬教の反對せる處よりも明かなり嘗てルーテル派に此平和を安全に保護せんとせるジョンは今や長くは此を維持すること能はざりき其は彼れ八月十五日遊獵の途中卒中症に罹り翌日死す葬禮式はウイテンバーグにて執行されぬルーテルは説教せしがスバラタンの語る處に依ればルーテルは此時には小兒の如くにうち泣けりと云ふ、ジョンフレデリック其父ジョンの位を次ぐルーテルは再び此の人の友となりて保護を受く、ジョンは年少なりし時には精神的の父は實にルーテルにてありき、今や位に上る以前の如く信用ある往來をなせり時として城砦にルーテルを招待し或時は彼の前にて説教せしめたりき、ジョンの妻シビル(Sybil)亦親切にしてルーテルの友たり、ナレンバーグ平和は實に革命者等にとりては真正の新動力にして此に由て彼等の位置の基礎ある堅固なる地盤を据ゆるを得たり而して彼れの痼疾の去來の爲めに屢々死せんとするばかりなる場合にありてもルーテルは彼の生涯の最後の十二年は革命の堅固を据へ助けんが爲めに平和安態に於て自ら

を慰めり、此時即ち一千五百三十一年彼れは加拉太書の註解に餘念なかりき殊に獨乙譯聖書剩餘の註に餘念なかりき一千五百三十三年には新約聖書十六原文の出版ありたり、此時の間ルーテルはジョンに懇請して惡弊を教正せんが爲めに人々を教訓せんが爲に而して人々に福音的の信仰を抱かせんが爲に各處の教會慰問使を派遣すべきを以てせり、ルーテルはなほ改信者等精神上の狀態に就き悲しむべき現象を見たり、ウキテンバーグでさへも無頓着なることや不徳義なること彌蔓せり甚だしきに至つては醉狂者禮拜の大切なる時酒店にて暴飲するに至れり、彼れは此等の不端不敬を矯正せんことを有職の人々に逼りたり、吾人が既に示せる如くナレンバーグの平和會議は帝が教會の惡弊を矯正する爲めに教皇を説導して總會を召集せんとする約束を以てこゝに其局を得ることとなりぬ、此約束は一千五百三十二年チャールスがクレメントより得たるなり、此約束は帝の利となりぬ、其は彼れは豫じめ獨乙政府にて彼等自身の公會を召集なし而して教皇政治に反對する國民の結合體を組織し得らるべしと心密かに恃む處ありたればなり、然れどもチャールスはクレメントが此の約束を維持せざる



と思へり、教皇は公會に關して新教徒の事を上申する所ありたり然と雖も其は此畢竟教皇自身の防衛に過ぎざりければルーテルは此れに關するを厭へり議事は一千五百三十四年三月迄進みぬクレメントは閉會を申出せり同日ルーテルは個人聖餐と聖別式なる冊子を發行しぬ其書には聖餐牧會等今日ルーテル派教會にて執行せらるゝ一般の信仰を示せり聖餐の犠牲に付てルーテルの反對せることは言ふの必要なし唯だ彼れの稱へたるは平信徒の僧侶(Priesthood of Laity)なりとす此事に關して彼れ書して曰く吾人は洗禮を受け凡て僧侶牧師となれりしなり而して此の僧侶の中より或る人は或る職を任命せられ而して凡て吾人の爲めに此等の種々のつとめを爲すは彼等の義務なりとす而してルーテルが彼等を奉ずる羅馬監督等の一人もなきことを看出せしは西方教會に取りては一大不幸なりき夫れ故に彼等新結社の中に歴史的監督制を保全せんことは困難なりしカルビンルーテル共に人民の爲めに教會政府の監督制を希望せり然れども此事一步錯らば全く新教徒運動此處に廢るかまたは別に監督職の不用を唱へんか二者一に在らざる可らず而も後者を稱ふるの止む無に至れり

一千五百三十四年クレメント七世教皇政治の下にポール第三世によりて位を襲がる後者は實に憂慮して若し能ふ可くんば西方教會に於て調和を生せんと欲せり然しながら彼れはクレメントと共に此くすれば羅馬管轄權を收得し獲可しと信せり仍てポールは親らウイテンバーグに使節ヴァリエリアス(Verginius)を派す此處にて一致の條約を議せんか爲めにルーテルと長時に渉る會議をなせり放逐されたルーテル其人を教皇が普通禮儀及び款待さへもなすを禁せられたるルーテルを訪問使としてヴァリエリアスと遇はしめしば頗る異様の感なくんばあらず然りと雖もウイテンバーグの僧とプロテスタント獨乙人の彼とは二様の異なりたる人たるなりヴァリエラス及ルーテルとの對談は熱せりされどルーテルは之をして結果なく望みなきものとせり仍て何物も調和せざりき而してヴァリエラスは煩囑の氣味にて此處を去りたりヴァイツテンバーグ神學者等は教皇によりて組織したる公會は自由なること及び普通の性を缺けるを看たり彼等は直ちに全帝國を一致せしめんと企圖せり此の一致は遂に一千五百三十七年二月に完全せらる同時に羅馬派は神聖組合(Molytenne)と名づけたるおそるべき



結社を織成せり而してチャールス五世は危険の起らん事を憂ひ最後の調和を圖らんとせり彼の盡力は一千五百四十一年に起りたるラチスボンの對話なるものを起せり然れどガスパーコンタリーニ(Gaspar Contarini)とメランクソンとの間争論益々熱度を高むるに至れり五月十日彼等は自由意志生來の罪又罪人の義とせらるゝことを争論せり而してラチスボンの對話も効無くして止みぬ然も此れが爲めにルーテル派の意見は全帝國に蔓延せりコロンの教師長ハーマン(Hermann)すらラチスボンにてなせる自由理想に勵まされ彼れの管轄地に熱心なる革命の基礎を据へんとてブーサー(Bucer)及びメランクソンを召せり然しながら今や劔はチャールス派によりて包まるべくありし其は一千五百四十四年九月グレスビートの平和を締結なしたればなりされど此時ルーテル派とスウイスと派の間に又々聖餐に關する争ひ起りぬ、一千五百四十四年十一月十九日トレントにて會議二十ヶ年續きたり血を見ずんば事定まるべくも覺へざりき果然宗教上の戦争は將に目睫に逼りぬ、

一千五百四十六年二月十六日ルーテル其生地アイスレベンにて永眠す彼れの晩

年は鋭尖なる肉體上の苦痛のみならず彼れを圍繞せる教法界の悲惨なる光景によりて言語に盡くされぬ程の悲哀によりて杞憂に沈めり彼れの杞憂の重なる者はズウイングリ派の勢力の旺盛なると又宗教の領域に俗的の勢力を押領なすとなり彼の死したるは恰もトレントの會議中にして又恐るべきシユマルデツク戦争の始まる前にてありき此の大なる改革者は死する迄彼れの動す可らざる熱心を以て其主義を變更せざりき而して此確信を抱きて天に上りたり彼れの死する前充分なる語氣を以て詩篇の語を寢床にて繰返せり其語に曰く父よ我が靈を汝に托す其は汝我れを贖ひたればなり、オー眞の主なる神よと、彼れは悲哀に沈む家族及數人の親友等に圍繞せられて死せり、宮庭の説教師コリアス(Colinus)恰も死す時彼れを訪へり曰く閣下よ基督及汝が説教したる教理を遵奉なすや此の間に對してルーテルは明確に然りと答へぬ、其時右方に向き遂に熟眠せり此くあること大凡そ十五分の後意味ありげなる靜かなる呼吸を終りぬ而して此の大革命者の靈は去て造物主の手に托せられたりき、以上記載せし如くシユマルカルデツクの戦争はルーテルの死後數ヶ月を経て起りぬ、此の戦争たるやプロテスタント派



に對して羅馬教長の煽動せる有勢なる謀計にてありき此戦争にて教長は有害と認めたる異端者ルーテル派を掃蕩せんとする人々等に有らゆる放恣を認許せり既にスマルカルにての條約もあることなれば清教徒は此際何の準備とてなかりき然りと雖も若しも清教徒等にして無益にも躊躇逡巡して此れがために却てチャールス五世に利せしむるが如きことなかりせば確かに容易にチャールスを破砕したらむを其の此に出でずして空しく時を送りしは遺憾の至りなりき天下分け目の戦争はマールバーク(Mühlberg)にて一千五百四十七年四月二十四日に戦はれたり其の残忍なる諍闘に於てプロテスタントは脆くも破北しぬ而して望を屬せるジョン・フレデリックはチャールスの擒となりぬさればチャールスは獨乙國にて最早恐るゝに足るものなきに至りたり而もプロテスタントの味方は未だ全く希望なきにはあらざりき然れども多少關係上よりトルコ人と教皇とは連結したりき此の土耳其人は帝國の安寧に汲々たりき而して教皇は容易に革命者を平げしより以て駭々とし擴張せらるゝ皇威を仰ぎ見ることを能はざりきチャールスはトレントに會議以來勢力を減じぬ何となればプロテスタントに對して供物

を以て日々を送るとの代はりに寧ろ時代の惡弊を改革する緒に就きたればなりチャールスは總會にて定めし帝國の分派を療せんとの計畫は日々に其功なきを看てければ一千五百四十八年五月十五日アウグスパーグ會議にてプロテスタントを招けり即ち信仰と禮拜の新式を用ゐんが爲にアウグスパーグ調和布令なるものを定む然れども此れ一時的のものにして満足するものは一人だもなかりきプロテスタント派は之れに憚らざるものありき何となれば此文書多くは中古の意見を挿入したればなり又教皇にとりても平かなる能はざりき何となれば平信徒の心のまゝに列記し在りたればなり仍て嚴正なるルーテル派は常に此れを到底調和すべきものにあらざるを承認せり此かりければ此等に傾着することなく彼等は別に己れの團體より會議を起さんとするの勢なりきされば此處に快活なる團體はメランクソンを首領として興るに至れり彼等は教法例を不規暴戻なるものと斷定しぬ故に此處に順統なる代議員を形造りぬ事起りたる場合には直に思を凝らし頭を痛め沈思默考に耽るの人々より組織せられたる代議員なりき此等の人々は平和を説き不規を矯正なし獨乙革命事業の上に一大勢力を寄與した



りき、  
 一千五百四十九年ポール第三世死す而してデユリアス第三世(Julius the Third)教制の政を執る後にチャールスはトレントの公會に以前截斷されたる會議を再興せんと企て同時にプロテスタント派は彼等の信仰の新模型を表出せんことに汲々乎たり會議より受取りたる事件はプロテスタント派に執りては些少の幸福を將來に示表せり然れども曩にありたる如く今も光景暗慘たりしが思はざる助力者を得たり其は一千五百五十二年三月撰擧公モーリス(Minimo)卒然ルーテル派の議案に結託なしチャールスに叛けり元來スユマルカルドの戦争にてプロテスタント派は尤も和睦し難き敵とモーリスを目せり、モーリスの改心は其義父マールバードの戦争以來幽囚せられ今も尙ほ罪もなきに配所の月にさすらうの原因に憑るなりさればモーリスは迅速なる而して決斷に富める運動を以てマゴデバード、アウグスバードを圍み進んでインスブラクに迄及ぶ此地にて帝忽ち勢を失へり、然しながら騎兵隊の背反せる爲めにモーリスはチャールスのヴィラを(Villach)にしてアルプスを超え逃走するを如何ともする能はざりき此は騎兵隊等俸給收取

を猶豫逡巡せしために叛きしに由るなり、モーリスの軍は成效に向ひけるが遂に一千五百五十五年九月二十五日プロテスタント派勢力勃興なし此歳アウグスバード會議にて定めたる平和の記念すべき締結をチャールスの手より奪ひたり即ち此締結とは各々の地主たるものは既にアウグスバード信條にて定められたる如く新舊孰れの宗教にても其撰擧に任すとの殊權なり而して其小作人及傭人等は信仰及作業に於て地主の指示したるものに従はざる可らずとの規約なり此くして大黨派二つに分れたり而も此世紀末は外形上許容尊敬の意を表しつゝ、ありたり然れども獨乙教會の一致を謀るか或はプロテスタント派を破毀せんかこの計畫は却て一大打撃をチャールスの身上に加ふるに至れり彼れは平和に關して幹旋せんとも欲せず加之其後帝國の安危を抛擲してヴウスチーの寺院に退隱なし後悔せることは則ちウオームス會議以來平和を離れて帝國に擾亂を惹起せる人を任承せることなり、  
 此の時改革の意見貫徹なし獨乙各方の洲郡に迄及べりヘセン、プランデンバード、ルンペンバーク、ボメラニア、パバリア、フリースランド、シレシア並にルーテル派の起



りたるサクソニーの地にては新勢力勃起するの觀あるなり此る驚くべき進歩は社會の各級及帝國の各隅より起れり何となれば最早人々は近隣の僧官僧侶により教を聴くに堪へざればなり神聖ならざる動機や卑賤俗的の理由が屢々宗教上の事柄を混合錯雜せり而も信仰に向はんとする傾向は至る處に起り此満足を買はんが爲めにはウイテンバーグ神學者の意見を取るを最良なりとせり實にルーテルの播きたる種は此處に萌芽するに至りしなり實にルーテルは衆民を鼓激し徳に向はしめし革命者等を感じせしを見ても其思想感情状態に付て多角多方面に渉るの人たるを知り得可し彼は其議論如何にも平易實際的にしてまた智識的なり彼れの議題の活力及能辯なることやまた激動を興ふる熱誠は讀者並に聽者を感動せしむ千五百二十三年百八十卷の書を刊行せりと傳へらる又ルーテルの讚美歌刊行せられ無上の効果を會衆等に與へらる實にルーテルの著作を説明せるはクラナツク(Cranach)なりしなり次にまたメラクソンは思想ある講筵を爲し新事業を一層運轉せしめたりさればウイテンバーグは文學上の首都となれり而て教室には獨り獨乙のみならず各國の書を見るを得るに至れりポール、トラン

ルヴァニア、アン、ボヘミア、デンマーク、フランス、英國、ギリシヤ、伊太利等の書を読むを得たり而て革命に力ありたるは所謂メンデカント輩なりきドミニカン派(Dominicans)アウガスチン派(Augustinians)フランシス派(Franciscans)はプロテスタント派の種子を播布せんとて家々戸々を叩けり教僧等は普く言語の組織及自由により跳反力を以て此等の兄弟主義を奉じ遂に教僧管轄を脱して左袒するに至りたりき、然しながらアウグスバーグの平和條約は來らんとする數年間獨乙を混亂せしむる戦争の萌芽なりき然るに吾人が既に知る如く革命の進歩は此時停滯したるにあらす雖此處に世紀の末に於て反對の革命の明らかになり起らんとするの兆あり、一千五百四十年イグナチアス、ロヨラ(Ignatius Loyola)の起したる教政義勇軍の新隊は革命の進軍を始めぬラドルフ第二世(Rudolph the second)はイエズス組に教育を受ける人なるが此の時勢は長き間比較的に平和なりきと雖も尙ほ着々此等の反動の起らん模様ありき其の間ルーテル派博士等は相互論諍しつ、ありたり而て聖書の深蘊なる神秘に於てカルビン派と論争しつ、ありたり復た彼等は一致の誓書(Formula of Concord)なる一千五百七十七年に發布されたる題目に付て彼等の



斷案を固執し居たりける間に其の派の人々は村落都會郡縣より着々逐放せられたり此くして古への猜忌心は興起せり而し此迄半ば起らんとせる争闘は猜忌嫌悪迷狂の種子となりて此處に激延せり此勢ひ延て歐羅巴大陸の各處にある知名の士によりて撒蒔され三十年戦争(Thirty Years War 1618-1648)の歴史に於て吾人を苦しめたる人類の不幸及塵殺の收穫に着手せり、

ルーテルの死後獨乙革命の首領はヒリツプメラクソンなりき然しながら彼れの嚮導たるの材は完全にてはあらざりき其は凡そ一千五百四十九年に獨乙神學及主義を教ふる嚴正なる學校長フレンシスイリリカス(Francis Hiriens)はメラクソンを誤謬の教を授くものと非難せり又アンドリース、ホッフワール(Andreas Hofler)は其歳信仰によりて義とせらる、教理に關してメラクソンと衝突せり此る争論に就て個人的の悪口は缺けざりし實にメラクソンの感情を害したれども彼は大膽に構へ而して非常に温和なる意見を以て常に彼れの敵手等に書翰を送り返せり殆んど千五百五十五年頃メラクソンは當時集議中なるトレント會議に出席してプロテスタント信仰を提出せしめんが爲に撰舉公より撰出せらる此の文

書はサクソン信仰告白として世に知らる而して此書にはルーテル派の位地の堅固にして動かすべからざる説論を含蓄せり而してメラクソンの晩年はサクソメントの性質につき嚴正なる論争に従事したり此論の説は革命されたる教會に於てのカルピン派教理の勝利となれりメラクソンは充分にはカルピンに同情を寄せざりし其は聖餐にキリストの現はれ玉ふこと、やまた信徒にキリスト自身與へ玉ふことはメラクソンの意見にてありしやは全く明了ならざるなり彼はキリストの一致また奇蹟的の身體を重く論せり然れども彼れは常に人類となりたるキリストの肉體を與ふる事によりて成功するものなりと論せり、

メラクソンは一千五百六十年四月十九日六十三歳を以てウイテンバーグに永眠す其はライブジクに旅行中寒氣に胃され變じて發熱となれり彼れの臨終せんとする時間は祈禱を捧げ而て聖書句節中殊に詩篇二十四篇より二十六篇迄イザヤ書五十三章約翰一章羅馬書五章を傾聴せり彼れの養子プーサー彼れに問ふに何處にか何物にても要する物ありやと彼れ答て曰く天の外何物もなし(nothing but heaven)彼れの遺骸はウイテンバーグのシユロスキルシにあるルーテルの側に



葬られたり實にメランクソンは十六世紀改革中最大の人なりと云を得べし、ルーテルは革命の基礎を据へメランクソンは革命を成就せんとせり、二人は兩極の如くにして各自他を完成ならしめたり若しもルーテルにして衆人の中に火花を撒きたりとせばメランクソンの執るべきは論理的組織的著作なり此れ聖書とプロテスタント信仰を比較して倣したる者革命に就て諸公侯のみならず修養あり教育ある人々を屈服なさんがためにしたる著作なり、メランクソンの沈思にして保守的なることはルーテルの勇敢にして英雄的なる而し戦闘的なる信仰と對して改革成效の爲めになかるべからざりき思ふにルーテルは九十五條の布告文を記しウオームスの帝の面前に大膽なる覺悟を爲せしのみされどメランクソンはアウグスバークの懺悔及び聖餐論を書かざるを得ざりき吾人はルーテルが一千五百二十九年に惡漢魔鬼等とた、かはざるを得ずと書せるを見たり、こゝに由りて彼れは朽道を破毀するの開路者なりしを見るなり之れに反してメランクソンは溫和順良に事を初めたり而て熱心に種子を蒔き水を撒布せり、何となれば彼れは多くの天才を神より賦與せられたればなり、ルーテルの死に於てメランクソン絶

叫して曰く彼れは神が此世の擾亂せるを救ひ助けんとて送り遣はせる人々の中に於て貴き人なりルーテル晩年に迫んでサクラメントに關してメランクソンの意見と相反せり相互に些少なる解錯せり然れども要するに彼等の關係は終生信實にして信用を置きたりき實にメランクソンは辯論惡言を放つことなく革命に於ては媾和者なりき彼れは教會的性質にして西方教會に對しては深く敬意を表せり彼れの教會より離るゝは實にルーテルのせしよりも更に深く悲みとせし處なり彼れは教父等を尊敬せり殊にアウガステンを尊敬せりまたルーテルがせしよりも教理及び儀式を尊敬せり彼れの文學上の才能は較著なるものありき彼れの著書は觀察鋭敏なる判断及び審美的趣味に富み何れも周密なる記憶力を加へられたり彼れの文體は明了活氣艶妙なりきラテン文に於て彼れは一部の長たり又希臘文に於ては却て獨乙に勝りて美妙なりき彼れは獨乙國の教師と名けられ二千の聽衆彼れの講筵に列せんとてウイテンバークに蝟集せり神學者として彼れは充分獨乙革命の首領なりき組織的神學(Loei Communes)は彼れのプロテスタント的最初の著作なりき此れは寧ろ思辯的なるよりも教示的にして福音の眞理を



實際的表揚せんとの意に出づ彼れは亦シセロ及びアリストートルの倫理書を註解なす積りにて基督教的倫理若干卷を著はせり彼れの聖書註釋は舊約の重要な部分をなし又聖保羅の書簡の數種をも加へぬ説教學に關しては學校を創立なし或題目を撰みて順序的説教を奨励せり彼れは牧職にあらざりしかば如何なる場合にも講壇に起たざりき然しながら彼れの説教は其の子弟等にありて準備され此くして革命の意見を諸方に擴張せり、

他に簡畧なる注意を要する所の有名なる獨乙改革者はマルチンブーサー(Martin Bucer)なり彼れは一千四百九十一年ストラスバークに近きアルセース(Alsace)に生る十五歳にして聖ドミニック派に就職せり是れ彼れが熱意渴望せる文學的教育を受けるに最良の好期會にてありき此の年少者が豫表せる大希望は當時ルーテル一千五百十八年四月二十六日諸學者の面前に爭論をなしけるとき行きたりし處のハイデルベルグに派遣せられんことを寺院の主に待みたりルーテルの當時の議論は他日ブーサーが羅馬教會を厭棄して改革者等と運命を共にするの印象を與へたり教職者等は此る事を知りければブーサーに對して迫害を始めぬ其は僧職

祈誓より千五百二十一年に於て教法布令を得而して衆僧の列に變置さるゝに至りたることなり、千五百二十二年彼れはランツタル(Landsheim)の牧師となる而て羅馬教會と全く分離せんが爲に直ちに尼僧と婚せりブーサーは一千五百二十四年聖アウレリアン教會の牧師となり二十五年間其職を勤め管に改革者等に稱揚せらるゝのみならずスウツルランドや獨乙國內に其名を知らるゝに至りぬブーサーは主の晩餐に關しては固よりルーテル派と提携せんことを欲せしと雖も寧ろルーテル派よりもズウイングリ派に傾きたり仍て彼れは此等二派の調和を試みたりしも一部の成效に過ぎざりき、千五百二十九年マーバーク年會にはウイテンバークとゼネバ派の間の調停することを誤りたりされどルーテルの苛烈なる性を和らぐるを得たり、次ぎには一千五百三十六年彼れは調和者となりぬ而してメラクソンと共にウイテンバーク誓約を起草せり、千五百四十八年彼れはインテリムに簽印する爲めにアウグスバークに送らるインテリムとは教皇派とプロテスタンと派の神學上の一致を云ふ而もブーサーは斷然拒絶せり之れが爲めに牧職を非免せらるゝの有様に陥れり彼れ監督克蘭マーの招きに應じて英國に



行きケンブリッジ大學神學教授となれり年少の王エドワード六世はブーサーを  
 歡待なし帝室より彼れの爲め補助の勞を取れりブーサーは克蘭マーと共に三  
 十九箇條文及び普通祈禱書を組成しぬ、一千五百五十一年眠るケンブリッジに葬  
 られぬ、後ち數年を経て女王メリーの御代に彼れ遺骨は掘出されて火焼せられぬ、  
 而して彼れの石碑も破毀されぬ然しながら女王エリザベスの命により後ち再建  
 されたりと云ふ。

### 第八章

#### 獨乙國外邊改革者のサクソン派

吾人は今や獨乙國外邊に移り而して國內附近の洲中のサクソン派の進歩を表  
 出せんとす、其時ルーテル派は北方歐羅巴に何所にも不滅火の如く行きわたりた  
 りされば何所にも革命の意見を永久に留置せり然も吾人は南方歐羅巴にては迅  
 速なる而て殘忍なる滅亡を蒙りたるを見るなり。

#### 一 プルシャの改革

サクソニーに近き洲の一はプルシャ獨立帝國なりし、アルバート (Margrave of Bran-  
 denburg) はチュートニク級により嚴然たる君主の資格にて帝位に座す、一千五百  
 二十二年ナレンバークに逗留中彼れはルーテル派の説教者オシアンダー (Oslander)  
 と觸著せり、後年彼の領内にオシアンダーのルーテル派教理を敷くを許せし程な  
 りき、アンドリース、オシアンダーは一千四百九十八年十二月十九日ブランデンバ



グのグンゼンホーセン(Gunzenhausen)に生る、ライブジグをよびオルテンバークの學校に教育を受け後ちイングレスタット(Ingestadt)の大學に入り學びたり、一千五百二十年彼れはナレンバーク僧職に就く其後彼れは此處の大學にてヘブリユ一語を教へたりき、ルーテル派の意見を信仰せる最初の人なる彼れはナレンバークにては他の人々よりも勝りて革命的意見を敷けり最もその前に多少ゾルデ、ポーレンズ(George Polenz)の力ありたるを忘るべからず革命者等の一般の習慣に倣ひオジアンダーは妻を取る實に一千五百二十五年のことなりその後彼れは羅馬教會と觸著したり然れども新意見の進歩は著るしかりきブルシヤ全國は實際ルウテル化するの觀ありたりき、古昔の形體に倣ひたる獨乙儀式文は紹介せられたり、寺院は施療院と變じぬ而してウイテンバークより送りたる使徒書及び聖書旁註の誘導によりて人々は基督教の重要な真理を教示せられあたかも革命の較著なる新説に接したるの感を惹起せり、一千五百三十二年ポレンズ、オジアンダーはナレンバーク及びブランデンバーク(Nuremberg and Brandenburg)に在るルーテル派教會の憲法を起草せり然れどもオジアンダーの性質たるや極めて短慮にして

彼れの精力は執拗頑迷なりき彼れは同僚と絶へず爭論せり、一千五百二十九年に開きたるマールバーク年會にオジアンダーは出席なし亦一千五百三十年に於て開きたるアウグスバーク會議の如くなりし彼れは一千五百三十七年になしたるシユマルカルドの箇條(Schmalckald Articles)に簽印せり此の如く彼れは革命史に著しき關係を執りき自ら承認したる才能勢力を有する神學者たるを證明せりき、一千五百四十八年のインテリムの公布に於てオジアンダーはナレンバークを去り而して公爵アルバートの爲にキユニグスバーク(Koenigsberg)の教授及牧師とせらる即ち神學校なり、此大學は公爵一千五百四十四年に設立なし以てブルシヤ教會將來獨立の爲めに備へられたる學校なり、一千五百四十九年オジアンダー任命せらる、や律法及福音に關して一場の説話をなせし此說話たるや革命に付て鋭き又醜き論争を惹起せり、オジアンダーに反對の首領はマシウ、ローターオード(Mitthow Lauterwald)なりき、オジアンダーは信仰によりて義とせらる一冊子を發行なし翌年も其の議論を續けり當時彼れの強敵はマルチンケムニッツ及びメルキオル、インダー(Martin Chemnitz and Melchior Isander)なりき、義とせらる、教理につきては彼



れは大體上ルーテルと一致せり何となれば彼れは羅馬派に對するが如くまたカルビン派にも反對したればなり然れど神秘者なりければ彼れは根本的正義即ち基督の神性の人に入るものと解釋せられたり、オジアンダー忽然一千五百五十二年十月十七日死せり革命派は一千五百四十八年ブルシャにて熾盛なる勢力を有したり其はボヘミヤ人等の到着せしによる此の人々等は四十二日以内に本國を去らざる可らざるの嚴命を受けたる人々なり公爵アルバートは其州内に養育院様のものを建て總督マシアス、シオニアス (Mathias Sionius) の監督の下に彼等を雜居せしめたり、

二 デンマークに於る改革

デンマークは革命的理想を抱きたる國なりき、フレデリック一世 (Frederick the First) はクリスチアン二世なる暴君によりて空位となれりし帝位に上りしは一千五百二十三年なりき、此のデンマーク教主管轄政を享けたる新君の最も困難なる状態はルーテル派の異端たることを公許することなりき、此の舊羅馬派滅亡顛倒に關しては帝は最初兩派の爲めに盡くさばやと躊躇したりきしかれ

れども彼れの同情の念は寧ろ改革者等に寄せたりき、一千五百二十四年シユレスウイグ (Schleswig) 洲にて宗教撰擇の自由に關する布令を發せり而して一千五百二十六年帝は最早彼れの假面を脱して公然革命者等に左袒せり翌年彼れはオセン (Osense) に會議を召集なし兩派に良心の充分なる自由を與へんが爲めに困難となり來たることを修整せり依て獨乙人にしてプロテスタントたるものは一千五百三十年に最初の辨證學を起草しつゝありたり此間にデンマーク人はコーペンヘーゲン (Copenhagen) の公論にて四十三ヶ條の事柄を提起せり恰もサクソン人の先きに提出したると同じ類なり此の箇條目たるや當時流行せる中古時代の謬説及迷信に抗して聖書上より眞理の明かなる梗概を説明せるものなり、

一千五百三十三年にフレデリックは其子クリスチアン三世 (Christian the Third) に位を讓る彼れ獨乙を旅行中既にマルチン、ルーテルの勢力に感化され居たり而して直ちに其父フレデリックの如く革命的意見を成就せんが爲めに熱心に勤めた

り彼れはルーテル派たるを顯さん爲にブーゲンヘーゲに彼と女王の許に來れど書翰を送りたり、此事ルーテル及其派の人々に大喜悦を與へたりき、吾人はブーゲ



ンヘーゲン(Bugenhagen)は革命にあづかりしもの、うちにまた大將の量あるを見る其人の才は殊に制度の上に顯はる彼れは一千四百八十五年六月二十四日ボメラニア(Pomerania)のウォーリン(Wollin)に生まる彼の學は 그리스オードにて勉勵なし而うして一千五百〇四年トレプトン(Trepton)學校の長となる、エラスマスや人性論者の著述中より見てブーゲンヘーゲンは明かに革命の蔽ふべからざるを知りたり然しながら彼れを最初に感激せしめ新運動に連列せんとするにいたりたるはバビロニアン捕虜(Babylonian Captivity)なる中のルーテルの一冊子の力によるなり、一千五百二十一年彼れはウイテンバーグに行き翌年其處にて大學に屬する教會の牧師に任命せられ多年を此處に送りけり、フレデリックは一千五百三十七年ブーゲンヘーケンにデンマーク總教會を統轄すべしと命じぬ數年間此命を奉じて就けり、又コーペンヘーゲン大學を功果あるものとせり監督(Bishop)に擧る適當に言へば總轄者等は此の時羅馬法王政の下に置かれたりしが今ブーゲンヘーゲンによりてルーテル派組織の下に神聖にせられたり、デンマーク教會政府は今監督の十二人にて統轄せられ内六人はデンマークより四人はノルウェー

より二人はアイスランドより撰出せらるゝの制となれりルーテル派組織法は新儀式の模型となりぬ而て一千五百三十八年デンマークのクリスチヤン三世の名はシユマルカルドに於て提携せる戰闘好きなるプロテスタント派の中に銘刻せられたりき、

### 三 ノルウェーにての改革

ノルウェーの王は最初には革命に關しては熱心ならざりしと雖も此國一千五百三十七年クリスチアン三世によりてデンマークの王國に連結せらるゝ、に至りて始めて革命の主義を彼れが既にデンマークにて做せると均しく敷けり、ドロシム(Dronheim)の大監督はテザランドに逃奔なし教會の財寶を掠め去れり、又他の監督は非免せられ又或る者は囚牢せられたり、下等の僧侶は新憲法に従ふか或は従はずして追放せらるゝ、か二者一を撰ばざる可らずされど多數は前者を撰べり、然しながら其は惟だ諸公の權力剝奪することを目的となし而て壓制の苛酷なる政略を執行せること、なり仍て基督信徒は遂に事業を成效せり、

### 四 アイスランドにての革命



遠方にあるアイスランド島は王クリスチアンの所有に属する一部分なるが強烈なる反抗を試みしも遂に新意見に従はざる可らざることになりぬギサー、アイナーセン (Gisser Einarson) は年少の監督にして一千五百四十年スカルドルト (Skalholt) の教職に任せられぬ彼れは其の教育を一部分は獨乙にて受く即ちウイテンバーク大學に出席せしなり此處にて彼れは健全なるプロテスタントの意見に接したるなり彼れは彼れの教職上の實務の外に著書は此島の他部分に迄及び遂に人々革命の感化を受く非革命派の首領はホーラムの (Hjelm) の監督たるジョン、アルゼン (John Arsen) なり、一千五百四十八年にアイナーセンの死後衆民を煽動して謀反せしめんとせり此れがためにスカロツトにて一千五百五十年十一月七日處刑せられたり、

其れ十五世紀に於て一時の反抗あり又十七世紀に於てデニスイット派の猛烈なる反抗ありたるに關らずテンマーク、ノルウエー、アイスランドの三國は皆な嚴格にルーテル派の性質を保持したりき、

五 スウェーデンにて改革

一千五百二十三年ガスタバス、バサ (Gustavus Vasa) スウェーデンの帝位に上る此より先即ち一千五百十九年改革思想の酵母はウイテンバークよりの或る學生等によりて彼れの領地ストレングネス (Strängnäs) に貫徹せり此等學生の重なるはオーラフ及びローレンス、ピータソン (Olaf and Lawrence Peterson) と共に王より保護を受くるの人なりしガスタバスはオーラフをストツクホルムの牧師たらしめ而してローレンスをウプサラ (Uppsala) 大學の神學教授たらしむ彼等の有名なる徒弟の中にローレンス、アンダーソン (Laurence Andersson of Strängnäs) 此時高等法官に選任せられたり、スウェーデン人は彼れが新約聖書を翻譯せしとを深く感謝せり、一千五百二十四年聖主降誕祭日に年會は開かれ議したるは朝廷にて定たる變更に付て自國教會を準備せんとせり而して吾人は一千五百二十六年に帝座よりラテン式の無用を爭論なし又僧侶規則の悪弊を告示しつゝ、ある王を見る然しながら此の如き變更がならざるを見てガスタバスはウエスティア (Westenia) 地に會議を召集なし而して彼れの笏位を棄てんと脅せり然しながら萬民は彼れの先行者クリスチヤン二世の殘酷なること記憶しければガスタバスに王として續けられんとを懇願



なし而して均しく彼れの改革事業を助けんがために人々は應分の力を貸せり然しながらガスタバスは速に教法権に關して彼れの最上權を振ひ而てデンマークのクリスチャン第三世の採用せしに倣ひてスウェーデン教會を改革なさんとせり、ローレンス、ピーターソンはウブサラの大監督となりぬ、而てウエテラス(Westeras)にての第二會議は一千五百四十四年にして改革はスウェーデン各地に固定せられたり然しながら此等の變化は重に貴族的命令になり居たれば所謂北方の佛蘭西人(Frenchmen of the North)なる人々の中には容易く行はれざりきガスタバスは直ちにニルスダック(Nils Dack)の導むたる一揆を挫屈すること、なりぬニルスダックとは迷狂的の農民にして反抗的の僧侶等に煽動せられたるものをいふ此事件一千五百三十七年より同四十三年に涉れり其他に至ては彼れの時代は比較的に平穩なりき一千五百六十年ガスタバス死す此時代の諸王中最大の人なりき而て其子エリック(Erik)其の跡を踵ぐ此新王たるエリックはデンマークのフレデリック三世と闘ふの技量を有せざりき何となればフレデリックは彼れの鎧に三つの冠を頂かんとのエリックの要求を肯んせざりければなり戰爭は七年間續けり

而して兩王國共に衰微に傾けり才智上よりエリックはスウェーデン諸王中の優なる者なり然しながら一般に人々が彼れを癡狂者と思ひたりし程に頑迷急激なりしなり、一千五百六十八年彼れの兄弟ジョン及びチャールス彼れに叛く仍て彼れの冠冕を挫き牢獄に繋げり一千五百七十七年遂に殺戮せられたり、ジョンは今帝位に上りスウェーデンのジョン三世と名づく彼れの最初の妻カザリンの感化により羅馬派となりぬ而て今は彼れの撰擇に付ての禮拜を修正せんと勤めぬ是等の結果たるや勢ひ彼れのプロテスタント派の意見題目と激しき反對をせざるを得ず然に同時に羅馬より非難を受けたり何となれば非常に強き手段を用ゐんことを誤りたればなりジョンは其子シジスマンド(Sigismund)なる當時ポーランドの王たる人によりて位を襲がる時に一千五百八十七年なりきシジスマンドのスウェーデンに到着前ガスタバスの諸子の中にて最も伶俐なる公爵チャールスは革命の意見を復興せんと決せり而て一千五百九十三年ウブサラに會議を召集せり其處に定めたるは信仰に關するアウグスバークの誓書はスウェーデン教會にて用ゐる信仰の模範として採用すべきことを布令したるとなり此れ實に其國の歴史



中にて最も大切なる回機點なりしなり、  
 シジスマンドは一千五百九十四年位に上る、最初に彼はプロテスタント意見を承  
 認せり然れども彼れ速に熱心なる羅馬派となり教皇政に熱心となれり彼れのポ  
 ーランドに歸るや、公衆の不満は遂に國務を其叔父チャールスの手に委ねざるを  
 得ざるに至りぬ、一千六百年會議は議定して曰くシジスマンド、スウエーデンに住  
 するが若しくは彼れの子をプロテスタント派として教育せしめざる可らずと斷  
 定す、此等の命令を用ゐざりければシジスマンドは帝位を被免せらる、彼れの相續  
 者等は讓位の權力を奪へり而して、公爵チャールスはチャールス九世としてスウ  
 エーデンの王位に上れり、彼れの統御の下にスウエーデンは全然プロテスタント  
 的の國となれり而して今は諸國と結合してプロテスタント事業に着手せり、チャ  
 ルスはルーテル派とカルビン派の相違を調停せんと苦心せり然しながら彼れ  
 は遂にウブサラにて布達せられたる王統の承認せるアウグスパーグ誓書を確定  
 するに至りたり此の誓書とは則ち一千六百〇七年三月二十七日に定められたる  
 ものを云ふ、チャールス第九世は一千六百十一年に死し而して其の子ガスタバス、

アドルフフス (Gustavus Adolphus) 其位を次ぐ此のアドルフフスの人となりやスウ  
 エーデン諸王中尤も教育あるの人にしてまた其時代にて尤も勝れたる勇戦者なり  
 也。

六 ポーランドにての改革

此國も亦新運動に感激したる早き國の一にてありき實に此地たるや嘗てハス派  
 の居りたる處なりハス派とは一百年以上無數の人員を保ちたる宗派の名なり、ポ  
 ーランドに蜂起したるハス派はポヘミアンスの大勢力を加へ更に増殖せり而し  
 て此等と共にルーテルの著作は流行なし熱心に歡迎せられたり、國語の類似や人  
 種上の親和により此等のポヘミアンスは革命の意見を彼等の獨逸同胞よりも寧  
 ろ容易に普ねく撒布するを得たり、帝シジスマンド一世(一千五百〇六年より一千  
 五百四十八年)は彼れの全力を瀝で革命に抗せり然れどもブルシヤにあるポーラ  
 ンド人には此運動は非常に歡迎せられぬ、一千五百二十五年羅馬教會會議はダン  
 シック (Danzic) より逐はれ而して翌年シジスマンド此れに趣げり追放されたる  
 數多の人を見るに至れり尙ほ古への禮拜復興せられたり然しながら彼れはルー



テル派の信仰再び機に乗せし時に及びて此市府を去れりシジスマンド、アウガスタス(一千五百四十八年より一千五百七十二年は然れども革命に傾きたり而して僧侶の結婚をゆるすこと及び聖語を以てパンと葡萄酒にて聖餐にあづかること、及び僧侶年俸の禁止を行ふと等につき法王懇願するところありたりき、教皇は之れを却けしのみならずなほ異端を奉ずるの國に代理者を送りたりき、プロテスタント貴族等は今や(一千五百五十六年)ジョン、エ、ラスコー(John Innes)なる名譽ある國人を呼戻せり、彼れは恰も十六年前に彼れの革命意見を抱有せる爲に其の職を止めて國を去りしの人なり、

ジョン、エ、ラスコーは一千四百九十九年ワルソー(Warsaw)に生る彼れの家系はポーランド貴族にして而も尤も舊く尤も有名なる家族にして彼れ實に其未裔なりしなり、幼少の時其時代の慣習に隨ひ彼れは教會にて教育せらる而て二十五歳にして蘊奥を究めんが爲に國外に留學せり、ズーリツク(Zurich)にて彼れはズイングリーに會ひバセルにてはエラスマスと共に寓居せり、一千五百二十六年に家に歸る而て十年を経て帝はキューヂエビユー(Civivien)の監督職を彼れに申込めり、然れど

も彼れは既にルーテル派主義に傾き居たれば其の要求を拒絶せり、彼れは其より本國を離れフリシア(Frisia)にて事業を勤む、彼れは一千五百四十二年エンデンにて(Enden)牧師に任せらる、此處にて彼の事業は羅馬反抗者及迷狂的教派の人々と都合よくなりし、彼れは組織的材能を有したればルーテル派の中にフリシアン教會を抱込まするを得たり、一千五百四十九年、インテリムの發布は彼れをして餘義なくフリシアを去らしめぬ、而してロンドンに達し、此處にて外國のプロテスタント會衆を見出しぬ、此の會衆たるや女王メリーがエトワード第六世に代はり英國王位にのぼりし頃には見るを得ざりき、而して多くの困難や危険を冒して始めてラスコー之れを變更してエムセンに行ふを得たりき、一千五百五十六年ラスコー再びポーランドに呼ばる、是れ吾人の以上見たる處なり、而して小ポーランドの革命派の教會を處理せり、彼れの尤も注意すべき事業は聖書をポーランド語に翻譯せるとなり、此著作をなすに七人の助手ありたり、ラスコーは一千五百六十年一月十三日死せり、

シジスマンド、アウガスタス一千五百七十二年に死す王位缺間の時なりければ國



内の宗教異派各々闊く有様なりければ諸公は己等の領分にある種々の異端の爲に宗教平和會議をせんと決定せり(一千五百七十三年)其異端の内にはローマ教徒新教徒ウハルデンス、ソシニアン等ありき總稱してデンデンツと名せり此調和は失敗に終たり、ソシンアン派ユニテリアン派は均しく彼等の意見を弘布せんが爲に正統派なりとなせり凡ての宗派の人々は一致より離たり而して革命者等も亦ルーテル派又はスウイス(のミ)派に分れ敵と戦はずして各自に戦ふに至りぬ此くの如くなりければ内より禍を惹起滅亡の域に際せり、スウエデンの公シジスマンド三世(一千五百八十七年より一千六百三十二年)は舊信仰の同情者にてありき、さればプロテスタントは彼れの爲め無上の侵害を蒙りぬ、此處に於て其運動も廢弛するに至りぬ、ジエスイツト派の活動により保護せらるゝ帝はポーランドの敗滅迄は其勢當る可らざりき、一千七百七十二年ルーテル派は遂に敗滅に歸せり

七 ポヘミアにての改革

バゼル會議にて其名を知られたる宗派はカリクスタイン或はユートラキキスト(Calixtines or Utraquists)にして彼等は西方教會に迄再び吸收せられたるにも關らず革

命存立を主張せり彼等は則ち聖餐の時パンと葡萄酒の兩種を要求せる派なり而して一千五百十九年此派はウイテンバーグ神學者等と關係を始ぬ、ルーテルの如きは彼等の信條は幾分か苛酷なる疵瑕を有するを知りと雖ども而もなほ彼等と友情を交へたり、然しながらピカース(Picard)即ち吾人の所謂モレビア派の人々(Moravian Brethren)と彼れは提携せざりき彼は彼等を異端者と輕視せり何となれば彼等は聖餐に於てキリストの現存に關して偏癖の信仰を有すればなり、然りと雖ども數年ならずして彼等を理解したれば彼は彼は教理上の法式の修正に於て彼等を扶助せり而して彼れ新運動をなすに適恰なる價值ある同盟者を見做せり、一千五百三十五年此等モレビア派は彼等の信仰上の辯證論様の書を發行せり、而て一千五百三十五年彼等の信仰の充分なる告白により是を完成せり、ポヘミアンの革命に付ての熱心ある證據はスニマルカルの戦争においてサクソニーの撰舉公に義勇兵を送りしことを見ても知らる可し、此の戦争の結果はポヘミアン派の一大打撃を蒙り尤も苛酷なる罰刑は一千五百四十八年にルーテル派私淑者の追放せられしことなり、彼等は多くはポーランド及びシレシア(Silesia)に行きたり大



膽にも殘留したる人々は彼等の城地を固守なしたり彼等を黜けんとてデエスイ  
 ャト派の激しき反對ありしにも係はず能く動くことなかりきモレビアンの人々  
 は今はボヘミアン兄弟等の餘勢と共に宗教上的一致をなせり而て政治緊急上  
 より羅馬司職の人々と提携せり實に反對革命(Counter Reformation)の勢力は一千六百  
 二十七年フアーヂナンド(Ferdinand II)二世が彼れの領地よりプロテスタント派の  
 諸形態式を薙盡なすに至る迄振ひ居たり、

#### 八 ハンガリーにての改革

ハンガリー及びトランシルバニア(Hungary and Transylvania)の諸國は重にルイテル  
 の革命と結託せしサクソン殖民人によりて住せらる、一千五百二十一年に革命者  
 の著はしたる數種の書トランシルバニアに達す其は青年の多數ウイテンバーグ  
 大學に入り本國に歸りて改革的意見を教しに由る、ハンガリーのルイ二世の敗死  
 後(一千五百二十六年)王位の權激甚にフレヂツク一世及びジョンゼボルヤ(John  
 Zoludya)によりて争はれたり二人共に革命者を追放せんがために羅馬監督の愛を  
 獲んことに汲々たり此の如く最上權の爲に永續せる内亂の間はプロテスタント

は自然に迫害よりまぬかれ而して彼等の主義を廣布するに餘念なかりきクロン  
 スタットにてデヨン、ホンスター(John Honster)は出版局を設けぬ此事業並に有益な  
 る説教により著しくルイテル派の意見を廣布せり附いて助力となりしはマシウ  
 デヴィ(Matthew Devy)なるウイテンバーグ神學者の寵愛せる學生が四福音及び聖  
 保羅の書翰をマグヤー語(Magyar Dialect)に翻譯せるをなりデヴェイはハンガリ  
 一のルイテルと呼ばれぬ然しながら殆んど一千五百四十四年に彼れは聖餐に關  
 するルイテル派の所説を棄てスウイス派に轉せり此はハンガリーの革命者等の  
 内に不幸なる非難を受けたり而てプロテスタントは彼等の通例の敵の面前にて  
 相互非難攻撃せるに至れり、  
 サボリヤがトランシルヴァニアに不朽の所有を獲得せる後彼れはプロテスタ  
 ントに對して一層の鄭重を表せり彼れの死後グロスワーデン(Groswarden)の監督は  
 サボリアの子の幼少の間執政の職にあたり而て直ちに血を見る如き迫害を以  
 てプロテスタントを脅かせり縱令彼等はザボリアノ寡婦イサベラ(Isabelle)の保護  
 を受けしと雖も追害を蒙れるなり此のイサベラは其國を逐れぬ然れども數年



ならずして其子と共に歸るを得たり而てクロイセンバーク(Clausenburge)の會議一千五百五十七年獨立主義と其國を做し而て一般宗教の自由を宣布せり、ハンガリー及びトランシルヴァニアのサクソン人は彼等のルーテル派に把持し同時にマダヤリスはゼチバの改革したる懺悔式を採用せり、

九 スペインにての改革

此國にての改革は歐羅巴に於ける教皇政の崇拜者等が著しく起らんことを望まざりし運動にてありき何となればフワードナンド及びイサベラの時代のスペインは事々物々中古の制度に深く依信し而て其人の忠義を買はんことに教皇は傾心せり然しながら獨逸全國を震動せる此運動はチャールス五世の領地の他部分に迄其の所以を歸せざる可らず實にスペインはルーテル及びレオ十世が彼等の不幸なる破壊をなさるる前永く此の如き警事に備へたり僧侶の醜惡なる生活及び教法職員等の惡弊並に異端探問の殘酷なることは古昔の信仰より離れてプロテスタントに人々を嚮はしめたり、それ故にサクソンの一僧の著作は彼れ除名放逐の日よりも早やくにスペイン人の内に撒布せられたりき而して教皇より出ず

る文書は究問官長(Inquisitor-general)に命じて凡て此の如く傾向を窺出し而て容赦なく彼等を防礙せしめたり然りと雖ども此の如き計畫は甚だ効果を奏せざりき而して改革的理想は日々到る處に勝利を得つゝありたり、デュアン及アルフォンソ、デ、ザ、ハ、ル、デ、ス(Juan and Alfonso de Valdes)なる二人の雙子を戴きたる改革の事は其處に帝自身の從者の中に必らず革命者の潛り居ならんと言はれし程迄に旺盛になり來れり、此等雙生兒の兄弟は共に智育體育に於て相似たり、彼等は一千五百年頃カスチール(Castile)にて生れぬ、一千五百二十年アルフォンソは獨乙のチャールスに五世を伺候し而うしてエイクス、ラ、チャ、ベル(Aix-la-Chapelle)にて彼の戴冠式に列し又たウオムスの會議にも列したり、其後ルーテルの著書の焼かるゝことを目撃せるが其友ピーター、マーター(Peter Martyr)に送りける言語に曰く世人は此等は悲劇に終りたりとすれど余は此等が始めるのみと思ふと、アルフォンソは一千五百二十四年スペインに歸る、チャールス五世の高官たるガスタチラ(Gastinara)の秘書官となれり、此ガスタチラはスペイン僧侶等に反抗してエラスマスのためを辯護せるを以て有名となりし人なり、一千五百二十七年アルフォンソ一書を著は



し羅馬近來の擒虜を辯護せり而うしてホルボン家警察署を辯護せり此の冊子政  
 府の使節の手に落つ依りて非難せられたれども高等法官のために依然として保  
 護せられた同年他の冊子出づ彼れ兄弟ジュアンに記述したる教會に於ての苛嚴  
 なる攻撃及び教皇政略の非難は此の書中に收められたりき一千五百三十年アル  
 フオンツ、アウグスバーグ會議に列す其處にてルーテル派の告白書は譯せられ而  
 して又彼れは反對者の仲裁者として働きの彼れはプロテスタント派また殊にメ  
 ランクソンの尊敬を蒙れり而して彼はスペインに歸るを得ざる程に革命に同情  
 を寄たりき一千五百三十一年彼れはブラセルス (Brussels) の朝廷に趣く而して一  
 千五百三十三年には彼れは尙ほ帝に奉事したり然れども彼れの後年生涯に至り  
 ては知るに由なし、チュアンはまたスペイン糾問者 (Inquisitors) の目に抵觸するこ  
 となく謹慎にてありき、一千五百三十一年彼れは羅馬に滞留なし其處にて深く興  
 味を以て博物學を研究せり、一千五百三十三年彼れはチーブルスに (Zürich) にありて  
 オハイノ (Ochino) ドクター、マーチン (Peter Martyn) 等と談論せり此處にて朋友を次  
 第々に造りぬ其は決して公然とは羅馬教會を攻撃せざりしとはいへども其の憲

法及び政略の主意に關して斷然たる反對に出でたりき、チュアン、デ、バルデスは大  
 學の教育を享けざりしと雖ども才智及び學力を有する神學者なりき而して義と  
 せらるゝことに對する意見聖書憑據其の研究の大切なること及び其れに關する  
 革命者等の抱きたる均しき意見ルーテルの諸説と甚だ類似せり彼れ重要の著  
 書は講究なり此は原語のスペイン書はたゞ一部保存せらるゝのみ、ジュアンは一  
 千五百四十年早々に死せり然れども其勢力は他年の問チーブルス附近に及びた  
 り、

一千五百四十一年スペインの糾問 (Spanish Inquisition) は頂點に達せり其の尤も  
 早き組織においてスペインのカザリ派を鎮壓せり而て一千四百七十八年にカ  
 スチールに再興せられ猶太人を看出して刈盡せんと計畫しぬ、セヴィル及ウハラ  
 ドリッド (Seville and Valladolid) はルーテル派の入牢者の入ること能はざる程まで  
 に其の牢獄狹隘を告げたり、アンダルシアの人ヴァレロは故郷セヴィルに革命  
 の意見を導けり彼れは不意に浮樂怠慢放蕩の生涯より移りて聖書の研究に耽り  
 たり此れが爲めに彼れは一千五百四十一年サンルーカー (San Lúcar) の寺院に幽



閉せられぬ彼れの最著名なる改信者はエギチアスなり此の人の大學派の議論遂に帝をして彼れを一千五百五十年トルトサ (Tortosa) の監督職に推舉するにいたりぬグハレロとエギチアスの友情は審問者の目に止まりぬエギチアスはルーテル派なることを非難せられ牢獄に投せられぬつひに彼れは殆んど彼れの所説を公然と拒絶せることを表明して許されたり二千五百五十二年八月然れども此は彼れの原告者等を満足せしむることあたはずして再びホーリー、オフキース (Holy Office) の囹圄に繋がりたりエギチアスは終に一千五百五十五年彼れの自由を恢復なしグハレドリック (Valindria) に永住なし其翌年死しけるが其時迄も彼れはルーテル派集會の部員たるを證誓なす勇氣を具へ居たりき其他重なる革命者はドミンゴ、デ、ロガス (Domingo de Rogas) なる血統正しきドミニカン派の一人より彼れはウイタンバグの神學者等の著作に激されしのみならず此れと類する著作をなせり、ロガスの共力者の一人をアウガスチン、カザラ (Augustin Cazalla) と云ふ朝廷の説教者にして獨乙の旅中ルーテル派に改信せる人なり彼れも亦グハレドリックに居住を占む而て彼れの智能により能く革命主義を敷衍するを得たり然しなが

らカザラ殉教者たるの勇氣なき爲めに處刑臺上にて彼れは教會と一致せんとの願望を示せり彼れは此りければ幾分か殊點を興へられて生きながら焼刑せらるゝ代りに絞殺せられ而て焼刑に處せられたり、ルーテル派の進歩は此時スペイン人の内に其れを束縛せんと企圖せる程に屢々乎とし成功の域に向へり、チャールス五世はフィリップ二世なる其子の爲に帝位を譲りぬ而してヤステ (Yuste) の寺院に隠れぬ然しながら彼れの隠遁せるより絶へずホーリー、オフイスを助力なし凡ての異端者及び改革者を制壓せんとせり、フィリップは一千五百五十九年親臨してスペインに着せり而して其時よりプロテスタント非難の地位に在りき此の猛惡なる君主はスペインのネロ (Nero of Spain) と俗稱せられたりさればフィリップは信仰箇條につき一千五百五十九年十月グハラツドリックにひらかれたる裁判庭に出席しぬ此の時數多の教育あるスペイン人は彼れの面前にて罰せられたり、フィリップは直に異端探問を行はんとせり然れども彼れは罰人を苦しめるを樂みとして其業を執れり告發さるゝこと及禁錮さるゝとにより牢獄は人員充満せり其中の多くは火炎焰々として諸丘を照らすこと



ろで人々を火刑柱につれ行けり、トレド(Toledo)の大監督カーランザ(Carranza)は猜疑に屬せし最初者の一人なりき彼は既に革命を説服することによりて英國及びトレント會議にて其の名聞ゆ然りと雖も或る同盟したるルーテル派の教會問答に就ての事件が彼れをして捕縛せしめたり而して補助者ありたるにも係はらず長日を経過し始めてグレゴリー三世の時代にカーランザ召されて彼れの教會問答中にある十六箇條の誤謬を抛擲すべしと宣告せられぬ其後彼れは一千五百七十六年五月二日羅馬にて死せり、

一千五百七十年刈盡の事業完成しぬ羅馬監督教區に對する調和茲にふた、び破れぬ此れより久しき以前スペインに在多くの革命者等は他の國に隠れあるを見たり彼等は獨乙フランス、オランダ殊に英國に避けたり此等の階級の尤も勝れたるものはドライアンダー或はフランシスコ、デ、エンデナス(Dryander or Francisco de Enzinas)なりき彼れは一千五百二十年バーゴスに生れ其後伊太利にて學を努めたるのみ去てルーヴハイム及びウィッテンバーグに行けり此處にて彼れは改革を會得したり、一千五百四十三年ルーヴハイムに在りける時彼れはカスチリアの語

にて新約を物せり此はエラスマスErasmusの聖書を學びて感激したるによる彼れは此れがために同年ブラッセルにて禁錮せられたりき而も一千五百四十五年英國に逃れて克蘭マー(Cramer)の保護によりケンブリッヂ大學のギリシャ語教授に任命せられたり、ドライアンダー其後ストラスパールグやバセルやゼネバに生を送り終に一千五百七十年ゼネバにて死す彼れの二人の名譽ある兄弟デュアンとデューム(Jean and James)は共にプロテスタントを信仰せり而てデュアンは一千五百四十六年伊太利にての糾問により死刑に處せられたり、スペインはなほ教皇政治の寵兒たるの名譽を負へり而して第三流の勢力に陥れり猶太人は十五世紀にフェルディナンド及びイサベラにより處刑せられしと及び十六世紀にてはフィリップ二世に束縛せられしとにより自然其の罰として嘗て世界の先鋒たり又歐羅巴に尤も榮えある一つなりし彼れ等も遂に衰退するに至れり、

十 伊太利にての改革

ルーテル其時代の惡弊に抗して爆發を始めし時よりも勝れたる懷疑と非基督教的の調子は歐羅巴上流社會のうちに看出するに能はざりき然しながらレオ十世



の御代の末年に至りて改良現れき羅馬にて五十人の熱心なる學者の俱樂部神愛講の名稱の下に組織せられぬ其の重なる人々はコンタリニー、サドレチギベルト、カラフハにして皆な教會のカーデナルとなれり其處には其俱樂部とルーテル派運動との直接なる聯結あらざりき然りと雖も信仰によりて義とせらるゝ、教理のみ伊太利革命者等の精神を活動せしめぬ而してルーテル、メラクソン、ブーザ、イブウイングリーの書は早時より伊太利に流通無し又無量の嗜味を以て讀れたりき此會友は忽にして殖ゆ伊太利に政治上の混亂ありたるため一派はウエニス(Venice)に移れり而して其處に商業上の中心點に革命の種子を撒布せり此地忽にして進歩的の理想を歓迎するに至りたり彼等の中には英國の脱走者レヂナルド・ポール (Reginald Pole) 聖書を伊太利語に訂正せるブルシオリ (Braccio) ありたり孰れも熱信にして信仰深き人なりきポールは一千五百十九年早々歐洲のアゼン (Ains of Europe) なるパツア (Pavia) を訪へり而して伊太利諸學者と交情を結べり義とせらるゝ、コンタリニーの教理につきポール公言して曰く教會が半ば隠蔽したる寶玉に光澤を加へたりとコンタリニーの言を言へり而して他の會友なるフラミニ

オ (Flaminio) はルーテルと均しき教理を抱けり又モデナの監督メローン (Melone) を見る彼は一千五百五十七年ポール第四世の命により四年せられたり其は彼れはルーテル派に傾き居たればなり而して一千五百四十三年に刊行せる基督の死の恵みと (Benefit of Christ's Death) 題する一の勢力ある論文の爲によるなり此れが誰れに依て著されたるに係らずメロンは有勢の保護を得たり而して健全なる精神の弘布を寄與せられたり全然ルーテルの見地と同じからざるも此れに甚だ似たる比喩を有せり依て糾問者は終に伊太利に於けるルーテル派の擴張を妨碍せんがため不起り原語並に翻譯語の著書の四萬巻を此の糾問者の手に奪掠せり此の伊太利語に於る頗る困難なる著書の作者は多分アントニオ・バリリオ (Antonio Paulleo) なるポール (Pole) の一友及び會友に屬する他の人々ならんバリリオは遂に糾問案によりて逮捕せられ一千五百七十年羅馬にて火刑に處せられたりき殊にウイテンバーグ及ゼチバの革命的感化は迫害の爲にアルプスに移れり改革者等は凡て有用なる伊太利市を設けたりアラモデナルクカマンチエアシエナ、チーブルス附近の地 (Ferrara, Modena, Lucca, Mantua, Siena, Naples) 是れなり凡



て此等の地にてルーテルは彼れの消息者及び同盟者を有せり、一千五百二十二年にルーテルはヴェニスが神の言葉を承認せしむるを聞き大に喜べり、ヴェニス領よりまたフランコイット(Franconia)出づ即有益なる歴史上の記事を編纂せり、彼れはメランクソンの徒弟たりしが其後激しくメランクソンに反對するに至りたり又ヴァーヂェリオ(Versario)イストリア(Istria)の監督にして革命者の一人なりき、彼れは一千五百四十八年プロテスタント派を襲ぎグリンソン地方(Glions)に革命主義を弘行なし、一千五百六十五年チュービンゲンにて死せり、一千五百三十年より一千五百四十二年迄の間は伊太利にある革命者等は最も光耀ある勝利を占ぬ、伊太利にて最も勢力ありし弘布者はオチノー及ビーター、マーター(Ochino and Pelor Martyr)の二人なりき、オチノーは一千四百八十七年シエナ(Siena)に生る教育は乏しかりしも其不撓の熱心及信仰を有せり、彼れはフランスコ派に入れり、一千五百三十四年カプチンス(Capuchins)有名なる雄辯熱心を以て目せられき、チャールズ第五世はオチノーが其歳に四十日齋説教を(Lenten sermons)講筵せる時即ち一千五百三十六年に出席せり、彼れの有力なる論法は深く帝を動かしめぬ而して帝は曰へり、此

人は能く石をも動かすを得、チーブルにてオチノーは神秘派のヂュアンヅハルデス、及びビーター、マーターに會せり、實に彼れの説教は庶衆を感動せしめしのみならず又ポール第三世の如きは教法告白者(Paul Confessor)たる名譽ある地位を與へたり、一千五百三十八年カプチンスはオチノーを有職の長とせり、然れども彼れのチーブルスにての説教は赦罪法煉獄等を黜けて義とせらる、事悔改及び他の福音上の事に餘り重きを置けり、ヴェニスは次に彼れの事業の中心となれり、彼れは羅馬に召喚せられたるが、其際フロレンスにてビーター、マーターに遇ひぬ、マーターは當時國を脱走せんとし、オチノーにも勧めたりき、オチノーはゼネパに行き、伊太利人の集會にて説教せり、時に一千五百四十二年なりき、彼れの生涯は質朴にして純潔又隱遁的のカルピン派ですら稱賛する程、嚴格に處したりき、一千五百四十五年オチノーはアウグスバークに行き、其處にて二年間伊太利脱走人に教へたり、當時帝は命じて國事に鞅掌せしめんとせり、然れども彼れは事務に通せずとの伴言をなしてストラスバークに逃れ、再度ビーター、マーターに邂逅なし、うちつれて英國に涉りたり、ロンドンにて彼れは伊太利人の集會に働けり、然れども女王メ



リーの即位により止むなく大陸に歸れり彼れは再びゼチバに行きぬされどサー  
 ウエタスの(Savelius)の殘忍なる死様に關して論評講議しければ此市より放逐せら  
 れてズーリック(Zurich)へと轉せり此處に一千五百五十六年にオチノーは主の晩  
 餐に關して二卷の書を著はせり論ずるところカルビン派の意見にしてま、ンシ  
 ニアンの彩色をも加へたり(Socinian Colours)一千五百六十一年教會問答を彼れは發  
 行してキリストの人格と事業三位一體の教理を論述せり而してグランゴに行け  
 り此れ羅馬派ならざるポーランド人は罰す可しとの布告を逃れんがために行き  
 しのみオチノーは一千五百六十五年獨乙のスクラッコー(Sollicon)に死す彼の才  
 能は尋常一般ならず而して彼れの神學上の錯亂なる事はキリスト教の眞理の恨  
 基より離隔するよりも寧ろ連續せる迫害のためなるかの如し彼れは其時代の爲  
 めにまた彼自身の精神病の爲めに犠牲となりて死したり、

ピーター、マーター、ヴァーミグリー(Peter Martyr Vermigli)オチノーと同代にして二千  
 五百年九月八日フロレンスに生る彼れは其父の希望に反して一千五百十六年フ  
 キーソール(Fiesole)のアウガヌチン派の僧職に就くパツア(Paduana)にて學ぶスポレ

ト一の長老となる(Abbot of Spole)後ち彼れはチーブルスに近き聖ペトリの長と  
 なりぬ此市にて彼れはデユアス、デグアルデス及びオチノーの勢力の下に來り而  
 して完全に革命の側に屬したりたとへ異端に付て疑われしとはいへど彼れ一千  
 五百四十一年訪問使長と任命せられぬ(Visitor-General)然しながら條規を執行する  
 こと嚴なりければ彼れは衆侶に惡まれたり而してサンフレデアノ(San Frediano)の長  
 としてルツカ(Lucca)に送られたり然しながら彼れは一千五百四十二年ストラスパ  
 ーグに行きグーサーの款待を享け其地大學の教授に任命せられたり、グランマー  
 の招待により彼れは一千五百四十七年英國に行きオグスタオルド大學の學生に  
 聖保羅書翰を講演せり彼れはまた英國教會の新儀文の組織せることを論辯する  
 こと盛なりき女王メリーの即位により大陸に歸り再びストラスパーグを居處と  
 せり間もなく嚴正なるルーテル派は此の市に權力ある者となりたり而してマー  
 ターはオーガスパーグ告白に記名せざるを得ずなりたり二年を経たる一千五百  
 五十五年主の晩餐に關する論争は起れり而してマーターはストラスパーグを去  
 りてズウリックに趣き餘年を送りたり此の後年は英國教會の人々と共に聖餐の



教理につきて多忙なりし故に聖三位一體又主の神人兩性につきて又伊太利佛蘭西の人々と相談餘念なかりき彼れは一千五百六十一年九月ボイシー(Dois)にてありし争論に出席せり然しながら主の晩餐に付ては遂にソルボーン(Sorbonne)の爲に非難せられたりピーター、マーターは聖書註釋數部を遺して死せり彼はまたメランクソンに倣ひて(Loci communes) 即ち通俗書を著はせり此は十六世紀に於る革命派神學を研究するに重要の一なりとす

革命の不活潑は南部歐羅巴の諸國及びスペインに於て其立脚地を保つ能はざる爲に伊太利各地の興亡に關せりプロテスタント派は其尤も同盟に富みたる贊力者を北部歐羅巴に得たり其の嚴正なる理想其の較著なる自主を有せり而して法王(Ultramontanism)派の人々は西方キリスト教を捨てウイテンバッグの僧侶と親和同力したりしかうして各處にて革命者を分離せる不幸なる論争は伊太利にても繰り返へされたりきンシニアン派はポーランドに流行せし如く此地にても流行せり君牧師カラフツ(Karaffa)により其後ポール四世は一千五百四十二年に反對運動を始めぬ壓制なる糾問令はスペインの如く亦伊太利にも及びたり比較的

僅時に於て正統派若くは異端派に係はらず數多の弟子等其の殘忍なる活劇を蒙らざるを得ざりき



### 第九章

#### スイツランドノ改革者

吾人は今や目を轉じて獨乙及び北部歐洲に於けるサクソンの改革より補助的學派に移らんことを之はルーテル派よりは更に進歩主義のものなりき先きに論せし如くサクソンの改革派と根本的教義に付衝突したりき之れをスイツランドの改革と稱するを得可し蓋し是スイツランドにて起り進々乎として勝利を得たり然れどもサクソンの學派の如く之れ其起りし國には限らざりき佛國、スコツランド、ネサールランドはスウイスの思想の感化の下に來り興敗を共にせりき

(伊) スイツランドに於ける改革

ウルリチ、ツイングリー(一千四百八十四年、一千五百三十一年)

ルーテルがリオ十世の勅書に反對し獨乙に新教會を形成せる間にスイツランドにも此等と同一の運動ありき只に教義儀式而已ならず人民に對し清潔なる道德

的空氣を吹入することなりき獨乙宗教改革は一人の仕事なりしがスイツルの改革も一人の仕事なりウルリチ、ツイングリー之なり彼は一千四百八十四年正月一日ウイルドハウスの山村に生る故にルーテルより若きと三四ヶ月而耳ルーテルの如く頓才に富み音楽を好たりき但異教の詩人哲學者に對する見解は大に異なり父は百性地主にして母はフィシエンゲンの僧の姉妹なりルーテルの如く彼は普通の民より下れり其故に一生涯其の起原の習慣を有したりき八歳のときにウエゼンの學校に遣らる校長なる叔父と住へりき二年位にバゼルに送らる三年後にベルンの高等學校におくらる、一千五百年にグインナにうつる二年位にバゼルに歸へるトマス、ツイテンバハはツイングリーに是等の福音的主義を吹き込めりツイテンバハは中世紀の名稱學派とはをほいにことなりき先見の明ありき彼れはツイングリーに教へたり世の救罪はキリストの死にて十分なり、僧侶にあらず聖書にあらずスクールメン、ローマ神學誤謬を摘發したり聖書は信仰の規則なり如斯くツイングリーは中古の教會よりいづれも離ることなかりき二十二歳にしてツイングリーはコンスタンスの監督に由りてクラルスの長老となれりき勉強の

### 第九章



暇ありきゆへに將來の事業の準備を注意してなせりき近隣の子供を集めて古典を教へ自からも演説の技術を學ばんために中世紀修辭學を學べり當時神の説教者なるものは第一に神を知り又た語ることを知らざるべからずと語れりエラズマスギリシヤ語の聖書を出すやツイングリー一冊を學び己の手を以て是れを寫し聖ポロの書翰を暗記したりき聖書を研究すればするほど其の權威を養成したりき然れども暫くは法王の權威を信じ法王の爲めにやしなはれたり此のときツイングリーは共和政治家にして平民主義を主張し聖職の階級は信せざりきツイングリーの時代にはスイスノ軍兵は歐洲最良のもの考へられたりき此に於て政府は金を高く拂ふ人には其市民を頼みて兵士とせり又教職は軍隊付の僧侶と稱し一千五百十二年より一千五百十五年の間ツイングリーは其の軍兵の僧としてグラルスを出で戦争はスイスの人民に有害なるを見れば即ち兵士の爲にも人民の爲にもツリックの人民に命じてまつたく兵士賣買を禁じたりき彼れは又た佛王とスウスの同盟を非とせりきツイングリー此の時より改革者として活動を始めたたりきルーテルの困難は内部より生まれりきルーテルは信仰に由りて義

とせられてふ説を主張し教會に向ひて之を信せんことを要求したりローマ教直ちに己の非を悟りて聖ポロの説を取しならばルーテルは教會内に止りしならん然れどもツイングリーは教會の古代の權などは之を信せざりきルーテルの如き神靈的にもあらざりき此の見解は其の生地山地に限りきルーテルの如く心の苦痛を感せしことなし人性の墮落信仰の力を觀察せることなしルーテルの心靈上の刺激に由りてせんとしたることを彼自己の理性に訴へて之をなせりきツイングリーは直ちに教會の習慣を攻撃す則ち曰く之はギリシヤ語の聖書に見へすとイタリ、ローマ教の教義は兎ても聖書に由りて證明する能はず彼れはエラズマスが一千五百十四年にバベルを訪ひしに由りて益々此の確信を生じたりきエラズマスを見るを得意となしたり

一千五百十六年ツイングリーは反對黨の爲に逐れてアイシデレンと云ふ山中に移れり之はグラルスの佛黨の厭惡に由るなり然れども結極改革者には利益なき彼は教會の濫用を治する機會を得たり

アイシデレンには處女マリヤ、キリストの肖像ありて澤山の巡禮者之に集る是等



の像は幾千年の古きものなりとす、ツイングリーは肖像禮拜を攻撃す此の事ローマに聽こへぬ大なる擾亂を來せり、法王はスイツランドより兵士の備もあれば今やズウイングリーと戦を好まず、彼れの地位を高めて之れをなさんとす、彼れ斷然之を拒めりき、然れども眞理を傳ふることを妨げずとの條件に基づき一千五百十八年にズーリチにて説教者となり、忽ちに當時の弊害を攻撃す、ベルハデン、サムンなるものありテツルの如く赦罪權を賣りつゝ、ありしがズリヒに來れり、議會に追りて彼れを逐出さんことを要す、此要求や好くされたり、リオ第十世は彼れを出すことに賛成し、尙ほ彼れには法王の養老金を與へたりき、ツリヒにてズイングリーは今や三ヶの事に關係したり、(一)聖書の權威を主張し之を解釋するの良法を發見す、(二)市民の道德を高む、(三)スイスの同盟は其の素志に基き獨立たる可きと然し、議會即ち市會に訴へたり、彼れ又今や斷食とローマの習慣を攻撃す、彼の説を實行せんため彼の弟子の或るものは大齋に肉を食ひて訴へらる、之れを辯護して無罪となり、今や更に轉じて法王の獨身生活を攻撃す、法王アドリアン六世之に關係しズリヒの民に之れを放逐せんことを要求す、ズイングリーは茲に於て六十七通の論

文を草して公論に訴ふズリヒの會議はズウイングリーを善とし遂にはコンスタンスの監督領と分離したり、茲に於いて改革は大に進歩しラテン語は使用せられず、修道院の收入は教育費に充つ、教職の獨身生活は止められ、僧侶は其の誓を解かざる、聖餐は偶像なりと云はれ、一千五百二十五年聖週の木曜日、兩品を用ひて聖餐を執行す、斯くの如くにして其方針や餘程劇烈なりとす、彼れは神の語中に無きものは悉く之れを去るべしと主張し、其の運動はスウイツランド全體に廣まれり、國の全圖は二黨派に分る、五千の山林の郡はローマ教會に屬す、バゼル、ポルンは新運動に屬す、ベルンを味方にせんと欲し、ズイングリーはローマ黨派に請求して、爭論に訴ふ、三百五十人の僧は之を聽き來り、彼の説大に力あり、ベトンの人復々屬す、茲に於て氷炭相容ざるに至る、宗教的黨派は面と面と接して現はれ、又バゼルの町と大學も改革者に組みせり、此の知力的なる町人はハス黨則ちオイコランビデヤスの稱する改革主義を吸入したりき、彼れの事はライプシヒの議會ルーター、及び獨逸改革者の中に之を見たりき、一千五百十五年に彼はバゼル大會堂の説教者となり、エラズマス、の信用を受けたり、一千五百十八年アウグスベルグにて同一の地位を備



たり然れども身體に不相當なるを以て職を辭して一千五百二十年フラインヒの寺院に歸る此の所にて冥想に日を送らんとすされど改革に賛成する厚かりければ之を脱してバベルに歸り其の講演を始むバベルの監督はオコランビテヤスが中世の濫用を攻撃せるを辯解せんとす然れども元老院は聖書にあるは皆之れを主張すべしと茲に於てか彼の説は大にバベルス及びスウツルランドに行はる改革者の中にて政教一致を主とせる者は獨りズウイングリあるのみ彼はスイツルランドの政體を以て共和國となさんとす山林州にて力あるものは之を制へ大なる州に力を與へんとせりき彼の説は行はれずベルンは政教分離を主張す歴史に照すに彼の説大に善し平和主義行はれカベルの第一條約成る然れどもローマ教を奉ずる人々は此の條約には加擔せず却て彼等は戦争を主張し新教徒を忠告したりき遂に戦は破裂したりき一千五百三十一年森山の州はズイリチに進みて之れを打つ新教徒等破れズイングリ其の中において足に二ヶの傷を受け頭部に一彈を受けたり敵將來りて見るに彼れ尙生命あり僧を要するやと訪はれたれども否など答ふ彼れ即ち彼の命を斷つ死顔溫和なり彼れの倒れたる所に一石あり

て其の跡を記す曰く體を殺すも魂を殺す能はずとは是れ一千五百三十一年十月十一日教會の自由と真理のために死せるウルリツチヅイングリーの言也改革者に依りて教會の益きは彼が著せる眞偽の宗教之れなり一千五百二十三年に出づ人は之れを異端と云ひ分派と云ふ然れどもインカルネーションメント聖靈の身位等につきては彼は聖書に従ふ彼は神を以て絶對の主權者となす餘り凡て外形上神と人との媒介者あるを無視したりき故に神の恵は教會長老サクラメントに直接に来るとされば洗禮は記號聖書もカルバリ記念而已信者に生を與へずキリストの人體は天に在ます故に最早地に下るを得ずと説けり此に於てはカルスタットと説を同ふせりルーテルは之に反對して曰くキリストの人體は靈化せり故に聖餐に於て人に來ると

(呂) ウイリヤムフアーエル(一千四百八十九年、一千五百六十五年)

オコランバデマス死せるやズイングリ間もなく死す、一千五百三十一年十一月二十四日此二人の死や全體の運動に大に關係を有す之が一時中止の姿となれりされどヘンリーブリンゲル、オスハルド、マイコニヤスの二人は能之を防げり此時



に思はざる一體の助は出たり此の時まで重に獨逸語を用ゆる州に其の説行はれしが今や佛國語を語る州の中に入り其張本をノイハテルのフアーエルと云ふ斯説に賛成してデエチバの改革者を起せりきフアレルは貴族の子にして軍人の教育を受たりされば彼は學者的なり故にパリスの大學に入所にて彼はストビユレンスを知りてローマ教の教義を選み至れり卒業後フアレルはモーズに至る然れども一千五百二十三年迫害起りて佛國を去りてバゼルに至り一千五百二十四年に此所にて彼は亂暴なる所置を以て改革の方針を助けたり故にエラズマスは市會に説き有司を勸て町を去らしむ彼は右方左方にさまよひ遂に獨逸に至りスイツランドに歸る、ベルシヤにて説教することを許され反對の内において一千五百三十一年まで働さしが進んでデエチバに至る此所にも私家にて會を開き人々の爲に攻撃せられ三時間以内に町を去る可しと命せらる其後一千五百三十三年デエチバに至る其説教や功ありて一千五百三十五年八月に法王權を棄て教會の單一なる禮拜に歸れり此の時に一大人物現るジョンカルビン之なりデエチバの事はガルビンに任せ置きフアレルは巡廻師として歩き其説を進むるに忙しか

りき然れども一千五百三十八年には兩人共町を逐はるフアレルは獨逸に行きしカルピンはストラスベルクに行き後に一千五百四十一年にデエチバに行きフアレルはセルベタスの火刑に従ひ其の誤謬を棄る事を勸たりき一千五百五十八年フアレルは若き婦人を娶る之れに由りて、カルヴンとの非常なる争起れり、フアレルは一千五百六十五年迄傳道に従事し晩年に於てメツツに傳道し其勞働の結果として同年九月十三日に死去したり

(波) ジョン、カルヴァイン(一千五百九年七月十日、一千五百六十四年五月二十

四日)

グイリアム、フアレルに次げる人をジョン、カルヴァンといふカルヴァインは一千五百九年七月十日を以てフランスのノヨンに生る父はノヨンの監督の書記にして有名なる聖職なりき母はシエーン、ラフランといへるものにして宿屋の娘なるが熱心有徳の婦人なりきジョンは其二子にして幼時はデモン、トメルトメルの貴族の家庭に於て教育を受けたり一千五百二十一年五月二十五日に於て彼は大に決心してノートルダム院の僧となりて剃髪せりき此の時に彼は十二歳なりノヨンの疫病



止みければモントメルは學術研究のためパリスに行らる、カルビン之が伴僧なり  
 き學多才なるマチウリンコリエーを師とすカルビン常に此の人に負ふことの多  
 きを認む又夫れよりセルピンルモンテキユの大學に移パリスに在りては一スベ  
 人に付きて學び雄辯法を研究す彼大學に在るや大に哲學的思相を現し友と無益  
 なる遊に交らず讀書三昧に耽けり向かに其友人に凌駕せり彼の蒼然枯顔は  
 能く彼れが嚴肅大學間に身を委ぬしを見るに足る一千五百二十七年九月十九歳  
 のときカルピンはマテビルにて教會の職を得たり一千五百二十九年に其の本國  
 ノヨンに近き所に移れり此の成功は大に得意とする所ありしもカルピンは羅馬  
 教會に教職となるを許されず彼れ父はカルピンの商賣は餘り金にならぬ故彼を  
 法律家になさんと念へりき又カルピンはピアレオリベクンなる人に聖書を研究  
 し其中に羅馬教會に反對せる所を見たりきカルピンは猶羅馬教會員たりしが法  
 律を究む其のためにパリを去つてオルシアンに至る彼の學才は茲にても著し  
 く時には先生をさい勤めたりき其町を去るや彼學問に對し禮遇するため通常の  
 金を拂はずして博士の學位を得たりき他學問は棄てざりしかども彼は聖書の研

究に餘念なかりき夜は徹夜し朝は其の學べる所を復習し而して之れを會得す彼  
 れの傳記者ベサ曰く徹夜は彼に記憶を興たり然れども彼の健康を害し遂に早  
 く彼をして死に至らしめたるものなりと、オルレアンよりカルピンはブルヂエス  
 に至る、法律を研究す、メルキラルブルマー希臘語博士を知る彼より該語を學び原  
 本にて新約聖書を調ぶ、カルリピン又彼れより佛國に行る改革のことも學ぶべ  
 きルテルーが九十五通の論文を題用せしより十二年過ぐ至る所として擾亂の起  
 らざるはなし

佛國も此の感化を受たり、カルピンもオルレアンの改革黨に組す來りて教を乞ふ  
 者多し、ピーサ曰くカルピンは徒に辯を弄せず澤遠なる知識を以てす人皆な稱重  
 せざるものなし、其の父死すカルピンは家族の干係の爲めにブルヂエスを去る後  
 又パリスに來り一千五百二十九年及び三十二年迄で改革事業に運動す此の時羅  
 馬教の迫害盛なり、一千五百三十二年カルピン一著ありセチカの澤功と云ふクレ  
 メンチャ註解之なり或人曰く此論文は佛王フランシス一世に勸めて迫害を和か  
 しむるの目的を有せしとカルピン名を得て金を得ず蓋し自費を以て出版したれ



ばなり、カルビン今や二十四歳にして佛國改革黨の主領となる時に一出來事あり  
 カルビン止を得ず茲を去れり曰くソルボン攝政として撰まれし時ニコラス、コッ  
 プは諸聖徒の自の信仰に由て義とせられてふカルビン主義の説教をなすコッ  
 正に捕へられんとするを見てバゼルに逃る、カルビンも亦た佛王の姪なるナバン  
 の女王に身を投ず、一千五百三十四年にはカルビン再びパリスに出で私に己の説  
 を述べ或時スベインの醫師なるセルベタスなるものと會合す遂ひにセルベタス  
 は刑に處せしむるに至る又た此の頃カルビン書あり各付けて「サイカペチキヤ」と  
 稱す人の心魂は死と最後の甦との間には眠りの状態にありと云ふ説に反對し此  
 はオルレアンにて出版せりき彼れ迫害に遇ひてポイチアに至り佛國改革者の中  
 にて始めて岩を臺となし、洞穴中にて聖餐を執行す、カルビンはバゼルニ至る然か  
 るに其他の有名なるもの亦た茲に至るシタモン、グリナユス、ウオルフ、ガングカビ  
 ツ等茲に在り後者はバゼルの改革者にしてカルビン彼より希伯王語を學ぶ、一千  
 五百三十六年にカルビンは一著あり「基督教宗敎制」と云ふ之れ自己の説を佛國の  
 前に辯護したるなりとす此の書の主意たるや其の始めラテン語を以て記された

りき是れ萬國の學者に讀れんがためなり但し間もなく佛譯されりき其の始めは  
 無名にて著し、六章を有す此の著や著者の言の如く、迫害せらる、新教徒の信仰を  
 明かにせんため也と、二十五歳の少年の著なれ共其神學の見解の發達したる實に  
 驚くに堪へたり蓋し是れ彼全く其の神學思想を網羅すればなり是はカルビンの  
 如く神學を學ぶ年月短き少年の人には稀に見る所なりとす此の時代の著述にし  
 て此の書の如く後世人士の思想に斯かる莫大の影響を及ぼせし書は余輩稀に見  
 る所たり一千五百三十六年カルビンは佛國に行き是を利用し議論を定めん爲な  
 りきスイツルランドに歸るに當り通常の道を行てはバゼルに達する能はず蓋し  
 國亂れたればなり茲に於てゼチバを通りて行く斯所に止まれる間にフアルルに  
 會し改革運動を助けんことを需めらるカルビンは神學研究の理由を以て之を拒  
 むフアルル則ち聲を改めて曰く汝若し神學云々を名として余の命に従はずんば  
 神は汝を以て主に背けるものとなし賜ん  
 カルビン此の説を聞きて驚く則ち止まる事を諾す神學教授に任せられ改革に従  
 事すカルビン今や年二十歳となる其餘命をゼチバに送るゼチバの人々は教を棄



てたれども新教には不案内なりき是れ等の人が狂心家の掌の内に陥らざらんがためにカルビン一種の基督教々理要賛をつくる十人づゝ集めてちかいをなさしむ此の思想やカルビンの言に由れば人々喜びて之がちかいをなせりとルルーテの如くカルビンは青年の教育に従事す學校を立て子弟を教育し宗教問答書を作り子弟を教訓す一千五百三十七年ピータカルリと云ふ教僧カルビンと其の友を訴ふるにサベリアン、アリアン主義を以てす蓋し彼等はアサナシオを信じ三位一體身位等の語を用ひざるを以て也此の問題やベルンにて判決せらるゼチバの神學者は無罪となりカロリと云ふは罪定めらると云ふ、

時に二著あり一を偶像禮拜避法一を法王長老に就てといふ改革者は餘り嚴にして衣服禮拜食物にまで干渉し遂に人民大に憤激す二人はサクラメントを施すを拒む茲に於て町より逐はれたりき彼等二人はズリツチにて會議を開き茲に調和を試みられ若しベルニス人干渉せられざりしならば成巧せしならん然ども干渉ありしかば遂に二人は又々放逐の命を受けたりきフハレルはノイハテルにいたるカルビンはストラスベルクに行きて一千五百四十一年迄彼處に止り佛國改革

教會にいたり又は神學の講義をなして日を送り一千五百三十九年彼はブツケルと、もにフランクフォルト會議に列し又ラテスボルンの會議に行く茲にてメランクソンを知る其の死まで親交せりストラスベルグにてカルビンは其著インスチテウト「羅馬書註解聖餐論」を著す此多端なる中にもカルビンは愛の情を動かすの餘地ありき彼れの改宗者なるストイデルてう者の未亡人なるブレントと結婚す彼女は大なる助手なりき一千五百四十九年死去すカルビン慨きて止まずカルビンのストラスベルグにある間デニバーは道徳亂れたりゆるにサドレットなるものはれを利用して法王の權を歸復せんとす彼れは民にすゝめて羅馬教の信仰に歸へれと命すカルビンは其の請所にありて書を其の民におくり羅馬監督の目的を破ぶれりき一千五百四十一年の夏逐放令は撤回せられ秋に彼れ歸る大に歓迎せられたりき茲に直にストラスベルグにて考へし改革法案の實行に着手す、

カルビン此の時は實に多忙なりき日に説教をなす一週に三日神學を教へ會堂に集り講道書を記し議論をなし書簡の往來に忙はしかりきカルビン即ち書を送り



此の時の事を記して曰く余は何日に太陽を見たるか然れば余は太陽の容を忘れんと争論終るや澤山の書簡あり澤山の答案を作らざる可からず徹夜は屢々なり

デニバーにカルピンの居りし間の出来事は之を調べば數多あれども今や只其中の三ヶを擧げん彼第一争論はビジアスと稱する羅馬教徒なりき彼は豫め選舉につきカルピンを攻撃したりきカルピンは一千五百四十三年に自由意志論を著しビジアスに答ふ書中多く聖書又は古代的師父に訴へたりき殘にオーガスチンは彼れが訴へたる所なりきカルピンは議論強かりければビジアスはカルピンの見解に化す次ぎの争論はカメライトの僧にして羅馬を逃れてデエチバに來りしホルシーてふ者なりきホルシーは其の職は醫師なりき然れども神學を喜て學びカルピンの豫定説を用ひてこれを攻撃し議論最も盛んなりければつひに彼れは禁固せらるつぎに議會を開く二日議論したり議會はカルピンの説に賛成せしかども如何なる點までホルシーの誤謬なるやを解する能はず意見區々たりきつひに異端者としてゼチバを逐はる争論はスイツランド而已にとゞまらずプリレゲル、

メラクソンはカルピンに反對しトヘルザ而已獨立獨歩カルピンを助く第三注目すべき議論はカルピンが醫師セルベタスとの論なり第一回の論争はさきに書せし如く佛國におこれりき今や一千五百五十三年デエチバにおこるこれより前セルベタス佛國ブイナにて異端者の宣告を受たりきされど運つよくのがれてデエチバにきたる此のころを去りてズリツチに向はんとするやカルピンは彼れを捕へて獄に投せしむ蓋し一千五百五十三年セルベタスの著せし書は無暗に三位一體論者を攻撃し萬有神教に陥いるの弊あるをもつてなり即ち公然とセルベタスの審問せられカルピンは原告なりき兩人の議論や中々盛なりき然れども其争の結果は始より明なりき會議はセルベタスを異端者として判決し一千五百五十三年十月二十七日デエチバに近きシチャンベルテウ所にて燒刑を宣告す死刑の前夜カルピンは彼を訪彼れ己の罪を赦さんと乞り余は脚と意見を等する能はずスツツルランドの人々は此の死刑を是となして切りに辯じて曰はくカルピンも之れを善しとせりと而してメラクソンも善とせしと然れども是十六世紀の道徳標準に由る者にして十九世紀の標準に則るものにあらず是れ近代人情に訴さ



る所なり、セルベタスの餘黨は常にカルビンと争ひたりき此の時頃カルビンは聖餐につきルートル派と論じたる其結果や不幸にもルートル派は改革の二派を生じたりき之につきては嚮に論せり、カルビンは此の説を調和するを得ざりき然れども佛國とヂエチバの同盟を作り政治的同盟と稱し、一千五百四十九年の成就し宗教的同盟チグリヌと稱し之れは重にサクラメントの事を論せるものにてスイツス改革者の眼中にサクラメントの意氣を高めたり之は只に記號たるのみならず神は多少之れを用いて恩恵をあたふ而してカルビンの豫定説は遂に彼をして此の恵を或る特別なるものにのみ限らしめたりきカルビンの説はズイングリーより一步を進めたりき則ち彼はキリストの奥儀的現在を信じたり則ちバンと葡萄酒を使用すると同時に彼れは其の恵を興ふと晩年に於てカルビンは神政々治の餘りに進歩してヂエチバの人々が懐かんとするを攻撃したりき彼れの説に曰はく國家の臣民は教會の規律の下にあり之の權を使用するは長老の説教者の團體なりと此に於てカルビンは國の官吏と人民と相容れざるに至り又前者は己の權を失

ふを憂ひ後者は教會が政治に干渉するを怒りきされどカルビンの熱心と忍耐は遂に勝ちて彼の説はヂエチバ而已ならずスコットランド佛國等の近に行はれぬ然れどもカルビンは獨り教會の事而已に關係せず國家の福祉は皆な彼れの注意を引きぬ、

ヂエチバに羅紗や其地のもの、産物を興へたるは彼れの功なりとす、またく後來有名なる人物がヂエチバより出でたるは一に是れ彼れの衛生上の注意に由るもの多し然れども斯る過度の働をなせしため彼れの身體に大なる影響を及ぼし又た二十八年間彼れの體は種々なる病氣、熱疾、風病、肺疾等の病氣にか、れりきルートルの精神はトレントの會議の開かる、に當りて死す、カルビンも會議の閉りに忽然として死去せりき一千五百六十一年正月六日彼は最後の演説をヂエチバの人々になせりき爾來公に禮拜に興らず然れども焦心にはあらざりき此不必要なる勞力を何故にするやと問はれしときに彼は答へたりき汝は主が我を用る事なくして置くのを望むやと齡五十五、一千五百六十四年五月二十七日忠實なるベザノに懷かれて死す、カルビンは中背の男なりき顔色蒼然眼光炯々學者の相ありき、



粗服粗食不眠なり、されど努力に堪ゆ強記雄辯右に出づるなし、神學者として其の名を以て行はる、處の神學を起す、私行嚴然能く怒りて正實なり、彼の一生を黒暗にしたるものは彼がセルベタスの死と關せし事なりとす、彼れが神學の見解は其著基督敎宗敎制度之なり、一千五百三十六年に筆を起し、其の終りに至るまで主義を忘ざりき、本書を分て四つとなす、第一は創造者としての神、第二は救主としての神、第三は人が基督敎徒の恩を受くる方法、第四基督敎生活に連なる外部の儀式を説く、二十七歳にして此を著し能く、彼が當時の偉大なる人物の思想に通せしやをしる可し、原罪、豫撰、撰擇、教會政治、規律、サクラメントの敎義は明かに此の時に出でぬ、彼が神を高め罪の恐しきを説き、思想の必要を説ける、決して疑ふ可からず彼の議論は大に基督敎の進歩を妨げたりき、彼の著なる制度はメラクソンのコンモンプレーステとふ者と比較するは能し、カルピンの幼年のことを記するに足る、カルピンを以て改革者の二期は始めらる、彼はエラズマス、メラクソンに従ひしが、盲従せざりき、デエチバに政治家として大なる技倆を現はし、又一種の敎を立て、外來の人の感動を引起しぬ、

(仁)テオドルベザ(一千五百十九年、一千六百五年)

カルピンの死はスイスの改革者には大なる困難なりき、されど彼の後嗣者出でたり、テラドルのベザと云ふ、彼は佛國ベルガンデーのヴェルセライにて生る、其の門閥よく其父は土地の知事なりき、兩親は熱心なる信者なりき、テオドルは其の叔父のニコラス、デ、ベザの養子となり、子供のときはパリースに行きて彼の處に教育せらる、幼時は能く教育せられ、十歳にしてオルレアンに行き、カルピンの希臘語の先生なるメルキオール、ゾオルマルの生徒となる、ゾオルマルは改革主義に賛成したれば、自分は聖書研究の術を修めたりき、一千五百三十五年、ゾオルマルは獨逸を去る、ベザはオルレアンに法律を研究し、四年の後に稱號を取る、パンを得んために、パリースに行く、此の處にては忽ち萬化し、デゴベンチアと稱する愛歌を作る、彼れは晩年に大に之れを悔たりき時に、病氣にかゝり、生涯を改めんと決心す、デエチバに行き、先に同居したりしクラオデスノフと結婚す、而して改革教會に連らなる、一千五百四十九年九月にベザはラウセンの中學にて希臘語を敎へ、カルピンと友として善し、聖ポロー註解を補助し、彼はメラクソンと共にセルベタスを燒く



とに同意し獨國はスイツルのサクラメント論を排せんとす但し其の勢力に向ては何の得る所なかりき、一千五百五十八年ベザはデイエイチバに至る中學の教師となる此時よりカルピンの保助たりき、ベザは一千五百六十年に詩篇に譯す人々之れを評して佛國改革教會起原となす、チャレンスの前に出で一千五百六十一年パリスの會議の前にてベザは熱心に新教を辨護す然しながら何の結果もなかりき但し是れベザをして佛國改革教會の首領とこそなしたり

カルピン死するやベザは遂に意に適はざれども之の從者となり又彼はカルピンの如き政權はにぎらざりしかどもサクラメント説はガルピン相同意す茲に於てルーテル、ツイングリーと反對す

(保) サキソン派とスキス派との間に生じたる神學上の爭論

我等は今教會歴史に於て暫時宗教改革の首領より生じたる二つの學派に特有なる思想より生じたる教義上の争を少しく研究せんとす、改革新運動の首領が互に同志打をなすこと如何にも盛念なる次第にして而も重要なる點に付て其意見衝突するは改革非難をうくる所以にして又其成功の妨となりたるものなりと

す、千五百六十四年トレントの會議の終に當りローマ教會の教理の基礎は大に固形し教徒の階級は大に定りたれば之を當時の大陸諸國新教の變化定りなく争論百出の有様に較れば大なる相違を見る、サキソン派とスキス派と争の發端にして又最大なる點は聖餐の教理なり、二つの極端なる説を主張して兩方に分れたるものはルーテル派とズウキングリー派なり、カルピン派は此兩派の間にありて中庸をとり稍々論理に適ひたる者なり、是より逐次に諸派學説の概略を説かんとす、

一、ルーテル派の説ルーテルの説によればキリスト信者は聖餐に於て殊に其罪を悉く赦され其救主と靈の交をなし又此サクラメントによりて悉く此等の恩寵の確實なることを信するに至る者なり且キリストは靈を以てなれども實に酒とパンの中に在し玉ふか故に悪人と雖主の榮をうけたる人性に與へざるを得ず固より悪人は是によりて却て悪き結果をうくるに至る、ルーテルの説によれば聖別せられたるパンと酒は人の靈魂とキリストを眞實に結合する所の方法なりとす、彼又明言して曰聖餐に與るとは只々肉體を以て之をうくるも其益なかるべしキリスト其約束を信する信仰のみ其救を生ずる力あるものなり、ルーテルは教義上よ



り之を定義して曰物質は共通變化をなすと此説はロマ教の元質變化の説と異なる所あり即ち之は元素の變化を意味せざればなり聖別の後にもパンはパンなり酒は酒なりされど共通變化により又聖別せられたるパンと酒とによりてキリストの肉と血は實に之を受くるものに與へらる是は煩瑣學説の體質のみ存する説をとりしにあらずキリストの榮を受けたる肉體が在らざる所なしと云ふ教理に基きたるものなりルーテルは英國人十二世紀の人ヲカモ尊宗して我が師なりと云へしが此勇悍なるヲカモの説をとりて主張したるなりヲカモの説によれば物は二様に存在することを得るものなり(一)各一定の場所にあること即二つの石が各其場所にありて互に排するが如し(二)他の物が或場所を占領すること凡そ在ざるなしと云ふべからずヲカモ曰キリストは復活の後戸を閉ぢたる弟子たちの室に現はれ玉ひしを見れば其復活體にはかくの如き力ありしものと思はるとルーテルは此説を採用してパンと酒とにあてたりされば共通變化説は奇跡と云ふべからず是ルーテルが原質變化説に反對する所以なりキリストの體がパンと酒とに

存することは固より然るものにして教職が之を來らせたるにあらずされど之をサクラメントの採用すればキリストの體が之に存すること祝福となり恩寵を與ふるものとなる是キリストの體が之に存するが故に然るにあらずかゝることを信じて之にあづかるものに惠を與ふべしと約束し玉へる神の聖言然るなりヲカモの共通變化説はルーテル説の受けたる所を悉く補ふに足る就中此説はこれは我體なりとある主の聖言を輕忽に説き去るものにあらず是即ルーテルがカルスタットの教につまづきし所以なり

二 ズウキングリーの説

ズキンクリーはロマ教の原質變化を拒み犠牲説をとりざりしがために聖餐中にキリストの實在し玉ふことを全くすて、取らず彼の説によればサクラメントは單に信仰ある者の精神を養ふのみ即ち信仰によりて神の聖言と聖靈を信じキリストの死によりて來る所の慰藉と恩寵に與ふる者なりズウキングリーはパンと酒を以て信者に救の惠を與ふる格別の必要を認めず精神を養ふことはいづくにても出來ることなれば聖餐の折にはかざるまじサクラメントは必しも缺くべか



らざるものにもあらずズキングリーは思らく、サクラメントは只與へらるゝもの、記號なるのみ聖餐式は只教會と名づくる可見的團體が其會員たることを表する外部の禮式なるのみ去ればかゝる神學説はサクラメントの眞面目は會員がキリストの死を一統に紀念して其體の杖としてかゝる信仰あることを形式的に表したるものなりと主張するものなり、ルーテルがかゝる説を見て一驚を喫し極力反對したるは無理ならぬことなりスキスの改革家はルーテルが主張したる大切の眞理を悉く斥けたり、ズウキングリーは純理論者なり、又一方より云へばズキングリーはルーテルの説を了解する能はず必ずや法皇と氣脈を通するならん、まで云へり去れば此二勇將がマルブルグに會見せしとき、ルーテルは猜疑滿腹を以てズキングリーを見ズキングリーは懷疑を以てルーテルを見、互に其心を汲取ると能はざりき、されど討論となりたればズキングリーは快活禮容を備へて反對の器具を脱したりき、されどをだやかなりしは第十五問までなりき、是即聖餐に關するものなりき、ルーテルは白墨をとり卓上に之は我體なりと記せり、ルーテルは常に議論に拙なる方なるが此度も敗北しか、りければ只此聖句にのみ訴たり、ルー

テルもズキングリーも聖餐は實にキリストの肉と血なることな認め又靈を以て之をうくるときは惠をうくる方法なりと云へり、其説の實なる所はキリストの體質が實在するや否との點にありき、此二勇士が遂には同説になるべしと思ひ設けしにルーテルは思の外頑固に其説を主張し、スキス方の兄弟たちに論して曰、我等の信仰に服従せよ、然らざれば眞のキリストチアンと認むる能はずと彼はズキングリーの手をとることを拒みて曰、汝は我と其精神を異にせり、其の意味は多分ズキングリーは純理論者なればキリストによる兄弟なりと認むること能はずと云ふことならん、是は宗教改革にとりて悲むべき日にして殊にルーテルに取りて最も悲むべき日なりき、當日二人のありさまを見れば我等はスキス派の説を多く採らざれども此ときスキングリー方舉動は非常に立派なるものなりき、

三カルピルの説

カルピンが聖餐の爭論場裏に現はるゝ、や是を遙か高尙なる位置に進ましめたり、我等は先きにヘルベチックの告白を掲げてパンと葡萄酒に對するカルピンの意見を示したり、之は單にキリスト教の外部表象にあらず、神の御手にある所の機官



にして神は折々之を以て救を信じて受くるものに施し又之を以て信者は總て主  
 に屬するものなることを證し玉ふなりと、カルピンは一方ならずズキングリーの  
 サクラメント説を非難し、瀆神者の説なりと迄云へり、此頃にはゼチバの改革家の  
 名望赫々たるにより又サクラメントに關する其強硬なる議論甚だ勢力ありけれ  
 ばスキスの教會も追々ズキングリーの説をすて、カルピンの説を賛成するに至  
 り又、カルピンの説によれば主の晩餐は靈の飲食にしてキリストは之によりて自  
 ら生命を與ふるパンなることを證し、我等の靈魂は之により其養を受け神聖幸福  
 なる死に至るなり、斯くキリストの肉と血に與る神聖なる禮典によりキリストは  
 其生命を我等に移し入れ骨と髓迄貫徹せしむ、是キリスト自ら印して證し玉ふ所  
 なり、是無益空虚なる表象にあらず、キリストは其の聖靈の有力なることを證し之  
 によりて其約束を誤謬なく成就し玉ふ者なり、聖餐は奧義によりてキリストは眞  
 實にパンと葡萄酒の中に己を我等に現はし玉ふ、又主の體と血は主が之によりて  
 全き従順を行を我等をして義なるものとならしめ玉ひしものにして聖餐に於て  
 其體と血は現はれをるなり、此サクラメントにキリストの現はれ玉ふことはパン

に纏綿するとか若くば或一種の状態によりて然るものにあらず、總て主の體と血  
 を眞實に與ふるものとして説き示されたることは何に拘らず、信者は宜しくサク  
 ラメントの表象によりて謹み受くべきものなり、是は想像若しくは智力的思辨に  
 よりて受くべきものにあらず、永生を養ふものとして受くべきなり、  
 聖餐争論は此時に至るまで如何にして云ふ廣き意味なりしものか、今や忽ち變  
 じて何物かと云ふ狭き議論になり果てたり、公會は常にキリストの神性と人性と  
 は全く合一して斯く兩性は其特有の氣質を失ふことなしと主張し來りしものな  
 るが、ルーテルは今や神性の方に重を置かんと願へり、此改革家は自ら低ふして人  
 性をとりたる神性には更に深き更に活動的の力あることを實に主張するに至れり  
 と主は神子としては我等のために死し人の子としては高く神の右に擧られ、其體  
 は彼處にありと雖も一場所に限らるゝことなく、何所とも在ます、又是と同時に何  
 所にも在まざるゝなし、一方に於てルーテルの説によれば此何物は即榮を受けた  
 る主の實體にしてサクラメントによりて信する者に與へらるゝものなり、ズキン  
 クリーの説によれば受聖餐者に與へらるゝ、サクラメントは只死にたる主の紀念



なりキリストの心を其人に入れキリストヤンの體がキリストと合一することな  
り去れど智力を以て悟る能はざる者には一切其恵を與へらるゝこと無く又カル  
ピンの説によれば此何物とはキリストが奥義を以て與へらるゝサクラメントの  
内に在し玉へども其榮を受たる人性は其位地より云へば天に在し其力は受聖餐  
者の目に觸るゝ所のパンと酒の中に確に之と同時に在し玉ふものなり、  
以上は宗教改革の三大首領がサクラメントの中にキリストの顯現を論じたる意  
見の概略なり三人共にキリストは眞實にパンと葡萄酒の力によりて信仰する受  
聖餐者に與へらるゝとを説ける點は同説なり只其方法に至りて異なるのみ即  
キリストの與へらるゝことは同説なれどもキリストの顯現の狀態と動力に至り  
ては互に其説を異にしたり是は全く無益の争論にして宗教改革の結果より出た  
り聖書は決して定義を與へず又聖公會が決して定義を與ふることを欲せざりし  
此問題を學説上の争點に於て議論を戦かはしたるものなればなり斯る恐るべき  
問題を喧々として争論することを甚く慨嘆したる者は彼のメラクソンにして  
彼の外に平和を愛する精神のかくも秀でたるものあらざりしが故なり彼には聖

餐の中に主實在に在し玉ふと云へば夫れにて充分なり如何にしてとか何物かとか  
争論思辨することは一切謹で断念したりルーテル派とスキス派と調和せんとして  
メラクソンは一千五百四十年にルーテルの許を受けてアウグスベルグ告白の新  
本を刊行したり此中彼等論じたる聖餐の教義は二大派の説の中庸たることを期し  
たるものなり去るにても此調和策は遂に行はれざりきルーテル派の進んだるも  
のにはあまりに歩を譲り過ぎスキス派には其説に従ふこと充分ならざる所あり  
ルーテルの死ぬる頃に至りてはメラクソンの説大にルーテル派と異なるに至  
れり獨逸の改革論者は遂にメラクソンに反對することゝはなりぬ彼等は其次  
にスキス派を攻撃したり激烈なるルーテル派の論者ジョンウキストホールは一  
千五百五十二年にカルピンとグリンゲルに亂妨攻撃を行ひ始めたりスキス派の  
首領達は當初此人を心に掛けまじと決心したりしがルーテル派が英王メソリの  
迫害を遁れたる落武者を歓迎したりと聞きけるよりスキス派は大に奮激し苦々  
敷文通を取交すに至りたり此時迄はカルピンはルーテル派と實際同心なりと思  
ひ居りたれど今や眞正の調和は全く能はずと断念せりそれより十年間聖餐争論



は益々烈しくなり遂には獨逸、スキス人民全體の中に蔓延するに至れり、ホンガリ、スキードンの如き遠遠の國々にも廣がり行き殊にセルマン王領に於て其絶頂に達したり此領に於ては六十年間に二度ルーテル説を入れ又二度カルビン説に變じたり遂にフンデリツキ三世の時に及びカルビン説の少し風變りなるの流行するに至れり、フレデリツキ王の督勵によりて一千五百五十九年にハイテルベルク公會問答を編纂公布したり是後年に至り殊にカルビン派の誇りとする所なり此公會問答は本來のカルビンの定義よりは寧ろメラクソンの説に傾きたるものなりしが一千五百七十六年にルイ四世即位して悉くカルビン派の傳道者を放逐し國境の外迄も追ひ斥くるに至れり斯て一千五百八十三年カルビン派のフレデリツク四世即位する迄の間迫害止まざりき此王は前王の改革と反對したる政策を用ひたり此時カルビン派は以前に勝りて烈敷各教會の講壇に演説し三十年戦争の爆發に至りて南部セルマンはルーテル派と改革派と互に反目嫉視して彼等兩黨が會てローマ教に對して抱ける嫉妬よりも猶烈しかりしが斯て百年を経過し此等の論法愈相反對して全く相敵視するに至れり此ことはインカルチーシ

ヨンに就て兩説相異なるに起因して益困難を極めたり、ルーテル派は主の一つのヘルツナに神性なる人性合一したることに重きを、きて彼等殊有の思想を以て主の在まき、る所なきを主張したり、カルビン派は二性の相異なる點に一層の重きを、きて殊更にルーテル派の説を探ることを勤め斯て前者はユウテツキスの異端に陥る、後者はサベリヤスの異論に陥りたりと云はれたり、遂にルーテル説はチウペンゲンのアンドルス、ブルンズイツクのケミツ、ロストツクのクリトリオス、三人の委員に付托せられ一千五百七十七年に調和本と名る一書を編纂し是を二部に分ち第一部はルーテル派神學によりてキリスト教信仰の道を示し第二部は此信仰を誇張説明したるものなり此告白に於て吾人はルーテル説が遂に煩瑣學派の基礎によりて發達せしものなるを認めたり是は只に一層密接に關係したる同主意信徒のスキス教會と相反對するのみならず熱狂的アナバプテスト派と相異なること氷炭も只ならずローマ教徒は一層反對する者なりき、

二・フランスに於ける宗教改革

フランスに於ける宗教改革運動先頭はジャック、レフエロル、即ちヤコブ、フアベルな



り此人は一千四百五十年頃エスタブルのピカルドに生れ、スタビレンシスとも呼ばれたる人なりパリに於て高等教育を受けたれど其両親は卑貧なる者にてルーテルがウラルムスの會議に出頭せし頃には既に七十の老翁なりき足跡歐洲全土に普く殊にイタリヤに於てはローマ古典文學を嗜めるを以て新文學の感生に接觸することを免かれざりき、應てパリに返るやガーデナル、レモユンの大學に於て講師たることを依託せられたり、此時に當り彼はアリストートルの一層通俗なる著作を翻譯することに着手したりしが一千五百七七年にパリに近きベテクテン僧院に定住するに至り聖書研究に従事したり、此時始めて出版したるものは詩篇を五ツの國語に翻譯したるものなりき、是は一千五百九年に公にせられしが一千五百十二年には之に續いでパウロの十四書簡出でたり、是はラテン語俗語本より取れるものなり、一千五百二十三年にレフエブルはモーに移され、其朋友ブリコテの副牧師となりぬ、此人は此時既に其教區の監督となり居りしなり、同年新約書の佛語譯出でたり、其序文に彼は大膽にも聖書はクリスチャン唯一の信仰の基礎となることを主張し、人は只信仰によりてのみ義とせらるゝ、ことをも主張したり、ブ

リコテトは只に其朋友副牧師の改革説を承認せしのみならず、百尺竿頭更に進て其の教區内にもパウロの教に従ひて改革を施さんと企てたり、此事業に於てモーの監督はゼテバのウキリヤム、フアレル、ゴジョン、カルピンの助力を求めたり、去れど禍の其身に及ばんとするを見るや、忽ち身を隠して一命の安全を謀れり、斯てフランスの改革は空無に屬したり、フランス一世は實に其國內の改革思想に倦怠せざりしか、ゴパリスに於けるサポイの博士達は一聲に法皇方の説に加擔したりければルーテルがバピロン捕虜前紀事本末を出版したるときに之を彼等に呈して判決を求めしに、彼等之を以て異端邪說神を瀆と云へり、之より二年過ぎてブリコテトの説彼等の前に提出せらるゝや、彼等は頓て蟻の子を未だ生れざる内に退治すべき方法を設けたり、然れどレフエブルト其他改革家等はフランス王と其妹姉、アングリエンの内親王、マルガレットの力ある保護によりて此奇法の害を免れたり、フランスはレフエブルを一千五百二十六年にプロエスの圖書館長に指名したる程なりき、こゝに此改革家は聖書の翻譯事業を進め、一千五百三十年に至りて全部を佛語に譯して出版せり、此翻譯は大に尊重せられたるのみならず、ロ



マ教も新教も皆是を以て佛語改正訂補の基礎として用ふるに至れり、一千五百三  
 十一年にフレエブルは當時劇烈なりし迫害を通れんとてマーガレットの招に應  
 じて辛く之を免れ其宮殿に於て靜に殘年をおくれり其死せるは一千五百三十六  
 年なりき  
 フランシスはゼルマンのチャーレス五世と權を争はんがために新教徒を優待せ  
 んことの望を起したりされど一千五百三十四年にカルビンと其他の改革家を追  
 放ひゼチバに行かじめたる迫害は殆んどフランスに於ける改革を休止せしめた  
 り此亂暴なる十字軍的迫害はプロベンスの平和なるポウドエスに蔓延したり一  
 千五百四十五年に於る此の地の迫害虐殺は當時の舊教徒の殘虐の一例なるに過  
 ぎずフランスに次で即位せしものはヘンリー二世なり此の王は其の父よりも  
 新教徒を虐待せり倍て之は其妻キャゼリン、メデチーの力に由る之は法皇クレ  
 メント七世の姪にて惡むべき人物なり新王は其國に於て舊信仰を離るゝことを  
 一切許さずサルボチーの力をかりて異端と見なされたる者は用捨なく獵出され  
 求刑せられ殺害せられたり去れど純潔なる信仰を求むる程の勇者は迫害のため

に全く滅盡せらるるものにあらずゼルマンに於ける改革家の如く彼等も今は相互  
 救済の方法を設けたり、一千五百五十五年に於てバリの新教徒は正式にカルビン  
 のゼチバ法規を容れ、一千五百五十九年にカルビンの裁可を得て出版せり是は四  
 十ヶ條の信仰告白にして其性質は全くカルビン風なりきされどヘンリー二世の  
 即位と共にフランスに二家の争位者起り共に新運動に目珍しき働を現はせり是  
 即ガイス王家とボルボン王家なりボルボン家は新教改革者に加擔したりしが此  
 王家の内には有名なる人あり即ナベールの王ボルボンのアントニー并に其妻ジ  
 ヤン其の兄弟にしてコンデの王族なるルイ海軍大將デコリニー并に其兄弟ド、ア  
 ンデロー等なりされど全體より云へば其敵王ガイスの一族が優勢なりき是は只  
 に王位に於て勢力ありしのみならず其王の子がスコットランドの女王メリーと  
 結婚しなるにより一層の勢力を得たり此メリー女王は法皇方に淺からざる忠臣  
 なればなり然れどボン黨は新教徒と同心協力たりしを以て稍力を得たり其頃よ  
 り新教徒はヒューゲノーと稱せられたり又或時は狡猾なる皇后キャセレン、メ  
 デチがヒューゲノーに心を傾けたりとの評判ありしが故にコレニーと其黨餘は



之を以てエスナル皇后の如きものなりとの望を有せりきされどキャゼリンはガイス家の勢力に壓倒せられて新教徒と手を切り彼等の苦痛を見て何とも思はぬ程冷淡になれり、ボルボン家はヘンリー二世が之を助くることなかりしならば苦境に陥るべかりしなり、新王チャールス九世は未だ幼時なりければガイス家より入りて攝政につぐことは王家の血統にあらざるを以て不可なるが故にボルボン家は入りて政權を掌握せり之によりて彼等は官爵を擅領し國家の大勢力となるに至れり之に反抗せんがためにガイス家は政教爭論を醸成して十六世紀の終までは止むことなかりき、

此争端の始まる前に二黨調和の計畫ありたり、一千五百六十一年九月の宗教會議に於て二黨首領等異説を調和せんと企てたりしが攝政皇后キャゼリンは之に賛成したりセアドル、ベザはヒューゲノー派の代表者としてスキスより來り會期中時遅く来てピーター、マター、ハツリックより來りてスキス改革黨の主を代表せり聖餐の教義は討論の大燒點なりしが此問題はゼルマンに於けるが如く決するに困難ならざりしかども、法皇の教權と位を論決するは實に困難なりき然れば會

議は遂に何の得る所もなく切迫し敵愾心を氷解すること能はざりき、一千五百六十二年三月パッセイに於て若干のヒューゲノー等神を禮拜しける時其場に於て虐殺せられければフランスの新教徒等擧て之を憤慨しガイスの侯爵を罰せんことを請求せり、此侯爵はヒューゲノー虐殺を命じたるものにあらざれど之を許可したるものなればなり、兩黨戰端を開き一千五百六十二年十二月十九日ドルに於て第一回の戦にヒューゲノー黨やぶれて四方にちり失せたり、されど其後間もなくヒューゲノー黨の熱狂者一人起りてガイス侯爵を暗殺したりければオル、アンの和睦調理し、カルビン等に幾分の宗教的自由を與へたり、一千五百六十三年三月然れど之は只二年間の休戦なりしのみ一時敵愾心を中止せしめたる迄のことにして此二年經過しければ更に一層激烈しき争とはなりぬ亂暴狼藉に至らざる所なく遂には兩派の黨人互に普通の人情さへ全く失ふに至れり、一千五百七十二年八月廿四日セント、パソロミューの事件は此争の頂點なりき、惡虐を極めたる此殺戮は怨重なるヒューゲノー黨を全滅せしめんとの心算なりき、之前八月十八日にナバールのヘンリー王とパロエスのマーガレットの婚禮の祝典をあげたり



此女はチャーレス九世の姉妹にしてキャゼリン、デメテチーの娘なり、此時ヒュー  
 ゲノ一黨の貴族等多數祝典に陪席したりしが其意氣揚々たる風采を見て皇室も  
 人民も嫉妬恐懼の感覺を起せり人心恐々として安からざる折なるにチャーレス  
 は突然熱心に海軍大將コレニーに加擔せり此コレニーはガイス黨の目ざす仇敵  
 なりければキャゼリンは己れの息子二人を使喚してコレニーを暗殺せしめたり、  
 八月廿四日午前三時と云ふに一大慘事起りぬ海軍大將の死體は窓より外に投出  
 され聖ジャーマン會堂の鐘は相圖を鳴し、残酷極まる殺戮始まりぬ、全部至る所、ヒ  
 ユゲノ一の家屋強奪放火の災に遭ひ屋内の人は市街に引出されて殺されたり逃  
 げんとする者は野獸の如く追撃せられ刈出されたり王も亦自ら王宮の窓に立ち  
 て弱き敵を銃殺せり此時パリに於て凡そ五六千の人殺されたりしが勅命により  
 てフランスの地の大都會即オルレアン、ポールチー、トロイ、リオン、ルエン、ツール  
 スの如き所も之と同様なる殺戮を行はしめられたり此事の報知ローマに達する  
 や聖アンジローの大砲を發射し讚美の頌を歌ひ法皇は賞牌を鑄造し其一面は己  
 れの肖像を刻し又他の一面に虐殺の光景を龜末に寫し出せり、ヒューゲノ一黨は

此虐殺によりて剛傑コリニーを失ひしのみならずヨランダのヘンリー親王及ナバ  
 ールのヘンリーも又一時其信仰を棄るによりて僅に免るゝを得たり、  
 一千五百七十四年ヘンリー三世の王位を續ぐやガイス家の勢力益々盛なるを見  
 て大に恐懼せり彼等は當國に於て熱狂的ローマ教の勢力となりたればなり彼等  
 ヘンリー王の調和策を斥けしのみならずスペインのフリップ王と同盟してフラ  
 ンスのみならずオランダの宗教改革説も悉く刈除せんと企たり此に於てヘンリ  
 ー王は止を得ず一千五百八十九年にヒューゲノ一黨と同盟することを求めたり此  
 後間もなくヘンリー王は暗殺せられたりしが法皇の抗議せしにも拘らず王位は  
 新教派なるナバルのヘンリーに與へられたり此ヘンリーはボルボン家を代表せ  
 しものなり此王は己れの職務に従順ならんとの心にや其宗教の信念を犠牲にし  
 て再びローマ教會に加入せり王はヒューゲノ一黨に深き同情をよするを決して  
 止めざりしかど一千五百九十八年四月十三日ナンテの勅令を發して新教と國家  
 と關係を定めたり此勅令によりて新教徒信教の自由を得たりしかどもローマ教  
 徒と同等に立までには至らざりき該勅令は禮拜の自由を許すと云ふよりは寧良



心の自由を許したるものなり即新教徒は其禮拜の場所と條件を一定に制限せられたるなり彼等は西部教會の祝日斷食日を悉く守り牧師に十分一の税を拂ひ婚姻の舊法を守ることを嚴命せられたり然れど彼等は自由に大學校病院に入ることを許され法廷に出訴する時は關係人の中宗派を異にする者ある場合には混合法官を以て之を判決するの制度を立てられたり一千六百八十五年に及びルイ十四世はナンテの勅令を廢したり王謂らくローマ教會の擅制によりてフランスに新教徒の糧盡たりと

三 スコットランドに於ける宗教改革

此國は大陸諸國の改革家とは遙に隔り居れども此大波瀾の中に巻き込まれたるとは他の諸國と同然なり蘇國は數百年間其隣國なる英國の強きを恐れ屢フランスと同盟して其保護を求めたりヘンリー八世の王位に昇るや彼蘇國の者と同盟して兩國の王位を併せんと企てたり是偶蘇國教會の改革と其國の自治を妨ぐる障壁とはなりぬ斯新運動の勢力に觸るゝを避けたるにも拘はらずアラードの教義は既に國內に浸潤して後日の大波瀾を起すべき伏線をはれるもの、如し

(1) バトリック、ハミルトン(一千五百三年—一千五百二十八年)

始めて蘇國にルーテル説の種を蒔たるものは此勇悍なる大殉教者なりき彼は一千五百三年にリンリスゴーに生れ其の門閥は極めて高貴なりき父はハミルトン公にして蘇國王ジェームス四世より特別に爵位を賜り其母はジェームス二世の第二子アルバニー公爵の娘なりバトリックは後年教會のために働くべき運命を有したるか故にや尤も鄭重なる教育を受たり此目的のため彼は一千五百十七年頃にバクの大學に送られ一千五百二十年に同大學より文學士の學位を授與せられたり其後言語學を研究せんとてルバンの大學に入り茲にエラスマスに交を結びペリエラスマスは新文學を保護したる有名な人物にして其の頃ルーバンに其本陣を構へたり此時ハミルトンは既にルーテル派の人と云ふよりは寧ろエラスマス派の人となりをりしもの、如し一千五百二十二年蘇國に歸るや其本國學問の中心たるセント、アンデルルース大學に入らんとしたるは人情の自然なり一千五百二十三年六月九日同大學に入ることを許されたり是と同時にパリに於てハミルトンの教師たりしジョン、メイヨルは同大學中セントメレー大學校の校長に推



撰せられたり、一千五百二十五年十月三日ハミルトンはセント、レヲナルド大學校に於て言語學哲學に熟達せるのみならず、教會音樂にも秀てたるの廉を以て文學士の學位を授けられたり、一千五百二十六年蘇國の大監督ゼームス、ピータン牧養者に假裝してフアエフの山に羊を飼ひ居りけるときチンダルの譯本新約全書を和蘭より蘇國の貿易商によりて輸入せられたり、此譯本は大方セント、アンデレウス大學に持込まれて販付せられたりとの噂なりき、ハミルトンは是を好機會とし己れを尊敬する人々に此聖書を勧め永く忘れられたる眞理を研究せよと云へり、さて此舉動は早くも用心惻りなき、彼の大監督の目に留りたれどピータムはハミルトンの如き大勢力ある門家と爭論するを怖れたり去れどピータムはハミルトン此の人は後にカーデナル位に昇りしものなるが叔父の如き遠慮も用捨もなき人物なりければ遂に其叔父を勧めてハミルトン攻撃を始めしめたり、ピータムは可成手早く此難場を切抜けんとの考なりければ布告を出してハミルトンは異端なりと云へりハミルトン大監督は豫審裁判を開かんとする計畫あることを聞き其朋友の勧めに従ひ大陸に逃げたり、こゝに彼は始めにウエツテンベルグ

に於てルーテルに會見を求めたれど折しも迫害盛なりしかば其意を遂げずマルベルグに行けり、こゝに新に開かれたる大學に於て彼は宗教改革の主義を正々堂々と辯論したり、彼は後年に至り此主義のために其血を流したるものなり、マルベルグに留まること殆んど一年其本國より無理に逃亡せしめられたることを深く憤り其本心の信仰を曲て斯くあらんよりは寧本國に歸りて如何なる危険をも犯さんと決心せり、かくて一千五百廿七年に彼は蘇國に歸り其古郷に於て直に其主義を傳道することを始めたり、今やハミルトンは非常の熱心と勇氣を以て教會の實際腐敗せんことを論破したりしが其論旨はかゝる腐敗は畢竟教會聖職の教が一般に甚だしき誤に陥りしが故なりとて洗禮信仰意志の自由教會刑罰密室告解練獄等の教義に付彼がゼルマンに於て學びたる新説を頻りに輸入したり、彼は又法皇はキリストの敵なりアンタクライストなり聖職は悉く法皇と同一の權を持つものなりと云ふ説を抱きしものなりとも人々に云はれたり

斯る驚くべき新説は教權を妨くるの外なきものなりければ一千五百二十八年新年早々ピータムは改革を要すべき點に付て教會の首席聖職と相談すべきこと云



ふ口實を以てハミルトンを呼寄せたり、ハミルトンは此口實を誠實と思ひ早刻相談に趣きたり、出席の聖職はハミルトンの改革意見を賛成するかと思はる、程調和説を唱ひ、公平の意見を提出したりしが遠がらずして其假面をぬぎすて二月廿八日ハミルトンを捕ひ、其翌日大會堂に於て裁判吟味に取り掛れり、ハミルトンが有罪なりとせられたる信仰ケ條の中又彼が強硬に主張したる真理の中には左の如きものあり人は行によらで信仰によりて義とせらる、こと信仰と望と愛とは互に密接に連關するものにして其一を有するものは他を悉く併有す、其一を缺くものは他を悉く缺く抑善行なるもの善人を造るにあらず、善人なればこそ善行をなすなれ又聖徒に祈を捧げ聖母を禮拜するは正しからず、萬民神の道を讀殊にイエス、キリストの聖旨及テスタメントを讀むは尤合宜のことたるなり實に福音の救濟的教義たる以上の諸真理はハミルトン有罪の宣告の種子となれり、二月廿九日彼は俗吏の手に渡され、三月一日を以て畑の中に投せられ、又此拷問の間ハミルトンは其信仰を堅くとりて動かさざりき、實に如此一心不亂に其信仰を守りしことはスコットランドに於ける宗教改革を早めたること彼の生活説教の右に出てた

る者なし然り於是乎一種の格言起れり曰バトリック、ハミルトンの煙や其之に觸る、者を悉く感化したりと

(2) ジョン、ノックス(一千五百五十五年—一千五百七十二年)

ハミルトン殉教後七年(一千五百三十五年六月)スコットランドの國會は一の嚴令を下して大異端者ルーテルの意見を把持且宣傳するものを嚴罰に處すべき旨を傳へたり、併しながら之れ改革の意見を止むるの功を奏せざりき蓋獨逸神學は益盛に忠實なる教職モンク、巡回僧其他平の信徒の信する處となりたればなり、然し是等の改革者スコットランドに於て益危険に陥りしかば、ヘンリー八世は己れの隣國に於て、一の隠れ所を彼等に與へぬ、其改革者の重なるもの、中にアレキサンデル、スキートンなるものあり、サホック侯の孫たり、又アレキサンデル、アレスなるものあり、聖アンデレーの「カノン」にして後にライプチツヒの神學教授たり、ヘンリーの此厚情や將に英及蘇の二國合併の企をなされたり、併しながら不幸にしてヘンリーの條件呈出の語氣穩かならざりしたため蘇の黨派は彼を離れたり、於是かピートン即スコットランドのウルセイを頭として一切の異教異端を撲滅に従事し



たり、將に此迫害に當りて、ハミルトンの後嗣者舞臺に現はれぬ、彼は實に蘇國眞個の改革者なりき、ジョン、ノックスは一千五百五年を以てスコットランドのランナック郡に於けるハデングトンに於て生れ、又彼は門閥家の子なりき、但其生る、時は彼が家族は名もなき状態に居りぬ、ハデングトンの有名なる小學校に於て普通教育大要を學べり、ハデングトンを去り一千五百二十二年クラスゴー大學に移りぬ、但し業を卒らすして茲を去れり、學問の點より云へばノックスはルーテルに似たる所あり、兩人とも中年にしてギリシヤ、ヘブライ語を學び、又二人とも普通のラテン學者に過ぎざりき、一千五百三十年ノックスは按手を受けて長老となり、ハデングトンに近き教會に働くこと十年なりき、但彼が是らの年代は想像的にして、彼が生に關する年代の確に知れたるは其ローマ的信仰を棄たる後、即一千五百四十五年にあり、ローマ教を去る時に彼は四十年なりき、ピサの云ふ所によればノックスがプロテスタント信者となりしはオウカستن及ジェロムの著述を讀みし結果なりと然しながら其直接の原因は博學敬虔なるジョーオルジ、ウキツシヤハトの

感化なり、此人は永く流謫せられて居りしが、一千五百四十四年蘇國に歸り、ピートの迫害に於ける最後の有名なる犠牲となりしものなり、ノックスがウキツシャルトの人物教義を主張するや、實に成年の熱心を以てしたり、傳て云ふノックスはウキツシャルトを至る處に伴はざるは、なく、自ら彼の護衛と稱し、兩刃の刀を携ひウキツシャルトの生命保護したり、實にウキツシャルトの捕る、晩ノックスも亦彼と共に運命を同ふせんと渴望して止まざりき、然れどもウキツシャルトの勸告は辛ふじて之を止めたり、其勸告は後格言となれり、曰、否汝の徒弟の許に歸れ、犠牲は獨りにして足れりと

一千五百四十七年ノックスはセント、アンデレニスに於けるプロテスタントの聖職となり、こゝに城内に住居したりき、ピートの死後、金城鐵壁は幾多のプロテスタントの避家となりぬ、併しながら、一千五百四十七年七月、スコットランドよりフランスのローマ教徒は其力を合せて之を奪へり、捕虜の生命は之を許さんとの約束ありき、否、或者はフランスに送らんと約束ありしなり、去れどか、る約束は遂に破られ、捕虜は戦時の捕虜の如き待遇を受け、ノックス及其徒弟は鎖を以て繋



がれ奴隷の勞力に従事せしめられたり、十九ヶ月間ノックスは此苦しき境遇にありしために健康を害したり、一千五百四十九年のはじめに當り赦獄せられぬ世間の傳ふる所によれば、英王エドワード六世の力によると云ふ、於此ノックスはロンドンに來りアーチビシヨブ、克蘭マー其他の教職より歓迎を受けたり、一千五百四十九年より一千五百五十三年に至る間ノックスは英公會に於て働きしが一千五百五十三年マリアン迫害の後間もなくエドワード王薨去せしかばノックス英國を去りて大陸に向ふ茲に彼はフランス及スキツランドの改革教會を訪つれ其餘暇を神學上の著述に盡したり、一千五百五十四年召されてフランス、ホルドオンゼメンの英公會の牧師たらんとす然れど彼がキリスト教禮拜に關する改進主義に付て異論起りたるため、ノックスは職を辭してゼチバに歸りぬ、一千五百五十四年スコツトランドに歸り、イデンバラ及其他の處にて説教し攝政女皇に書を奉り改革教徒に保護を與へんことを願へり併しながら彼が此度スコツトランドを訪れし尤も大切なる目的はマーシヨン、ホーエス嬢の手を引きて聖壇に立たんがためなり彼はパーウキクにありし間此婦人を知れりと云ふ然れども當時國亂

れたれば婚姻は延期せられたり、ノックスは婚姻後直にゼチバに歸り該市に於ける英及イタリーの人の會衆を牧し、一千五百五十九年スコツトランドに向て出立するまでに及べり、此時代の間ノックスは一技の筆を以て忙しかりき其著述の一を題して奇怪なる婦人政治に對する喇叭の一連と云ふ之れは婦人政治を攻撃したるものにして當時彼が尤も能く和睦すべくありし處の二女皇を怒らしめたり曰くスコツトランドの攝政女皇及英王イリサベス是なり其結果たるやノックスがスコツトランドに歸るに當りイリサベスの支配地を通過するを免されんことを願ひしかども是れさへも堅く拒まれたり於是ノックスは蘇國に向ひライスに安着し一千五百五十九年五月二日エジンバアラーにありき、  
 前述の如くノックスの一生はスコツトランドの改革と連りて離つべからず、其スコツトランドの地を踏むや否やローマ公會は彼等を反逆人として宣告したりノックスは當時タンデーに集りしプロテスタントの首領等に組して此宣告に對立したり、是より後ノックスはベルスに至れりこゝにて彼れの説教は一争亂を引起しぬ遂には聖壇を倒し聖像其他教會の飾りを破壊し黒衣の僧侶の家は悉く破壊



されたり、次に此大膽なる改革者はセント、アンドルユースに至りアーチビショップ  
 及其友の忠告あるにも係らず彼は此大會堂にて説教せんと決心したり、ノックス  
 は四日の連日説教をなし甚だしく成功ありき、此市民はノックスの説を助け改革  
 的教會を起さんとしたり、於是乎聖卓聖像及教會の裝飾物は悉く取去られ寺院は  
 灰と化しぬ、一千五百五十九年六月の末に當りノックス再びエデンバラに於け  
 るセントシャイルスの聖職となれり、  
 此争亂に引續き攝政女皇の軍勢は都を襲ふて之を奪へり、於是ノックス暫くエデ  
 ンバラを去りスコットランドの各地方を徘徊し至る處に其改革意見を吐露し他  
 のプロテスタントを奨励したり、攝政女皇の改革運動抑壓の計畫は只益焔に薪を  
 加はふるのみなりき、ノックス及其黨派の主義によれば政治にして若し攝政ある  
 加或は政府の保護する宗教が自己の確信と相反する所あらんか人民は斷然と政  
 府の命に反抗するを得べし此説を立て、ノックスは千差萬別なる種異の人物を  
 調和したり或物は當時の腐敗に厭惡し或物は心靈上の復活を起さんとし或者は  
 政治的に政府に反抗し又或者はフランスを深く恐れたり但しスコットの女皇メリ

一の夫なるフランシス二世は婚姻によりてスコットランドの主位を得たればな  
 り、如此千態萬狀なる不平の輩を利用し一千五百五十九年八月に於てノックスは  
 ゼチバに於ける兄弟に向ひスコットランドに於ける改革の頗る有望なることを  
 書き送り而して翌年の春に於て會衆の主たちは英國と一の條約を結べり、其條  
 約に由れば英艦隊はライスを防ぎフランスより來れるメリーの援兵に反對せん  
 とす、此如内亂の焔は天下各所に起らんとす時にガイスのメリーは一千五百六十  
 年六月十日エデンバラに於て死去したり

將に此時の頃なりきノックスは宗教改革史を著はさんとし後五六年を経て之を  
 完成したり、其言語は龐雜なるものなりき精神に於ても餘り過激なりき、然ながら  
 活力を以て充滿す、全卷著者の威大なる人物は躍如たり、今やノックス五十五歳に  
 して身體精神共に壯成の時代なりき、エデンバラに於て教會の事業に當る間其始  
 めの妻二十八歳なるマジョク、ホーイス死し三年を経てノックスはオキルツク  
 侯の令女マーガレット、スチユアルトを娶りて聊慰撫する所ありたりき、兩人の地  
 位門閥の甚しく異なる、かために此婚姻は喧すしく世間に傳へられしが必竟す



るに甚だ幸のものにてありたるならん、  
 カイスのメリー死せしかばスコットランドに於ける黨派將に和睦せんとするの  
 兆候の現はせり、此年我等は再エジンバラに於てノックスを見る革命改革の進歩  
 や實に急速にして、同年の八月十七日に於ては、スコットランド國のプロテスタン  
 との信仰ケ條なるもの國會議場に呈出せられ、數日を経て何の異論もなく、可決せ  
 られぬ於此國會は法皇的の主義を廢し、改革者の禮拜を打立てんとす併して僧侶  
 の收入をば轉して牧師の供給人民の教育貧者の保護するにありき、一千五百六十  
 年十二月スコットランドの總會は公禮拜及び教會政治なる標準的書物を可決し  
 元老院の多數又之を賛助したり、勿論ノックスは此政體を造るに當りて有力なり  
 しものなり、  
 スコットの女皇メリーは年若き美なる嫺婦なりしがフランスに流調せらるゝ、十  
 三年間此時始めて召されて再び王冠を頂く、一千五百六十一年八月を以てスコッ  
 トランドに達したり、  
 彼の女の第一勅令はノックスを宮中に召して教のことがらに付商議せんとする

にありき、此時に當りてノックスは僥暴なる言行を以て女皇に對せしこの攻撃は  
 充分なる證據あらず、併しながら兎に角磨きあげたるフランス風の教育を受たる  
 女皇と粗暴なるノックスの間には天地の差異ありしことは疑を入ず、此商議の結  
 果は改革黨より何の讓歩を得る所なかりし女皇甚だ之を遺憾とせり、於是女皇は  
 涙も諍言もノックスをして服従せしむべき力なきを發見し、樞密院に迫りてノッ  
 クスを賣國罪を以て訴へたり、蓋し其理由とする所はノックスが曾てチャペル、ロ  
 イヤルに於ける暴民の巨魁二人の宣告を批評したりと云ふにあり、一千五百六十  
 二年十二月ノックスの審判開かる、女皇自ら出席して攻撃者の地位に立てり、然る  
 に在朝の貴族の多數はノックスを罪なきものとなし、或者の如きは彼が行を以て  
 正當防禦となすに至れり、第二回にノックスは樞密院に召されて彼が曾てメリー  
 及びダーナレ公の婚姻後一ヶ月セントキルスに於てなせる説教の説明を求め  
 られたり、此結婚は一千五百六十五年七月に執行せられ、説教の日に於て此若き王  
 は兼て備られたる立派なる王位に著座したり、然るに其説教が己に關することに  
 てありければダーナレは此説教者を罰する迄は食を手に觸れずとの決心を以



て宮中に歸れり於是ノツクスは其云ふ所によれば寢床の内より呼ばれて樞密院に出ぬ彼等はノツクスに告て曰汝は王を怒らしたれば陛下にエデンバラに止まる間は説教をすることを許さずと、ノツクス答て曰我は以賽亞書十六の十三より聖句を取りて説教したるのみ若し教會が我言語を制裁せんとならば予は神の言を免さん限り之に従はんとは是彼は自己の護のために其説教を書き記し之を公にせり樞密院が彼に下せし禁制は左のみ重大なる性質の物にあらざりしならん但ノツクスは一千五百六十七年に於て女皇メレーが其職を禡る、迄はエデンバラに於て再び聖職の權を行はざりし

女皇メレーのスコツランドを治むるや此度は實に不幸なる悲劇を演じたり數年前に結婚したる其夫ダーナレー公は殺戮せられ女皇自ら此罪に關係せりと傳ふ又云ふ女皇は其叔父なる佛王と同盟しスコツトランドに於ける新教徒の亡滅を見て快となし彼等を一千五百七十六年ロチレピン城内に閉塞したり然れども遂に彼の女は其嬰兒のために位を譲らざるを得ざりきプロテスタンとの事業や失敗したり中世紀の組織を墨守したる最後の望も此不運なる女皇メレーが一千五百

八十七年二月八日英の斷頭臺に於て最後の苦を受けしと共に全く去りぬ

一千五百六十七年七月廿九日嬰兒ゼームス六世はスターリングの教會に於てスコツトランドの王となれり時の説教者はノツクスなりき王の幼稚なる間攝政の職を取りしものはノツクス大に信用したるムレー公爵なりき、一千五百六十九年正月ムレー公爵殺害せらるノツクスは深く之を憂ひたり彼が精神及肉體は已に疲勞してありければノツクスは卒中病の打撃を蒙りて全く恢復する能はざりき時に説教することを得たれども只日曜日の午前に限るのみ或政治上の危険のためノツクスはエデンバラを去りてセントアンドリュースに行き其餘命十五ヶ月をこゝに費せり彼處にて其の論争的著述を現はす彼の最後の筆になりし一小冊子は一千五百七十二年に出版せられたり、

一千五百七十二年七月女皇エデンバラをしりぞくに當りノツクスふたゞ彼處に歸るこゝにては其肉體の衰弱せるにも拘らず數回公衆の前に現れてセントポールミールの殺戮に對し佛王に報いんと絶叫したり、一千五百七十二年十一月廿四日(月曜日)ジョン、ノツクスは此世を辭し去れり時に六十七歳なりき水曜日(日)



トガイルスの墓に葬むる其棺を地中に下さんとするやメルトン公爵呼で曰一生の間人の顔を畏れたることなき人物なり彼は刀劔を以て屢切かされしかども其一生を安寧幸福の中に送り彼と同時代の友人なるジョン、カルピンの如く今日ジョン、ノックスの墓碑なるもの見えす其葬りし場所さいも疑の中に存す、改革スコットランド教會の教義上の標準は重にジョン、カルピンの教に法されり彼等の信仰告白によれば此新運動の中古の教會に於けるは猶ヒブライ人がカナンの住民に對すか如しと、ノックス及彼の徒黨は自らイエス、キリストの會衆と稱し、ローマ公會の教職には非ず、キリストの敵なりと於此彼等は一切の過去のを棄て直に進で西部公會の儀式を棄てたり、且又監督政治さへも棄て、去らんとせり乍併監督政治を棄つることは急には行はれざりき蓋しノックスは其始に於てはカルピン平等主義一切聖職も平の信徒教會の事柄に置ては同一の權利を有すとの主義を抱かざりければなり乍併爾來三十年の間一千五百九十二年に於てスコットランドに於ける監督政治は全く亡滅しスコットランドの議會はアンドリユー、メルヒールなるもの、感化によりて長老教會政治を採用したり

然ればこれらの教義上の標準を考へ且又スコットランドに於ける改革者の狂暴なるを思考せば實にキリスト教の根本的教義が幾分なりとも保存せられたるは驚くべきことなり乍併ノックスも當時普通の精神と異なる能はざりき去れど彼を評するには二ヶ方面よりせざるべからず彼は或時自己の説と異なるものは之を打撃して顧みざりしが又竊に忠實に聖書の奧義及問題を研究し其神聖なる教を後世に遺さんと務めたり然れば第一のスコットランド信仰告白なるものは三位一體、インカルテーション、贖罪及聖靈の神たることに付ては教會の傳說的言語を確く守れり原罪豫定擇善行論及び其他の問題に付ては此告白は寧ろカルピン教に法とりて英公會の大綱の定義とは異なれり前に論じたるが如くノックスも會て一度は三十九ヶ條の大綱に記名調印せるを得たり、ノックスの一生の歴史を讀で彼を想像するよりは當時の知事の言は彼が性質を穿ち得て妙なり曰凡て主権者には反對すべからず王及他の有司は宗教改革を依託せられたりか、る君主に對し保護を與へざるものは同時に己も亦神よりの保護を失へるものと知るべし且此告白は其サクラメントの教義に關して高尚なる思想を抱けるを以て



著し曰サクラメントには二つあり洗禮と主の晚餐是なり此二者はキリスト教會の首と手足を連結するに力あるものなれば之を以て只の記しとなすは誤まてりと洗禮によりて我等キリストエスに繋がれキリストの正義を受け我等の罪は之により赦はれ且赦され而して正しく用ゆれば主の晚餐に於てキリスト、イエス又我等と合し我靈魂を養ふ糧となるなり、

(4) チザランドに於ける宗教改革

吾人が今や論せんとする此國は現今のベルギー及オランダと稱する地方と同一なり是はチャレーヌ五世が未だチャレーヌ第二世と稱せられし時に與へられしものにして彼の將來の領地として尤も大切のものなりきチャレーヌ、スベエンの王位に昇り獨逸の皇帝となるや彼は其伯母なるホホエのマーガレットにチザラントの統治權を與へ彼女を保護するため樞密院を立てたり始めよりプロテスタント主義は此等の地方に於て都合極めて好き地位を發見せり、始めプロテスタント派は此等地方に健全なるを發見したり住民は眞面目にして職を勵み自由を愛す、普通教育は盛に行はれ漁夫の徒すら讀書は勿論聖書の解釋

を論す且又是等の國々は英佛獨に行き斬新なる意見を誘導するに與りて力ありき於是は歴史家なるストラツダ記して云ふ獨逸より來るライン河も佛より來れるミューン河もルーテル及カルピンの意見がこれらの地方に廣まりし速力と比肩すべくもあらず然しながら時の進むに至りて此地方に於てはカルピン主義寧ろルーテル主義を壓服せり、

吾人が前述せる如く十五世に於て一種の神祕的學派起れることありタウレル、ウキツセル、タウマス、エ、ケンヒスの如きは是が代表者にしてザーミント地方に眞箇なる敬虔の精神を復興したり稍や降りてスベエン人が彼の異端排撃の組織によりて新教徒を攻撃したりしが於是彼等はローマ教を蛇蝎視したり、エラスマスの如きはロワルダムに生れたるものにして一千五百年の頃教職の無智亂行を暴露するや否や彼の著述はポーランドに於て廣く讀れたり然り改革主義は一千五百年二十一年の頃已に既にチザラントに於て行はれたり、チャレーヌ五世がルーテルを排撃するや、チザラントに於ける人民を此ウイテンベルグの僧の中間に加へたり、アドリアン六世は自ら改革的の法皇と稱せしがウツトレヒトに生れ改革



の主義に付てはエラスマスと同意見なりと云ひ觸らせしかども一度法皇の位に就くや此言を忘れルーテル主義の烈しき攻撃者となれり、

チャーレスはアトリアンが發したるオランダ人民に對する訓令を實行し其一代に於て五萬人を殺せしと云ふ、一千五百三十年サボエのマーガレット死するやチャーレスは稍や温和にチサーランドを待偶し損害に報ひ其改革主義に賛成したり其死せる莫大なる數の内にはホルラント及其地方に集り來れる迷信家なるアナ、パフテスト主義の人々を含めり、彼等の暴行は却て帝王の處置をして正しきものと考へしむるに至れり、

マーカレット死するやチャーレスは其姉妹なるホンカリー女王マリヤを以てチサーランドの攝政となす、十年の間國は亂れたり遂に一千五百四十年に於て皇帝は彼を戴けるオレンジ、ナソの一家族をあげてチサーランドを宰司せしめたり此一家や獨りポーランドに榮光を興へたるのみならず歐洲に於ける自由の保護者となれるものなり、一千五百四十四年佛國に於ける戦争に於て死す、彼れの從兄弟なるウキルリヤム位に即くチャーレスが獨逸の新教主義の諸皇と戦ひを開くや

チサーラントはチャーレスに與ふるに人夫と金錢を以てしたり、

一千五百四十五年より同四十六年チサーラント人民は此忠實なる行によりてチャーレスが其國に止まれる外兵撤去を許さんことを求めたり、併しなからチャーレスは當時他の方面に目的を抱けり、一千五百四十九年彼は諸州に巡行し其子ビリビを携ひて將來の君主として之を紹介したり、ビリビは克く彼等古風を墨守せんことを誓へり、一千五百五十五年ビリビ二世チサーラントを統治す、彼は古今未曾有の擅政君主なり、彼が信仰ケ條の重なるものは政治宗教の擅政てうことなり、き彼は自家の野心に關係せん事柄を除く外はすべてローマ教會の利益を計れり、チサーラントに於ては彼の父が愛せられたる如く彼は憎まれたり、チャーレスは彼等の古代の特權を攻撃せさりしが、ビリビは會てスベエンの自由を服せしと同一なる專制主義をチサーラントに行はんとしたり、此頑迷なる方針結果はチサーラント人をして同盟を造り歐洲の北に於て新なるプロテスタント宗を建設せられたり、ビリビチサーラントを去りてスベエンの王位に即くや、彼は異母姉妹なるバーコのマーカレットをしてネチサーラントの攝政たらしめたり、此時に彼は愚



かにも彼の父チャレスの爲に運動したりしチサーランドの貴族數人を無視して  
 顧みざりき其重なる中にはエクモント伯爵及オレンジのウキリヤムもありき此  
 輕蔑に加てチサーランドには四千のスペエンの強兵集りて人民の獨立を壓服し  
 宗教上の迫害を助けんとす當時實權を握りし者カードナル、グランベラと稱する  
 アラス人なりき改革の迫害は彼が手に於て始められたり實に此舉たるチサーラ  
 ンドに於ける監督區を變更することなりき從來チサーランドに於ける宗教上の  
 事柄は四人の監督の手にありて是等の監督はコロオン及ライムスの大監督に従  
 服すべかりき然るに今や獨佛を離れて別に監督區を立て十五の監督及三人の大  
 監督を招きクランベラを其首とせんす斯く監督は彼の保護者として九人の新  
 しき長老をあげ其内より二人の探索者を撰みて一切の異端を刈り出だす義務を  
 負はせたり之を要するにチサーランドに於ても異端探問の制は設けられたり然  
 して其制度や前に有名なりしスペエンの探問制度に法れり我意味に於て云へば  
 かく監督區を建てたることは從來監督の少なかりしチサーランドに取りては都  
 合よきことなりしかども其趣意を穿つに至りてはチサーランド人と雖容易に之

に向ふて目を閉る能はざりし蓋し是彼等の多くの自由及風俗を壓服せんとする  
 に外ならざればなり上は貴族より下は農夫に至るまで新組織に反抗シクランベ  
 ラを憎むこと甚しく遂に彼れは職を止めてパーカンデーに退かざるを得ざりき  
 一千五百六十三年暫くの間黨派の絶叫は止たればチサーランドも平和を呼吸す  
 るを得たりき然るに一千五百六十五年に及びてトレントの會議は議決を發して  
 之が實行を催したりローマ教の盛なる所には容易く之を實行し得たりピリビも  
 己が領地に之を實行せしめんと試みたり然るにポーランドの貴族は集り起りて  
 之に反對すべしロウド伯爵を主領として彼等は一千五百六十六年に調和と稱す  
 る條約を結び探問制度反對論に誓約す貴族の内是れに關せざるもの三人あり、  
 オレンジのウキリヤム、エクモント及ホロン是なりウキリヤムの兄弟なるナソの  
 ルイは此同盟に加はりし今や輿論は起れり説教は至る所に開かれたり人民の怒  
 は教會及寺院の破壊に於て現はれ又是先に佛蘇に於て行はれたるものなり此破  
 壞主義たるや新教の聖職及オレンジのウキリヤム其他自由の唱導者もこれに反  
 對したり蓋しこれ從來改革者に賛成したる熱心なるローマ徒を失ふの恐ありた



ればなり此舉たるビリビに與ふるに安寧を保護せんとの口實を以てし獨の雇兵は此國に入り來りて犯罪者を罰せり、一千五百六十七年カルビン主義の暴民はバレンシヤニスの圍を解かんと運動してエクモント及他の忠實なる貴族のために破られたり、  
 今や一揆は全く壓服せられマーカリートはビリビに手紙を贈りスベエンの兵隊を遣すことをやめ温和なる處置を取べきときに至れりと述べたり併しながら正統派に屬する猛惡なるビリビは異端を其各州より追はんとして止まず此目的を以てアルバ公爵を遣せり與ふるに一萬の兵士と生死與奪の權を以てしたるアルバは殘忍酷薄なる人にして彼より平和を望むべくもあらず幾千の住民は英獨に逃れぬ貴族の同盟は破られ人民の運動は妨げられたりアルバは血の裁判なるものを設立し直にエクモント及ホルンを逮捕したり彼等は一千五百六十八年に死せりオレンジのウキリヤムはプロテスタントに賛成したりとの所以を以て放逐せられぬアルバ總督に任命せられマーカレット權力を失ひ終にチサーランドを去らざるべからざるに至れり、

チサーランドの民の最後の望は於是か埋没したるアルバ諸國を巡回するや凱旋の勝利者の態度をとり至る所火と劔と拷問の跡を遣せりオレンジのウキリヤム及其兄弟メリールイは大に反抗したれども遂に功なかりき是於チサーランドの勢力を海軍に集たり是よりして戦争に於ける彼等の運命は變化を來し又海運に於てはオランダ人は遙にスベエンの右に於てアルバの進行を妨しのみならず彼等の町の或者を恢復したりニュージールランド、フリースランド及ポーランドの各州はスベエンの王に反きてオレンジのウキリヤムを擧て頭となし約するに人夫と金錢を與へんことを以てせり併しながらアルバ及彼が配下の老将の才能はチサーランド人に取ては餘りに強かりき於是再び國は殘忍なるスベエン人のために暴さるゝととなりぬ遂に一揆はアルバの群中に起りウキリヤムの大膽すら成功し能ざりし事業を遂たり一千五百七十三年に於てアルバはビリビの召喚する所となり各國暫くの間息盡く折を發見したりアルバはチサーランドに止まる六年火と刀劔と迫害を以て民をせめ其最も立派なる町すらも之を破壊し一萬八千の住民は彼が猛惡の犠牲となれり此所に於て死したる不幸なる人々の數や枚舉に



進めらす當時アルバは歐巴に於ける第一の大將と稱せられたり然れども彼の殘忍なるオランダ人の内に益々頑固なる抵抗を起し彼が天才も是を壓する能はざりき、

アルバに續きて大將となりしものをレキシエンのドン、ルイとなす彼れが改略や極めて温和主義にして實はアルバの猛惡なることよりはオランダ人の自由によりては一層危険なりき彼れは重に南部に於て成功したりしが一千五百六十六年熱病のために倒れたれば再び各國に平和を與へたり彼れの死するや其の兵士の反逆ありたればヲランダ及ブラタアンの南部諸國は北部の諸國と同盟してケントの平和條約なるものを結べりドン、ルイの後繼者なるドン、ジョンは此條約を採用したり併しながらオレンジトのウキリヤムは此如何かはしき條件を以て満足せず其結果たるや戰爭破裂なりき又モスエン人の勝利に歸せり但し一千五百七十九年七月に七ヶの北部諸國はウツレヒト同盟なるものを造れり彼のオランダ共和政治なるものは此時其萌芽を發したるものなり翌年ビリビはウキルリヤムを放逐し金をかけて彼が首を求めたり彼れ殺されんとするや六回終に或迷信

家のために一千五百八十四年七月十八日を以て殺されたり併しなからウキリヤムの事業はなされたり南部の諸國はウツレヒト同盟の後にはパーマーのアレキサンダーの條件を採用しプロテスタントの人々は二年間に國を去るか若くはローマ教徒となるべきか其一を撰まざるべからずと主張したれどもウキルリヤムの北部に於て立たる共和政治は益盛大に趣けりビリビ三世の下にありてスベエンは止を得ず此共和國と平和の條約を結へり遂にウキストハリヤの平和條約に於て二千六百四十八年其が獨立を認めざるの止むを得ざるに至れり、

チサーランドの改革神學に付てはもと是れウイテンベルグの學派と相和したり併しながら南部の諸國に於てはルーテルの思想はカルピンの思想に其場所を譲りぬ是チサラントに於ては敢て怪むに足らざるなり何となれば後のオランダの首領等はフランス國のヒューケノー徒黨人の感化を蒙ること多かりたればなりカルピンの神學はヲランダ人の倫理的に實行せんと試みたる所なり彼等は猶維持したりし異端は罰せられざるべからずと然れども幸にもビリビの如き無情なる舉動には陥らざりきオレンジ國及彼の後繼者は宗教の點に於ては一切の人々



に自由を興ふべしと主張したり彼の暴なるアナ、パフテスト等にも自由を興ふべしと然しながら教會と政治との關係は當時改革者の内に於て分離を生せしめたる一問題なりき或者はゼネバの思想を主張し教會は國家と離れたるものなり又或者はフレンジのウキルリヤムの如く政治上の首権者は牧師を任命し教會統治の權を有すと主張したり此爭論の結果や教會は各宗の組織に法とり各宗を分け若干の階級となし各會衆は長老によりて統治せられたり。

### 第十章

#### 宗教改革に於ける異端分派

宗教改革と云ふが如き一大事件の結果として改革者にも亦ローマ教會にも共に攻撃せらる若干のものは起れり即教會を去りて獨立なる旗幟を立てんとせし黨派は異端分派の罪を犯せるものなり大陸の改革者は其新主義の大切なる教義に就て常に争つ、ありしか且つ又主義なき分派のために改革の運動を妨げらる、こと多かりき是等の懷疑の種子は已に既に十四世紀の頃まかれたりオカムのウキルリヤム侯は心大膽なる改革を始めんとせしことさへありき當時中世紀にありては人心怪疑の中に葬られたれば是等怪疑派は己れに利益ある土地を發見したるものとす次の世期中頃に至り文學復興なるものは南部歐洲の學者間に起り同じ方向に向て強き刺激を興へたり此知力的懷疑の結果は自由思想家を生し又彼等は法王の壓力減するや歐洲の町に於て其意見を發表し始めたり是等は中世



紀懷疑者にして其根本的教義とする所は人民理性思想の完全なることを説きキリスト教徒は各宗教上の事柄を個人的に定むるの權威あることを説き新教式文其他公會の儀式否聖書を顧みるに足らざるものとなせり蓋し聖書の中には個人の精神に傳はれるインスピレーションと異なるものを含めばなり。其始かゝる粗暴なる思辨工夫は屢宗教改革者の賛成する所となれり彼等は能く自己の目的を達し得る丈の點に於ては改革者に同意を表せり併ながら改革者か客觀的默示を信し彼等目的は舊き教會を清むるにありて新たなものを立つるにあらず且彼等は權力の掠奪せんとするものにあらずして法王及教會は教會の首たるキリストに従がふべきものなりと主張するに止まれるを見しときは是等の自由思想宗は忽然として改革者の宿敵となれり於是改革の首領等は直に彼等を罪に定めたり蓋し改革者は教義の點に於て如何に彼等と異なるも是等自由思想家はサタンの特別なる器械にして彼等の始めたる事業を妨ぐるものなりと思惟したればなり。此等革新的精神なる者は大概はアンテ、バプテストの總稱の内に含められたり一

千五百四十六年に至り此名稱の中に七ツの相異なる宗派ありし程なれば當時此名稱の範圍は非常になりたるを知るべし此名稱を命けられたる理由は彼等が嬰兒洗禮の効力あることを烈しく非認し又從て嬰兒の時洗禮を受けて教會に入りたるものには一切再び洗禮を授けたるにあり然れども歴史上より見れば此派の此現象は外の現象に比して左程著しからざるものにして又最も害少なきものなり會て論したる如く一千五百二十一年ルーテルカハルトベルグの城に隠れ居りけるときズウィツクの名もなき仕立屋ニコラス、トルブなるもの神の國は遠からずして地上に立てらるべしとの信仰に激まされて一切の人間の法律政治の束縛に服従するに及ぼす直接に聖書より知識を得るが如き宗教的初步の境遇を脱却して超然高く擧がる、の日近かきになり三ツの僞説を以つてハフテストは其の運動を始めたなり即ち(一)彼の幼雅の内に見たる千年の國を實際に來らしめんがため現在の制度を覆すこと此國には神は己のため清き會衆を擇び出し玉はるとの説(二)斯く傳道者が自ら聖靈に關したりと思ふことは聖書の成文よりも勝れたるものなりとの説(三)教會の傳説儀式は無益にして理に反れるものな



り其人の信仰のみ救ふに至る道なれば嬰兒洗禮は是れ等の無益なる儀式中最も甚しきものなりとの説以上の如き熱狂の實際的結果は曾て示したる如く一千五百二十四年セルマンの百姓一揆となり又彼等がルーテルの惨忍なる勧誘に従ひて暴行を始めた時其領主に鎮壓せられたることも其結果の一と數ふべし然れどもムンゼルの教を奉ずる

(ムンゼンは百姓一揆の首領なり領主困りてルーテルに鎮壓することを相談せり其教は人の権利は同等なり教會を破壊してもよいと云ふと社會同等の主義なり)

ものは強て嬰兒の再洗を主張せず又分派の教會をも立てざりき彼等は悉く曖昧不可思議なる言語を用ひ苦しみのキリストは眞に習ふべき模範なりと叱咤しルーテルは温和なる權謀を取れりと論せり

スイスに於ける該派の狀態は餘りに異なるものありきズキングリーと共に働きたる人々の中有力なるもの數人漸次に分派を造り自宅に於て禮拜することを始めければ多くの職人等は驚き怪みて其周圍に集まり此分派會衆は使徒的會衆を作

るを以て其理想としたり此理想はズキングリー教會を國立となす人々とは調和せざるものなり該會衆は間もなく嬰兒洗禮の有効なることに疑を入れ始めたり嬰兒の洗禮を拒みたる兩親も少なからざりしが是等の兩親は政府より教會放逐の嚴命を受けたり斯く人心恐々たる折柄ヤコブ、ブラウロツクなるもの其牧師長グレベルに請願して眞の洗禮なるものを受けたり、プロウロツクは自等此洗禮を受け他ものものに洗禮を施すことを始めたり、如斯して第一のアナバプテスト會衆なる者組織されにき去れど此運動は全體より云へば温和なるものなりき暴力を用ひて此思想を人に強ふることを考へたるものは一人もあらざりきムンゼルの騒動とは著しく其狀態を異にし是等のアナバプテストは平和と苦痛は缺くべからざる信徒の理想と考へたり此運動はスエスより南部セルマンに蔓延して茲に不平激昂せる下等社會に歡迎せられたりしが上等社會の人も多少之を賛成準奉したるものもありき又ニウレンベルグ、アウクスベルグ、モラビヤには殊に其勢力強大なりき

此運動の劇烈なる處にてはムンゼル其他首領輩を死罰に處したるかために只一



時困難を來したるに過ぎず熱心なる運動者はセルマン、スエス、オランダ至る所に其確信的教理を傳派することを怠らずして勇悍なる首領レカシトが只管待構へたる危期はウキストハリヤのモンステルに起れり、一千五百三十二年より同三十五年まで該派はルーテル派の牧師ロツトマン其他數人の有力なる市民の助を得て其力大に勃興しレージンの仕立屋ヨハン、ボーコルドを首領と仰ぎ世間によく知れたるは或る本名よりも寧ろレデラジョンと云ふ別名なり官吏を廢免し此都府は全く此派の掌中に掌握せられたり、前官吏の代りには無學なる職工百姓の如きものアナハフテスト派に擧げられて任官したりければ市民は斯くの如き横暴を非認して頻りに抗したるを以て抗議せるものは冬の中ばに神を敬はざるものを放逐せよとの叫聲喧しく一も二もなく悉く放逐せられたり是等の熱狂徒は只々其已に得たるものを保んとしたるのみならず更に進てムンステルを中心として世界を制服せんと企てたり一千五百三十四年四月にムンステルは忽ちフォルデック伯爵の圍み攻むる所となりたれば曾て放逐せられたる監督マレンスン只三十人を以て自ら第三のギデオンを氣取り圍を衝て出て一組悉く粉碎せられたりボ

コールトは今や無上の權勢を掌握し自らタピテの位につくものなりと稱へ新らしきシオンに於て王者の名譽と絶對的權威を自らの手に握らんことを求めたり彼は天よりの默示を受けたりと稱し極めて無法亂暴なる行爲をなして憚る所なかりき彼は斯かる果斷を以て多妻制度を認可し自ら四人の妻を娶りて其一人をば一時の忿怒に乗じて通交頻繁なる市街に於て其の首を切斷せりきかゝる放蕩の舉動を公然是認したる結果は自然にムンステルをして十二ヶ月の間放蕩無頼の場所とならしめたり此所は頑固に抵抗したれども一千五百三十五年六月二十四日遂に攻圍軍の取る所となり翌年一月ポコルド及其部下の著しきもの數人は赤く焼たる鐵棒を以て殘酷なる苦みを受け市中に於て死刑に處せられたり、ムンステルに於ける此の爆發はアナハフテスト運動に取りては實に危かりき是より後政權を取るものは至る所極力彼等を鎮壓する方針を取りたるを以て彼等再び政治上の勢力を占むることなくして止み又ムンステルの圍にはローマ教徒も新教徒もかゝる激烈なる熱狂を敵と認め甚しく之を憎み且恐るゝの點に於て新舊兩教會共其意見を同じくすることを示したり、



然れども早き頃のアナハプテストの教は自然に前段の如き行爲の法行を生せしむるの結果に至りたるものなり、彼等の首領か其歸依者に示したる無垢のキリスト教會と云ふ燦爛たる思想ははしなく極めて憎むべき不道德を以て汚れたる一分派となり果てたり、彼等は實に聖書を是認したれども只アナハプテスト的見解を以て之を是認し、其正當の解釋は只彼等の豫言者の解がまゝに任せたり、彼等は同胞全權主義の社會を組織して千年王國の發端を作らんとしたるが故に、彼らの君主は即神の代表者なれば全地の主宰者なりと思ふに至れり、去りなから是等の夢想と偽説とは極めて劣等兇暴なる情肉の發動を制止するの力なかりき、一切の誓約を禁止したるの結果は遂に社會人事の約束を破ることを憚らざる氣風を醸成し、ムンステルのアナハプテストの歴史に現はれたる暴行流血は人間罪惡の歴史上稀なるものなり、彼等はムンステルの失敗に懲りたるにや、其後社會上政治上の安寧を妨害するが如き教を傳ふことを止めたりと雖も、教會の中心的眞理を亂暴に抗撃することを止めざりき、アナハプテスト中の一派はルーテルの説教を痛く憎みたるがために、原罪と贖罪の教理を斥けて、人間意志の自由を強

く主張し、德行さへ治まれば人は己れの力を以て救はるべき能力あるものなりとまで論ずるに至れり、彼等は専ら信仰によりて救はる、説を攻撃し、又是よりも更に強硬なる豫撰説を斥け、神惠のみにては足らざる所ありと主張せり、此派の中強き純理説を主張するものは我等の主の固有的神性を拒みたり、去れど該派中には神秘的に傾きたるものもありき、彼等は人間現在の有様より觀すれば、腐敗墮落したるものなれど、罪惡の穢れは人間の肉に及ぼしたるまでのことにして、人間の内部の精神には及ぼさざるものとの深き信念より、其説を作り出せり、肉と靈とは斯相反したるものなれど、我等の主は是れを調和することを成遂げ玉へり、彼等は此點に於て又誤れり、彼等は此二つのものを調和するには、我等の主自ら罪なきものならざるべからずと主張したれど、彼等の教によれば、我等の主の人性は處女マリヤより受けたる血肉にあらずして一種異様なものなりと云へり、此一派は豫撰の説に於ては極めて強硬なる意見を有しか、熱狂者の常として生れ變りたる人は罪を犯すこと能はざるものなれば、其外に見へる行は如何なる有様にもせよ常に聖靈の宮となり居るものなりと云へり、アナハプテスト中或人は宇宙神教説



を唱へ悪魔も途には救るべしと云へり或人は死と審判日の間靈魂は眠るものなりとも云ひ又多妻説を辨護して之を實行するものも少なからざりしか、る教は大古の已に滅亡したる制度を取りて新説を立て神の法も一様に自由にせんとするものなり永く存在すること能はず又高尚なる業をなす能はざるは固より當然なり、

第二 メンノー派

當時混亂の世の中なりければ諸派奮然として起る勢の然らしむる所にしてアナバプテストが少しく其撃烈なる運動を休み居る間に忽ち名もなき所より第二の宗派起り世人の耳目を鼓動せり之は幾分かアナハプテストに似たる所あり其名をメンノー派と云ふは畢竟其重なる首領メンノー、シモンズに因たるものにして此人はフリースランドのウキットマルスンの牧師なりしが其實此運動は此人の首領たりし以前に已に始まりたりき彼等の主義とする所は實にズキリツクの不平黨の會衆に似たるものにして即彼の不平黨は自ら信仰を告白し得るもののみを授洗したり去れど彼れ等嬰兒洗禮を以て悪魔と法王の尤も恐ろしき發明なり

と唱へたれども彼れ等の重する所は教理よりも寧ろ實行にありき彼等は使徒的教會に於て見るべからざるものは悉く其禮拜式中にあるべからざるものとして除き去り有給の聖職十分一稅政治上の職務を帯ふること刀劍を用ふること誓約をなすこと等を悉く禁止し使徒的禁令を執行して財産共有制を創立せんことを願ひり、彼等は昔の十五世紀頃のワルデン説より幾分か其の説を續きたるものと思ふ人あれど事實なるや否や確證なし去れど其組織體となれるは一千五百三十六年頃即メンノーの時より始まりとのことなり此メンノー、シモンズは曾て新約書の勉強に多くの時と力を費し宗教改革者輩の著作と運動を熟知したり年四十年にして此派の實際的創立者となり、一千五百六十一年彼の死するに至るまでオランダに於て其總理の職務を取りたり、メンノーは曾て牧師たりしか後ウキットマルスンの教會を牧し其信する所の思想稍成熟するに至りて其教會職を辭し此派を組織することに著手せり此頃アナバプテスト中の一派にしてオベナイト派なるもの残りありしか之は其説のために迫害を受けることを喜ぶものなりき偕てメンノーは此オベナイト派に屬したり此派のものは其壓制者に刀劍を以て抵抗す



ることを拒みたるのみならず、當時の多くの熱狂者輩とは大に趣を異にして地上に千年王國あることを望まざりき、メンノーは此派の首領の一人となり、壓制せられ散在せる中間の中に流浪し、又特に其天倫の雄辯と宗教的著述によりて大に其同社會の信仰弱きものを助け、又宗教的生活の模範を示し、教理教訓等に於て甚だしき調子外れに至らざらしむることを務めたり。彼は獨立の氣骨ある思想家にあらざりしかども、其人物著作を愛するもの後世に至るまで絶へることなく、是が爲めに此の人の名を以て稱せられたる運動中に第一等を以て押に至り、又分派の通弊としてメンノー派も又自ら太古のクリスチャンと同じものなりと唱へたりと雖も、彼等は力を極めて其同輩たるアナハフラストの暴戾なる熱狂を避んことに勤めたり。メンノーは人間の學問を卑視すと自ら唱ひ、當時行れたる神學上の言語は大方棄て、用ひざりき去れど、彼は彼の信仰を著述したる成文なくんば、其運動の根據を維持する能はざることを悟れり。彼の死後二人の弟子リスとケラルド一千五百八十年にウオタローウ信仰條なるものを編纂したり、之は多くの疑問をさだむる場合に彼れ等の信條の公式と認められにき、始めに聖三一とインカルテ

ーションの教義を信することを漠然と云ひ現はし次にアダムの罪は其子孫に遺傳せらるれども、只罪の傾むき各種人異の性質中に幾分か注入せられたるのみにして之が爲に意志權衡を亂したるまでにて破懐する迄では至らざりきとキリストの死は憐にして其效徳は全人類に及ほし、斯まで信して死したるもの、外誰も之を受くること能はざるものなしと云へり、メンノー派の説によれば、信仰は罪の赦と義とせらる、この客觀的根元にして即愛によりて働く信仰なり、神の誠の教會とはかゝる信者のみを含むものなり、サクラメントは只教會の會員たるの徴なりと云ふ點に於てはズキンクリー派と同説なり、嬰兒洗禮を非認したる主として聖書に直接の證據なしと云ふ理由に基きたるものなれど、メンノーは元罪説に一種異様の解釋を與へたるが故に、此の禮典を其の教會制度の中に合する能はざるに至れり、彼は此派の正則の教職に依託したれど、彼等の成す所教ふる所は悉く神の言の文字に符合すべきことを嚴重に訓令したり、メンノーは神の言に於て禁せられざる限りは何事も政府の官吏に背くべからずと教へたれども、彼の目にて見れば、政府の官職は大に福音と靈の國の精神に背くものなれば、誠のクリスチャ



ンは政府の官吏となりて清き良心を汚すの恐あり況んや戦争に出る如きは尤も不都合なりと教たり、

メンノー派は彼の死する前より已に二派に分れ粗暴なるメンノー派と文雅なるメンノー派と名けられたり宗教改革時代の分派の常として此二派の中又夫々分裂を生じたる彼等が禁せられたるアナハプテスト派と關係せりと云ふ廉を以て數年間迫害せられたれどもオランダに於てはレンジ侯ウキリヤムより幾分の恩顧を受け一千六百二十六年に於て遂に正式の認可を受けたりメンノー派はオランダ、ゼルマンを中心としてスキス、ラタネード、モラビヤに蔓延し次の世紀に至りては彼等の温和高尚なる子孫北米合衆國に移り來り宗教改革時代の是らの熱狂的宗派の歴史は實際如何なる教訓を與ふるかは是れ實に見遁すべからざる問題なりこれは教會の歴史中各時代を通じて反覆現發する所因なり確信的精神にして始めはコニケアン派の放逸に現はれ彼等は肉體の清きことを卑たり又彼のモンタニストも等しく此精神を現はし自ら聖靈の特別なる默示を得たりと唱狂の状態を演じたり同じ精神は今も猶教會の中にあり終りまで反覆現發せんとす

るもの、如し現世紀に現れたるモルモン宗七日目聖日派、アーピング派の如き之に次て起るものは必ず等しく熱狂的にして危険なるものならん各自誠のキリストの教會なりと主張し使徒の時より連綿たる默示を有せりと唱へ各千年王國を續ぐものなりと稱し實しやかに主の再來近きにありと明に風聽す各派とも均しく聖公會を嘲けり世界を改宗せしむるには不充分なりと云ふ又或は聖公會はキリスト眞の信仰より脱落したるものなりと云ふ然れども是等の諸派は皆教會の制服を借りて其名目のみに於て假面を被り使徒あり預言者あり牧師長あり監督あり又教會に果だ行はれたることなき肉欲的儀式を備ふるも往々少ならず幸にも後に現はれたる宗派にはアナハプテストの如き過激なるものなしと雖も其傾向は少しも變せざるなり之は個人主義を以て組織ある權位を轉覆せんとするものなれば若し之を用捨して其まゝに發達せしむる時は曾てありしと同様の放蕩無頼に陥るは必然の勢なり、

第三 ソシニヤン派

以上掲げ來りし分派は改革時代極端なる社會黨とも云ふべきものなりき之らの



分派の首領達は背理危険の教理を主張したりと雖も彼等の主眼とする所は寧ろ當時の社會的生活を改造するにありき今より研究せんとする一派は當時の教義的思想を改革することを企てたるものなり此改革は實に根本的變化にしてローマ教徒も改革論者も共に辯護したる根本的教義を顛覆せんとしたるものなり是即アンテトリニタリアン(聖三一に反對するもの)と云ふ意即ソシニャン派は其名のよりて起る所はファスト、ソシナスと云ふ人にあり此人は只彼等の信條の特色なる所を定めたるまでにして實際の創立者にはあらざりき蓋はソシナス主義は正當に云へば其起りし所はイタリヤにしてルーテルの運動爆發せる時よりも以前に已に不信仰懷疑の精神イタリヤに充ち溢れ居りたればなりゼロームザンチは自らイタリヤ人なれども三一に付て其國人の異端説を拘けるものあることを慨嘆しブリシゲルに送りたる書中に次の如く云へりスベエンには雞を産みイタリヤには卵を産し今我等は雞雞の啼聲を聞きつゝありと從來キリスト教の超自然的要素は大古より境界線嚴重にして容易に不度なる批評の入ることを赦さざりしものなりしがソシニャン派の人は或時は異教の著書に更けり又は知識

の自由なることを自覺して感喜置く能はず是等の神靈なる境界線を躍り越ひ又足下に蹂躪したり去れど始の頃は首領の中にアナバプテストの思想に感染したるものありきジョンデンクと云ふ純理論者のアナハフテストは三一の教義を駁撃してキリストの人性のみを信仰を立てんことを勧めたり又此派の或人々はアリウスの誤れる信仰を適用して之と同様なる異端を唱へたり又或一部の人はサベリユースの説を唱へたり曾て記したる如く始めて三一の教理を攻撃したる者はスベエンの醫者セルベトスなり其著書は一千五百三十九年に現はれたり此人は一千五百二十九年チャレスに供奉してイタリヤに行き翌年ベセルに住居を定めて宗教改革論者に加盟したり多くの人は宗教界の状態を見て満足せず信條教理の根本をして教會を改革せんと憤慨きたる折柄なればセルベトス説は忽ち四方に蔓延して是等の不平等の歡心を買ふたり前章に云へる如くバルナルデノウ、ヲキノは世に行はれたる神學に反對して十字軍の先頭たりしものなり又セルベトスは一千五百五十三年十月廿七日ゼチバに於て果敢なき最後を遂げ其極端なる新説を立ちたる報を受けたることも已に述べたり此頃大都府の中に孤兒院